

秋田県文化財調査報告書第211集

国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財調査報告書IV

—上ノ山I遺跡第2次調査—

1991・3

秋田県教育委員会

国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財調査報告書IV

—上ノ山 I 遺跡第2次調査—

1991・3

秋田県教育委員会

序

豊かな自然に恵まれた秋田県には、我々の先人達が営々と築き上げてきた歴史があります。地中に刻まれた埋蔵文化財もその歴史遺産の一つであります。

このたび、国道103号道路改良工事に係り、大館市山館に所在する上ノ山Ⅰ遺跡が昭和62年にひき続き発掘調査の対象となりました。

調査の結果、縄文時代（前期末～中期初）の竪穴住居跡やフ拉斯コ状土坑、弥生時代の土坑など多くの遺構とそれに伴う遺物が発見され、また、縄文時代の早期・前期・中期・晚期の土器などが出土しました。

本書は、これらの成果をまとめたものであり、地域史解明と文化財に対する理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後に、本調査及び報告書作成に際し、ご協力いただきました秋田県土木部、北秋田土木事務所、大館市教育委員会、大館市上川沿公民館並びに関係各位に対し深く感謝の意を表します。

平成3年3月15日

秋田県教育委員会

教育長 橋 本 顯 信

例　　言

- 1 本書は、県土木部北秋田土木事務所が昭和55年度より国の補助事業として進めてきた国道改良工事(国道103号大館南バイパス)に伴い、計画路線内にかかり消滅する上ノ山Ⅰ遺跡の第2次発掘調査記録である。
- 2 本書で報告する遺跡の立地する仮称上ノ山台地上には、昭和49年から昭和51年に3次にわたり発掘調査された上ノ山遺跡が所在する。この調査成果を収載した昭和54年3月刊行の『大館市史』第1巻では、それが上ノ山遺跡第1次調査区から第3次調査区として記述されているが、昭和51年3月刊行の『秋田県遺跡地図』や昭和61年3月刊行の『本道端遺跡発掘調査報告書』では、上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡・上ノ山Ⅲ遺跡と記載されている。
- 3 調査は、秋田県埋蔵文化財センターが平成2年9月3日から同年10月19日まで実施した。
- 4 遺跡の発掘調査・資料整理に際し、次の諸氏・諸機関から御教示を賜った。記して謝意を表する。

荒川保徳(大館市遊会々長)　板橋範芳(大館市教育委員会主査)　鶴谷　豊(郷土史家)
大館市教育委員会　上川沿公民館

- 5 本書の執筆は、次のように分担した。

第1章、第3章第1節・第2節、第4章第1節の土器・土製品
第5章1.(1)・(3)、2 ····· 柴田　陽一郎
第2章、第4章第1節の石器・石製品 第2節(3)石器 (4)石製品
第5章1.(2) ····· 桜田　隆
第3章第3節 ····· 石川　真一

凡　　例

- 1 竪穴住居跡の柱穴に付した数字は、床面からの深さを表す。(単位cm)
- 2 各遺構に付している略記号は次の通りである。

S I ····· 竪穴住居跡	S K ····· 土坑	S K I ····· 竪穴状遺構
S K F ····· フラスコ状(袋状)土坑	S T ····· 排て場	S D ····· 溝状遺構

S N.....焼土遺構

- 3 上ノ山 I 遺跡から出土した土器のうち、縄文時代前期の円筒土器下層式土器 a 類～d 類は円筒下層 a 式土器～d 式土器、縄文時代中期の円筒土器上層式土器 a ～b 類は円筒上層 a 式土器～b 式土器と略記する。
- 4 上ノ山 I 遺跡の土層説明中「軽石」、とあるのは軽石質火山灰層とその二次堆積物を指す。
- 5 各遺物の実測図と遺構の図面に付してある記号・シンボルマークは次の通りである。
R P (●) …土器・土製品 R Q (▲) …石器・石製品 S …礫
- 6 遺跡の土層の色調の記載は「新版 標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。
- 7 掘図中に使用したスクリーントーンは、以下の通りである。



四石・クボミ



磨石・スリ



砾石器・タタキ

遺構内外の石器と石製品は形態等から下記のように分類した。

石鎌 I 類：凹基無茎式 II 類：平基無茎式

III 類：平基両側刃基部抉入(所謂アメリカ)式

IV 類：凸基有茎式 V 類：円基無茎式

石槍 I 類：凸レンズ状の断面形を呈し、表面の両側縁に二次調整を施す

II 類：基部を欠損するが表裏ともに丁寧な押圧剥離が加えられ、薄い凸レンズ状の断面を呈する

III 類：幅広で尖頭部・基部ともに尖り、厚い凸レンズ状の断面を呈する

IV 類：基部が丸みを持ち、厚い凸レンズ状の断面を呈する

石錐 I 類：一端が細くなる剝片を利用して、二次調整を両側縁の表裏面、もしくは表面のみ施したもの

II 類：あまり形の整っていない多角形の剝片の2～3辺に二次調整を加えて錐部を作出したもの

III 類：棒状のもの

寛状石器

I 類：平面形が歯形を呈し直刃・片刃

II 類：平面形が歯形を呈し丸刃・片刃

III 類：平面形が短冊形・長楕円形を呈し直刃・両刃

- IV類：平面形が短冊形・長椭円形を呈し丸刃・両刃
- V類：平面形が短冊形・長椭円形を呈し丸刃・片刃
- 石匙 I類：縦型 I-A類：ほぼ平行する直線的な2つの側縁をもつもの
I-B類：直線的な2側縁をもつが先端で尖るもの
I-C類：側縁が曲線を描くもの
- II類：横型 II-A類：刃部が直線的なもの II-B類：曲線的なもの
- III類：斜型 III-A類：刃部が直線的なもの III-B類：曲線的なもの
- 搔器 I類：裏面(大部分が主要剝離面)が反っているもの
II類：裏面(大部分が主要剝離面)が反っていないもの
- 削器 I類：細長くて分厚い剝片の両側縁に急角度の刃部を作出したもの
II類：不整な椭円形・円形を呈する剝片の側縁に弧状の刃部を作出したもの
III類：不定形状剝片の1側縁に直線的な刃部を作出したもの
- 磨製石斧 I類：円刃・両凸刃 II類：円刃・弱凸強凸片刃 III類：偏刃・両凸刃
- 半円状扁平打製石器
- I類：素材の全縁辺を打ち欠いたもの
II類：素材の全縁辺を打ち欠き、1縁辺(刃部)の両側縁を擦ったもの(所謂石鋸)
III類：素材の鋭利な下縁辺を残して刃部とし、他の3縁辺を打ち欠いたもの
IV類：素材の1縁辺を打ち欠いて刃部を作出したもの
V類：素材の1縁辺を打ち欠いて刃部を作出し、刃部底面を擦ったもの
VI類：素材の1縁辺を打ち欠いて刃部を作出し、側辺に抉りを入れたもの
VII類：素材の1縁辺を打ち欠いて刃部を作出し、側辺に抉りを入れ刃部を擦ったもの
VIII類：素材の全縁辺を打ち欠いており、刃部を作出したあと全面を擦ったもの
- 石鍤 I類：長椭円形の素材の長軸の両端に抉りをもつもの
II類：長椭円形の素材の短軸の両端に抉りをもつもの
III類：円形の素材の両端に抉りをもつもの
IV類：長椭円形の長短両軸の両端に抉りをもつもの
- 凹石 I類：凹面が両面 II類：凹面が片面のみ
- 円盤状石製品
- I類：素材の周縁全てを打ち欠いて整形しているもの
II類：素材の周縁を打ち欠いた後、全面研磨しているもの
III類：素材の周縁を全面研磨し、中央部に貫通孔を穿ったもの

目 次

序

例言

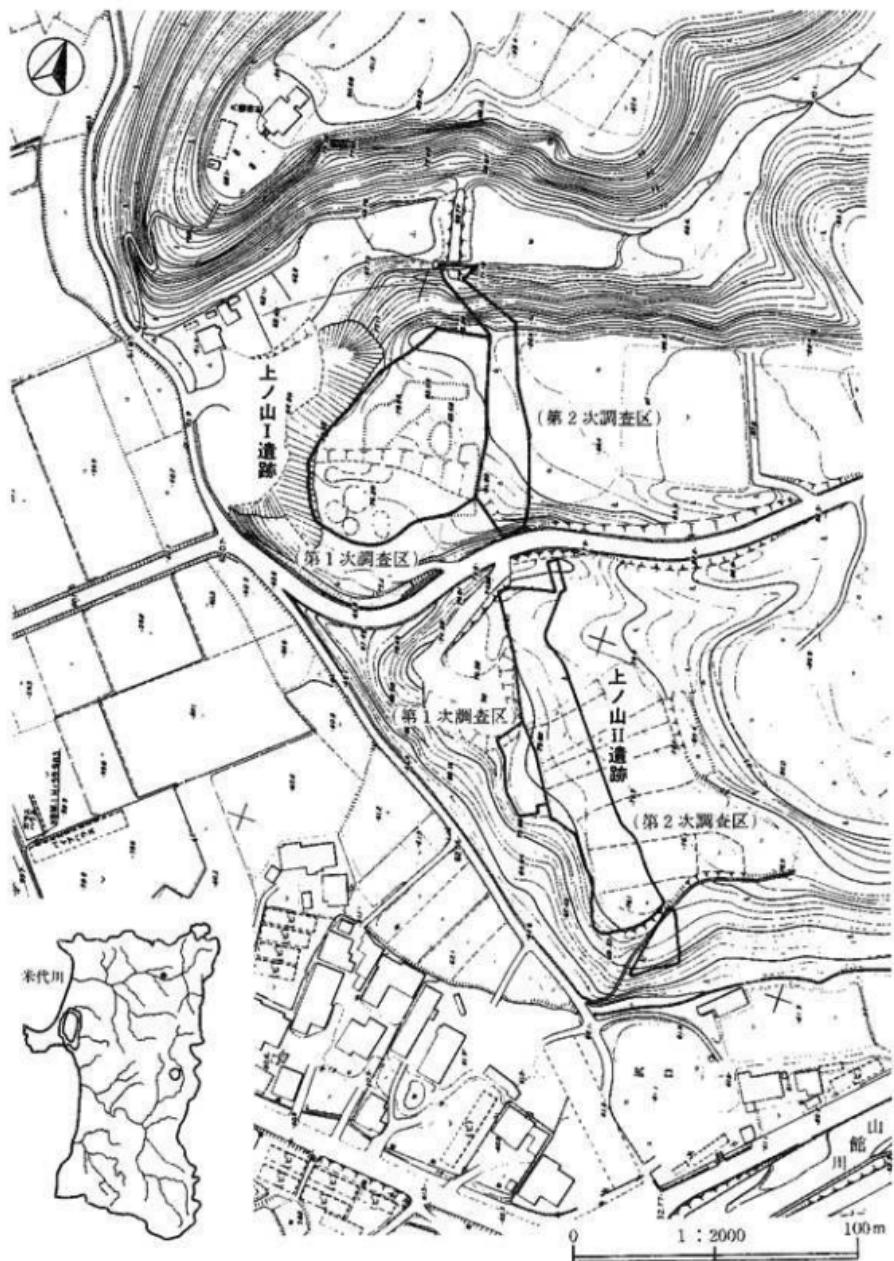
凡例

目次

第1章 はじめに ······	1
第1節 発掘調査に至るまで ······	1
第2節 調査の組織と構成 ······	1
第2章 遺跡の立地と環境 ······	2
第1節 遺跡の位置と立地 ······	2
第2節 歴史的環境 ······	2
第3章 発掘調査の概要 ······	5
第1節 遺跡の概観 ······	5
第2節 調査の方法 ······	5
第3節 調査経過 ······	6
第4章 調査の記録 ······	10
第1節 検出遺構と出土遺物 ······	10
1. 繩文時代	
(1) 壓穴住居跡	
(2) フラスコ状(袋状)土坑	
(3) 土坑	
(4) 壓穴状遺構	
(5) 烧土遺構	
2. 弥生時代	
(1) 土坑	
3. 時期不明	
(1) 溝跡	
第2節 遺構外出土遺物 ······	71
1. 土器	
2. 土製品	
3. 石器	
4. 石製品	
第5章 まとめ ······	113

付記 自然科学的分析

図版



第1図 遺跡の位置と周辺地形図

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

国道103号道路改良工事(通称、大館南バイパス)は、大館市内の交通混雑の緩和を目指し、昭和55年より国の補助事業として進められている。大館市山館から片山(根下戸)を結ぶ延長7,677mの計画路線内には、教育庁文化課及び秋田県埋蔵文化財センターによる分布調査、範囲確認調査の結果、南から上ノ山II遺跡、上ノ山I遺跡、飼釣遺跡、山王岱遺跡、上野遺跡、池内遺跡、荻ノ台遺跡の7遺跡が存在することが明らかとなっている。教育庁文化課は、原因者である県土木部道路課との協議の結果、「範囲確認調査の結果、記録保存の必要なものについては発掘調査を実施すべき」ことを回答した。

これを受け、秋田県埋蔵文化財センターは、昭和62年に上ノ山I遺跡、上ノ山II遺跡、山王岱遺跡の発掘調査を実施し、昭和63年に調査報告書、概報を刊行している。

同昭和63年、道路改良工事の計画変更が、拡幅という形で示され、昭和62年に調査した3遺跡についても追加調査の必要が生じることとなった。これにより、用地買収の終了している上ノ山II遺跡と山王岱遺跡の第2次調査が平成元年に実施されることになった。そして、平成2年には飼釣遺跡と上ノ山I遺跡第2次調査が実施された。また、同年には山王岱遺跡(拡幅部分)と上野遺跡の範囲確認調査も実施された。

第2節 調査の組織と構成

所 在 地	大館市山館字上ノ山56-1外
調査期間	平成2年9月3日～10月19日
調査目的	国道103号道路改良工事に係る事前調査
調査面積	840m ²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	柴田陽一郎(秋田県埋蔵文化財センター文化財主任) 石川 真一(秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)
総務担当者	佐田 茂(秋田県埋蔵文化財センター主事) 高橋忠太郎(秋田県埋蔵文化財センター主事)
調査協力機関	県土木部北秋田土木事務所、大館市教育委員会

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と立地

上ノ山Ⅰ遺跡は、秋田県北東部の大館市山館に所在する。この位置を鉄道で言えば、JR奥羽本線大館駅から南南東約6.5km、最寄駅ではJR花輪線真田駅(比内町)の北東約1.3kmにある。遺跡の占地する山館は、大館市東部に位置する高森(海拔593m)を中心とする山地の縁辺部に位置する。地質的にこの山地は、新第三系大滝層あるいは大葛層以下の地層の構造形態に規制され高森を中点とする半径およそ5kmの同心円を描くような形状を示している。遺跡地は高森から見れば南西縁辺部にあたり、ここには未発達ながらも十和田火山噴出物とその二次堆積物からなる関上段丘が認められる。上ノ山Ⅰ遺跡周辺における関上段丘面は、南東に隣接する上ノ山Ⅱ遺跡、北西に隣接する中世城館の山館跡を含む標高およそ95m未満の狭い範囲内に限られている。

調査区での標高は80~86mで、眼下を、比高差約25mの沖積地を挟んで米代川が北西流している。米代川までの距離は500m余りである。台地上には2段の平坦面があり、下位平坦面と上位平坦面西側の一部は、昭和62年に、発掘調査(第1次)されており、今回(第2次)の調査区はこの東側に隣接する部分である。

第2節 歴史的環境

周辺遺跡の概観については、上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡の第1次調査報告書において詳述されている。本節では、重複を避けるため第2図に示した図幅に収まる範囲内で、同遺跡第1次調査以降に発掘調査あるいは発見された遺跡について触れてみたい。

昭和63年には、大館市教育委員会により発掘調査が行われた山王台遺跡(6)がある。同遺跡は中世城館鈎鉢館(=山王岱遺跡)の北側に隣接している。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡が9軒検出され、十和田火山起源の火山灰の堆積状況から、遺跡の下限時期を10世紀前半に置くことができるという。

平成元年には下記の遺跡が調査・発見されている。

国道103号道路改良事業関係では、山王岱遺跡(5)が昭和62年に引き続き、平成元年に第2次調査が実施されている。第1次調査で確認した3条の空堀の延長部分調査及び、平安時代の竪穴住居跡1軒などが検出されている。また山王岱遺跡以西の分布・範囲確認調査を行い、周



第2図 周辺遺跡分布図

知の遺跡である萩の台遺跡(35)との間に縄文時代の上野遺跡(7)が新たに確認されている。諏訪台C遺跡(8)は、糸迦内地区農免農道整備事業に係る発掘調査である。殊に、県内では検出例の少ない弥生時代初頭(砂沢期)の堅穴住居跡が4軒確認されたことの意義には大きいものがある。また、国道7号道路改良事業に係り、周知の遺跡である片山館コ遺跡(9)も発掘調査され、館南端の空堀の一部が検出されている。

第1表 上ノ山I 遺跡周辺の主な遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	上ノ山I	縄文(早~中、晚)、弥生、平安	44	野沢袋A	縄文(中、後)
2	上ノ山II	縄文(早~晩)	45	冷水山根II	縄文(前)
3	山館	中世	46	冷水山根I	縄文(前、中)
4	飼釣館	中世	47	野沢袋B	縄文、平安
5	王山岱	縄文、平安、4と重複	48	下聖I	縄文(中~後)
6	山王台	平安	49	下聖II	縄文(前)
7	上野	縄文	50	市川	平安
8	諏訪台C	縄文(後~晩)弥生、平安	51	本道端	縄文(前、中)
9	片山館コ	中世、弥生~平安	52	横沢	縄文(前)
10	横沢	縄文(早、中、後)、平安	53	袖ノ沢	平安
11	野沢袋C	縄文(早、前)	54	宿内中袋	縄文(前)
12	鳶ヶ長根III	縄文(早、晩)	55	味噌内	縄文(後)
13	鳶ヶ長根IV	縄文(早、後)	56	珠数据	縄文(晩)
14	本郷下	縄文(晩)	57	細越	平安~
15	大森	縄文(前)	58	畠沢	縄文(晩)
16	十三森	縄文	59	一通	縄文(晩)
17	糸迦湖底	縄文(前~晩)	60	五輪台	縄文(晩)
18	福館・橋桁野	縄文(前、中)、弥生~平安	61	本宮	縄文(晩)
19	芝谷	地縄文(後)	62	薬師袋	平安
20	松木	縄文(前)	63	福館	
21	鍛冶屋敷I	平安	64	七ツ館	
22	鍛冶屋敷II	縄文(後)	65	花岡城	
23	沼館	縄文(後)	66	女目館	
24	赤石沢	縄文(中~晩)	67	松木高館	
25	餅田屋布添	縄文(前)	68	糸迦内館	
26	季堀沢	縄文(前、中)	69	沼館	
27	大茂内	縄文(晩)	70	押館	
28	諏訪台B	平安	71	土飛山館	
29	諏訪台A	縄文(中)	72	大熊城	
30	小茂内沢	縄文	73	小船花館	
31	塚の下	縄文(後)、平安	74	樅崎館	
32	小曾沢	縄文(晩)	75	大披館	
33	茂内	縄文(前)	76	大子内館	
34	長根山公園	縄文(晩)	77	杉沢館	
35	萩の台	縄文(中)	78	前田館	
36	池内B	縄文(前~後)	79	本宮館	
37	池内A	平安	80	新田館	
38	羽立	縄文(晩)	81	八木橋城	
39	毛沢	縄文	82	笛楚城	
40	電毛袋	縄文(中、後)、平安	83	長岡城	
41	桜殿	縄文(中)	84	真館	
42	中山	平安	85	大滝古館	
43	野沢袋D	縄文(前?)			

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

上ノ山I遺跡が、関上段丘と呼ばれる第四系火山噴出物からなる台地端部に立地していることは、前述のとおりである。この台地は概ね北東から南西に緩く傾斜しており、今回の調査区上部平坦面の地山面での最高位は北端部86.0m、最低位は南端部では85.0mである。また南西斜面に位置する捨て場の最低位は80.0mで台地南端部との比高差は5mである(第1図、第4図)。

遺跡内には下位平坦面と上位平坦面の2段が存在する(第4図)。昭和62年の第1次調査では上位平坦面の西側と下位平坦面を調査し、多くの竪穴住居跡と土坑などを検出している。今回の第2次調査は、上位平坦面の東寄り部分が調査対象区である。

現況は、調査前までは果樹園として利用されていた所で、調査区内の隨所で現代の削平・攪乱が確認された。特に、北側、南側では水道管の埋設や果樹等の植栽による攪乱、バックホーによる削平が造構にまで及んでいた所があった。南端部の竪穴住居跡の斜面寄りの一部は、かなり削平を受けていた。

遺跡の土層については、調査区を南北に縦断するLKラインの断面図を作成・観察し、堆積状況が良好なLK58グリッド杭周辺を基本とした(第4図)。それによれば、表土から地山まで7層に分層できる。本地点での土層・層厚は以下のとおりである。

第1層 黒色土(表土) 層厚10~13cm

第2層 黒色土 層厚8~10cm

第3層 大湯浮石 層厚3~6cm

第4層 黒褐色土 (弥生時代の遺物包含層) 層厚2~4cm

第5層 黒色土 (繩文時代の遺物包含層) 層厚8~10cm

第6層 褐色土+地山ブロック (地山漸移層) 層厚6~12cm

第7層 黄褐色土~明黄褐色土 (軽石質火山灰層とその二次堆積物)

第2節 調査の方法

前述のように上ノ山I遺跡第2次調査区は、第1次調査区の東側に隣接した箇所であり、検出遺構、遺物の位置関係などは第1次調査分と比較、対照の必要がある。従って第1次調査に

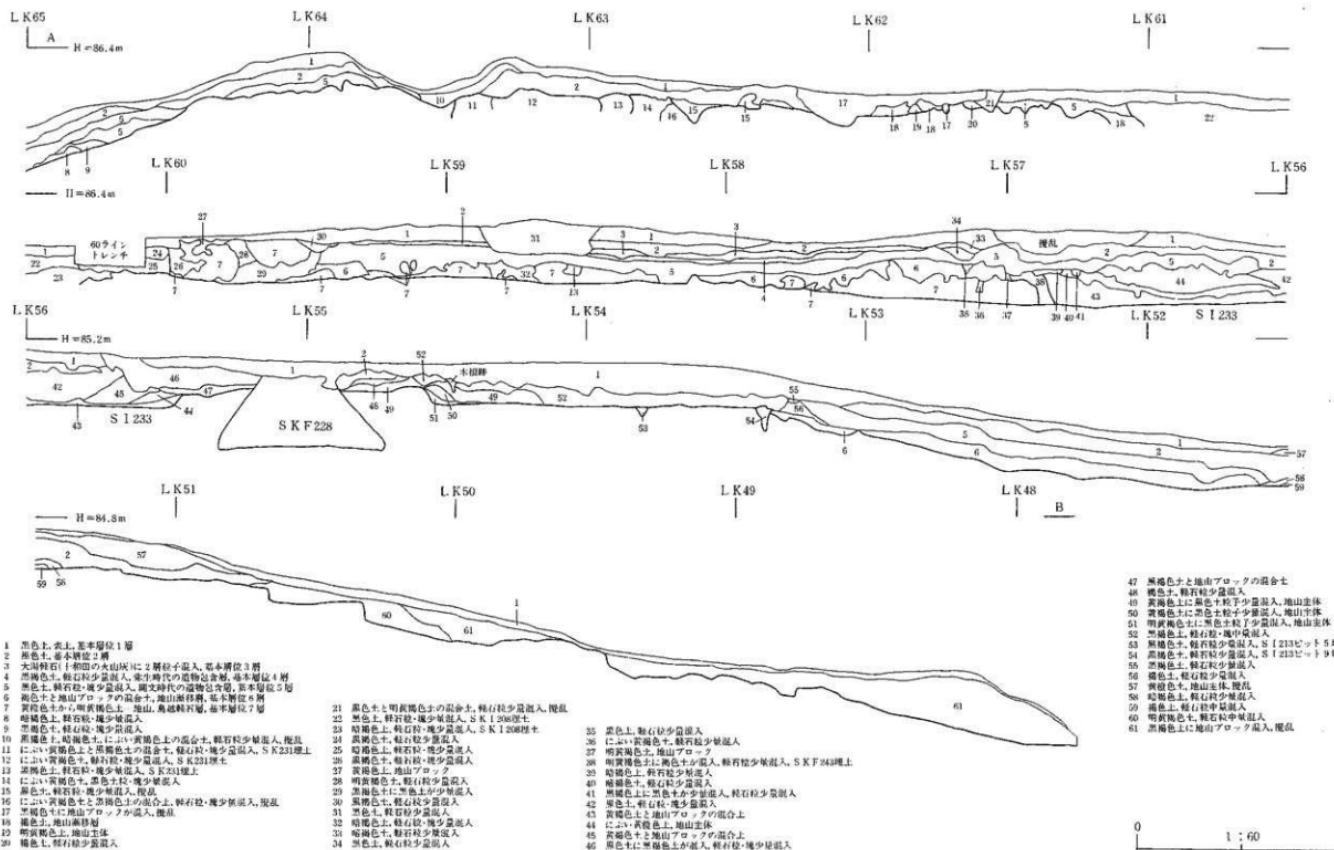
おいて採用した $4 \times 4\text{ m}$ グリッド法を踏襲し、各方眼杭に与えられるアルファベットと算用数字の組み合わせによる呼称も前例に倣った。任意の原点(中心杭NO.14-MA50)から南北方向に設定された基準線は、真北から東に $24^\circ 40'$ 偏している。

検出遺構に付される番号は、第1次調査において2桁台を使用しており、混同を避けるため第2次調査では3桁、200番以降を用いることとした。この番号は、遺構の種別を問わず一連としてある。

図面、写真などの調査の記録方法については、秋田県埋蔵文化財センターで実施している方法に準拠している。

第3節 調査経過

9月3日、本日より発掘調査開始。調査地及び登り口、プレハブ建設地の草刈りから開始した。5日、ベルトコンベアー10台を設置し、南北のLKライン、東西の50・55・60ラインに幅1mのトレンチを設定した後、粗掘を開始した。LK51~53グリッドにて土器が多数出土し、その範囲を精査した。調査区域の西側は切り立った崖となっているため、端から内側1mにトロープを張り安全策を構じた。7日から遺跡の北側から表土の掘り下げをした。遺物の出土はまばらであった。11日、50ラインの西端トレントの掘り下げを行うが、地山まで人の背丈以上の深さがあり、幅が狭く掘りにくいため、一時掘り下げを中止した。北側端から53ラインまでは粗掘を終了し、遺構の検出作業をした。北端側は攪乱が著しく、ビニールや水道管が出てきたりすることから現代の攪乱と判断した。調査区中央の東端部で溝を検出した。13日、53~66ラインの間に土坑、溝跡、性格不明遺構など11基の遺構を確認した。14日、雨。12日に続いて大雨のため作業を中止した。17日から北端部の土坑4基の半截と、土器捨て場の範囲を探るために南端部西側斜面の掘り下げをした。20日、台風のため作業は中止。夜半から雨が終日続き、現場の崖崩れが懸念されるため、北秋田土木事務所から現場を見てもらい、種々、教示をいただいた。21日、中央部L I・L J-50・51グリッド付近で竪穴住居跡を2軒確認した。北東部の土坑群の掘り下げを集中的に行うが大半がフ拉斯コ状土坑で開口部が狭いため、半截し精査が終わった所を大きく掘り下げた。25日、捨て場の掘り下げを続けている。土器・石器は斜面全体に厚く堆積しており、掘り下げに時間を要している。27日、SKF203底面より繩文前期末・円筒下層d式土器の深鉢形土器完形品が出土した。SKF203はこの他にも多数の遺物が出土しているため出土状況図を作成した。遺跡南端部の粗掘を行い、この部分が捨て場の範囲には含まれないことを確認した。これで捨て場部分を除く粗掘は全て終了した。10月1日、次々と土坑が検出されるが、中には現代の攪乱も多く含まれていた。2日、遺構の検出と同時進行



第3図 遺跡土層図(L K ライン)

で遺構の精査をひき続き行う。土坑はほとんどがフ拉斯コ状を呈しており、埋土は地山主体で地山との判別が難しく作業は思ったより進まない。5日、捨て場の掘り下げを再開した。住居跡はS I 226・227は完掘を終え、S I 213は東側の壁を追っているが判然としない。S I 232はほぼ全体を掘り下げたが、さらにその下から土坑を検出した。午後、本遺跡見学会(上川沿公民館主催)があった。8日、捨て場は50・51ラインではほぼ地山まで掘り下げたものの、52ラインには土器の出土もくまだ半分程の深さである。50ラインから土器出土状況の平面図実測に入る。9日、S I 232の壁溝を確認した。土坑は北側の土坑群の精査をほぼ終え、中央部の土坑の精査を開始した。捨て場は、50ラインから遺物の採り上げを行った。15日、S I 233の精査を開始した。北秋田土木事務所の立合いのもと、現場撤収するにあたっての留意事項をきいた。16日、捨て場はベルトを残してほぼ地山まで掘り下げを終了し、17日に捨て場に残しておいたベルトをはずした。捨て場の最深部は約250cm程である。18日、撤去準備と調査の二手に別れて作業をした。リース品の撤去、出土遺物と発掘器材などを埋蔵文化財センターへ搬送した。最後に残ったS I 233を精査をしたが、埋設土器や住居跡より古い土坑を検出し、精査は最終日まで持ち越しとなった。19日、暴風雨の中、S I 233とその下の土坑を精査、図面作成、写真撮影後、図面のチェック、補足を行い、全ての調査を終了した。

第4章 調査の記録

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡5軒、フラスコ状(袋状)土坑29基、土坑7基、竪穴状遺構2基、焼土遺構2基の計48遺構を検出し、捨て場を1ヶ所確認した。弥生時代の遺構は土坑1基のみで、他に時期不明の溝状遺構1条を検出した。

遺物は縄文時代前期～中期の土器・石器を主体に、他に縄文時代早期・晚期、弥生時代の土器・石器と、若干であるが平安時代の須恵器が出土した。

第1節 検出遺構と出土遺物

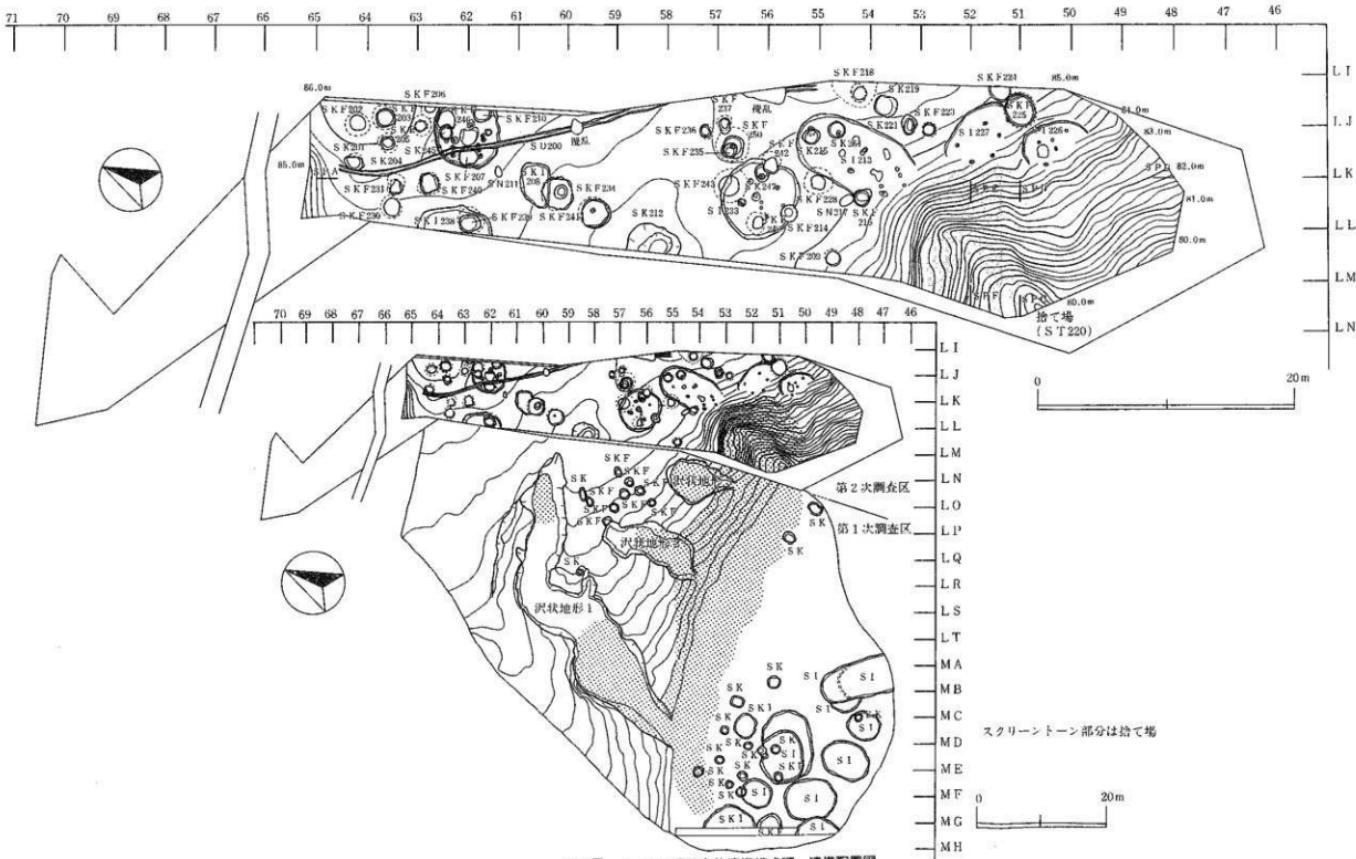
1. 縄文時代

(1)竪穴住居跡

S I 213(第5・6図、図版2)

L J 53～55、LK 53・54グリッドで検出した。住居跡の南側の一部が畠地造成による削平により失われており、全体を把握することはできないが、平面形が長楕円形を呈するものと考えられる。主軸方向はN-9°-Eである。規模はいずれも推定であるが、長軸1,090cm、短軸500cmで、壁高は35cm、面積45.48m²である。床面には、本遺構に伴う小土坑(S I 213内土坑)が1基、炉が2基、主柱穴が6本(P 1～P 6)、支柱穴が3本(P 7～P 9)ある。それぞれの規模はP 1が径30cm、P 2は径35cm、P 3は65×35cmの楕円形、P 4は径40cm、P 5は径30cm、P 6は63×30cmの楕円形である。支柱穴は径22～24cmである。小土坑は本遺構の北端にあり、規模は径70～75cmの不整楕円形で、深さ26～33cmである。小土坑からは炭化物と擂粉木状石製品、縄文土器が出土している。炉はいずれも掘り込まれており、その規模は炉1が72×53cmの楕円形で、深さ20～24cm、炉2は95～40cmの不整楕円形で深さは15～20cmである。炉1は断面の状態から、一度作り直したと推定される。本遺構の西辺南寄りにSKF 216、床面北東部にSKF 215が存在する。本遺構はSK 215、SK 216、SK 251と重複しており、SK 216に切られていることから本遺構が古く、SK 251は床面にてプランを確認したもので、その上から柱穴(P 2)が掘り込まれていることから本遺構が新しい。なお、西辺中央西側にSK 228が存在するが、SK 228の坑底部が本遺構の下に入り込むものの切り合はない、前後関係は不明である。

遺物は石器と縄文土器が埋土と床面から出土した。石器は、範状石器1点(第26図7：凡例中の分類のV類、以下同じ)、石匙2点(第26図1：I-B類、2：III-B類)、擂器3点(第26



第4図 上ノ山I遺跡全体遺構模式図、遺構配置図

図4・8：I類、5：II類)、削器2点(第26図3・6：破損品につき分類不能)、磨製石斧3点(第27図9：II類、10・11：破損品につき分類不能)、石錐1点(第28図14：IV類)、半円状扁平打製石器2点(第28図15：VII類、16：V類)、擦石4点(第28図17～20)、石皿3点(第43図116～118)、擂粉木状石製品4点(第30図27～30)、円盤状石製品2点(第27図13および破損品：III類)、石刀状石製品(柄部破片)1点(第27図12)の28点が出土し、他に剝片47点と礫16点が出土した。

土器(第10図1～13)の1・3・7～10は、狭い口縁部文様帶の下端に細く低い隆帯、もしくは絡条体の圧痕文や繩文原体の側面圧痕文を施すもので、8以外は胎土に纖維が混入する。1は深鉢形土器で、口縁部下端に綾絡文を横位に施し、胴部には縦位に撚糸文を施した後、垂下する綾絡文をほぼ等間隔に6条施している。3は頸部がくびれ、口縁部が外反する深鉢形土器で、隆帯上に矢羽状の刻目を施し、胴部には多軸絡条体を縦位に回転施文するものである。12は、口縁部から胴部上位の破片で、胴部外面にドングリ圧痕を有する土器である。地文に斜行繩文、屈曲の弱い頸部に1条の綾絡文を施文している。なお、頸部の綾絡文の上には纖維束の圧痕が見えるが、これはこの部分の胎土が横位に剥落したために顯れたものと考えられる。2は、口縁部～胴部上半しか残存しないが深鉢形土器と思われ、丸みを持つ胴部に強く内弯する短い口縁部がつく器形を呈する。文様は単節斜繩文を地文とし、口縁部には渦巻状や垂下する細い粘土紐を3条もしくは7条貼付し、頸部から胴部上半には、細い沈線で渦文・連続山形文等の文様を描いた後に、半截竹管による刺突列が加えられたものである。焼成良好で、赤褐色を呈し、胎土にはやや砂粒を混入する。大木6式に比定される土器である。4は底部下端から胴部が内弯して立ち上る鉢形土器で、無文である。胎土・焼成・色調とも2と類似する。6は底部で、外面下端と底面に同一の単節斜繩文を施文しており、内底面中央に径10mmほどの突起をもつ。胎土には纖維を混入する。13は羽状繩文を施文している土器である。本住居跡は1・3・7～10の出土土器より円筒下層d式期に構築された住居跡と考えられる。

S I 226(第7図、図版2)

L I 49・50、L J 50・51グリッドで検出した。本遺構もS I 213と同様に南西部が失われており全体を把握することはできないが、平面形が不整梢円形を呈するものと考えられ、主軸方向はN-40.5°-Wである。規模は長軸530cm(推定)、短軸350cm(推定)、壁高は60cm、面積11.74m²(推定)である。住居跡内には主柱穴が3本(P 1・3・6)、支柱穴が3本(P 2・4・6)、地床炉が1基あり、床面はほぼ平坦である。主柱穴は、P 1が径19cm、P 3が径30cm、P 6は径15cmで、支柱穴は径17～27cmである。地床炉は130×87cmの梢円形である。

遺物は石器と繩文土器が出土した。石器は、磨製石斧1点(第29図21：破損品のため分類不能)、石錐1点(第29図24：I類)、擦石1点(第29図25)の3点が出土し、他に剝片13点が出土

した。

土器(第10図14~19)の14~18は口縁部破片で、14は単節斜縞文、18は複節斜縞文を施文するものである。15~17は、不整燃糸文か燃糸文を施文している。16は口縁部が横位回転の不整燃糸文、胴部が斜位回転の燃糸文である。口縁部下端には綾格文を施している。17は波状口縁を呈する深鉢形土器の口縁部破片である。19は、口縁部から胴部上半の破片で、低い隆帯上に太めの縄文原体による側面圧痕を、隆帯の上下には数条からなる綾格文を施文している。14~19はいずれも胎土に纖維を含む。本遺構の時期は16~19の土器の特徴から円筒下層b式期に属すると考えられる。

S I 227(第7図、図版2)

L I 51・52、L J 51・52グリッドで検出した。S I 226の南側に位置しており、S I 226と同様に南西部が削られている。平面形は長楕円形を呈すると考えられ、その規模は長軸634cm(推定)、短軸440cm(推定)、壁高は45cm、面積21.16m²(推定)で、主軸方向はN-64.5°-Wである。床面は平坦でしまっており、主柱穴がP 1・2・4・5の4本、支柱穴が2本、現存部分の壁際には10~13cmの幅で深さ6cmの壁溝がある。柱穴の規模は、P 1が径27cm、P 2が径28cm、P 4が径31cm、P 5が径24cmである。支柱穴のP 3が径27cm、深さ9.9cmとやや浅い。P 6の径は23cmである。炉は検出されなかった。SKF 225と重複しており、南端を切られていることから、本遺構が古い。

遺物は石器と縄文土器が出土した。石器は、搔器1点(第29図22:I類)、半円状扁平打製石器1点(第29図26:Ⅳ類)の2点と剝片石器の破損品1点(第29図23)が出土し、他に剝片5点と礫1点が出土した。

土器(第10図20~24)の20~22は口縁部破片で、燃糸文を施文するものである。20は口唇部が平滑に面取りされ、21の口唇には刻目が入る。23は胴部破片で燃糸文を施文している。24は口縁部破片で、隆帯と隆帯の上・下に縄文原体の側面圧痕を施し、隆帯上に先の鋭い工具で斜めに沈線を施している。口縁部文様帯は単節斜縞文を地文とし、その上に垂下する3条の縄文原体の側面圧痕を施文している。本遺構の時期は24の土器から円筒下層b式期のものと考えられる。

S I 232(第8図、図版3)

L I 61・62、L J 61・62グリッドで検出した。一部調査区外のため全体を把握することはできないが、平面形は不整(椭)円形を呈するものと考えられ、主軸方向はN-60°-Eである。規模は長軸451cm(現存)、短軸500cm、壁高28cm、面積22.64m²である。床面はやや歎かく、凹凸がある。現存部分の壁際には幅13cm、深さ12cmの壁溝があり途切れながらも全体を巡る。壁柱穴(P 4~P 9)は平均すると15×9cmの楕円形で、深さは11cmである。主柱穴は深さか

らP 1～P 3の3本とも考えられるが、形態や大きさも異なる。他の柱穴(P 5～P 18)は浅く、形態や大きさはP 1～P 3と同様に異なっており、この中には耕作などの擾乱によるものも含まれると思われる。主柱穴のP 1は径38cm、P 2が64×14cmの橢円形、P 3が径56cmである。ほぼ中央には土坑が1基存在する。土坑の平面形は径120～140cmの不整円形で、深さは40cm、断面形は末広がりの袋状を呈する。本土坑は、断面観察では、擾乱が著しいこともあり、S I 232との新旧関係を明確にはできず、一応S I 232に伴うと判断した。しかし、断面図のA～Bの15層(黄褐色土)が横方向にわずかながら伸びていることや、断面図E～Fの1層中に地山が多量に混入していることなどから、S I 232構築時に埋められた可能性もある。炉は検出されなかった。本遺構はSK F 207、SK 210、SD 200、SK 245、SK F 246と重複している。重複関係は、SK F 207、SK 210、SD 200がいずれも本遺構を切っていることからこれらよりも本遺構が古い。SK 245、SK F 246は床面で重複したプランを確認したが、SK F 246が古く、SK 245が新しい。SK F 246は埋土の堆積状況より埋められたと思われるが、SK 245は判然としない。SK F 206の坑底部が下に入り込むが切り合はない。

遺物は石器と繩文土器が出土している。石器は、石匙2点(第31図31：Ⅲ類、32：Ⅰ類)、搔器1点(第31図33：Ⅰ類)、擦石2点(第31図34・35)、凹石1点(第31図36：類)、石皿1点(第43図122)の7点が出土し、他に剝片16点と礫2点が出土した。

土器(第11図25～28)の25・26は口縁部破片で、口縁部に繩文原体の側面圧痕を横位に施文しているものである。25は隆帯をもち、隆帯上と口唇部端に矢羽状の沈線を施文し、口縁部の側面圧痕はRとLの原体を2本1組で押圧したものである。胎土には、わずかに纖維を含む。27は口縁部で、細い隆帯上に刺突文を施文し、口縁部に不整撚糸文かと思われる文様を、胸部には綫に撚糸文を施文している。胎土には纖維をわずかに混入し、器内面は研磨されて平滑である。28は胸部に木目状撚糸文を施文している土器である。本遺構の構築時期は、出土土器の特徴などから前期末葉の円筒下層d式期であると推測される。

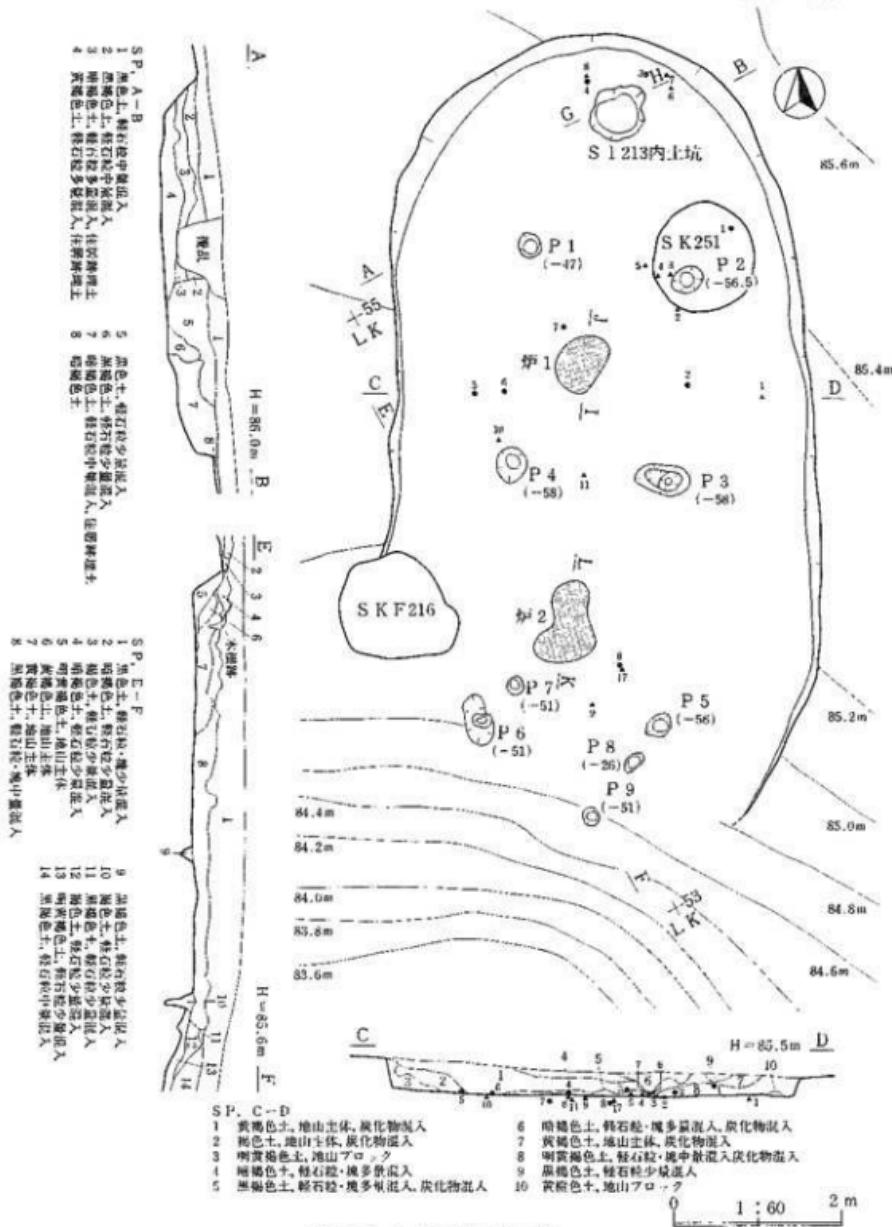
S I 233(第9図、図版3)

L J 55・56、LK 55・56グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、主軸方向はN-61°-Wである。規模は長軸626cm、短軸599cmで、壁高は52cm、面積24.63m²である。中央に土器埋設炉があり、その掘形は径60cmで、深さ20cmである。埋設されていた深鉢形土器は、赤変し、脆くなつた口縁部は炉外脇に散乱した状況で出土した。他に炉内外からは34、36～38などの土器が出土した。主柱穴はP 1～P 4の4本で、P 1が70×46cmの橢円形、P 2が34×22cmの橢円形である。P 3は径33cm、P 4が径39cmである。支柱穴のP 5～P 7は径20～22cm、深さ17～35cmである。本遺構は、SK F 214・242・243・249、SK 247と重複している。他の遺構との重複関係は、SK F 214・SK F 242が壁を切っていることから本遺構が新しい。

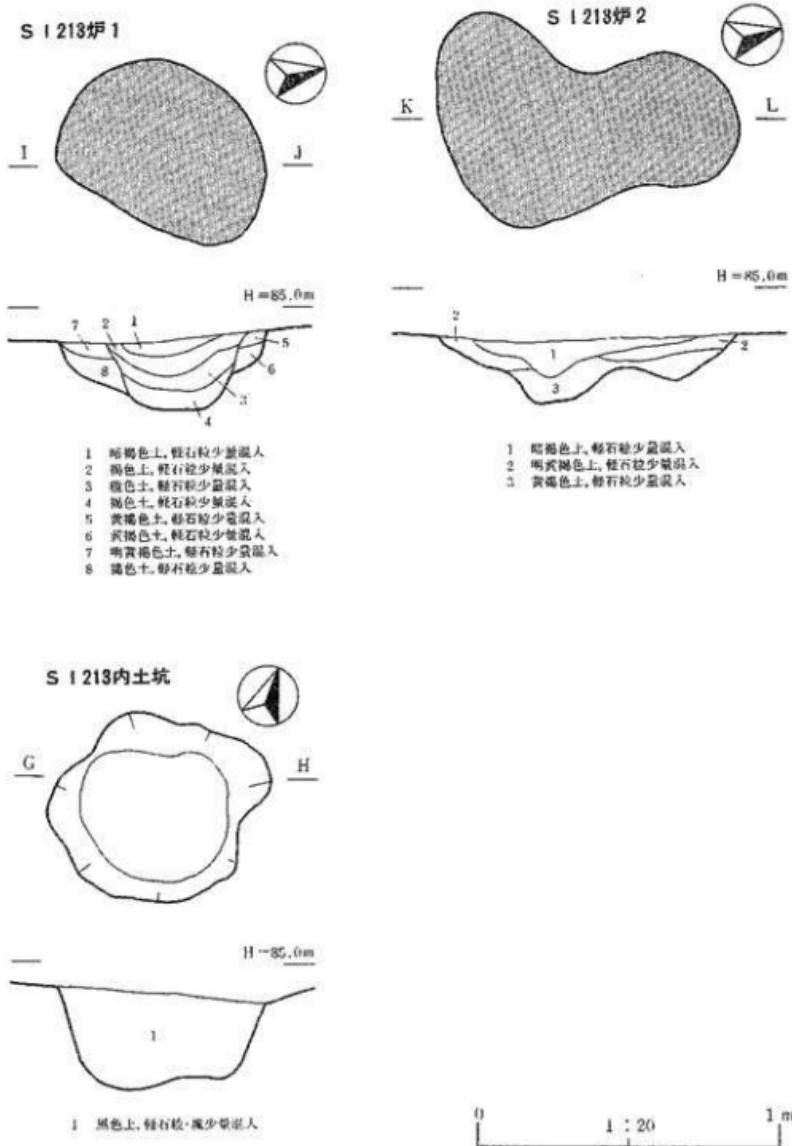
S K247、S K F249は床面で確認した。いずれも貼床はされていないが、S K247は埋土の状況から埋められていると思われる所以、本遺構より古く、S K F249は、埋土が自然堆積の状況を呈していることから本遺構より新しい時期のものと判断される。S K F243はLKラインの土層観察用ベルトで既に本遺構より古い時期のものと判明していたものである。つまり、古い方からS K F243、S K247→S I 233→S K F214、S K F242、S K F249という変遷がわかった。

出土遺物には石器と繩文土器がある。石器は、石錐1点(第32図37：I類)、凹石3点(2点は擦石の機能も兼備)(第32図38・40・42：類)、擦石5点(第32図38～41・第33図43)、石皿5点(第43図121・123～126)の16点(重複加算2)が出土し、他に剝片25点と礫5点が出土した。

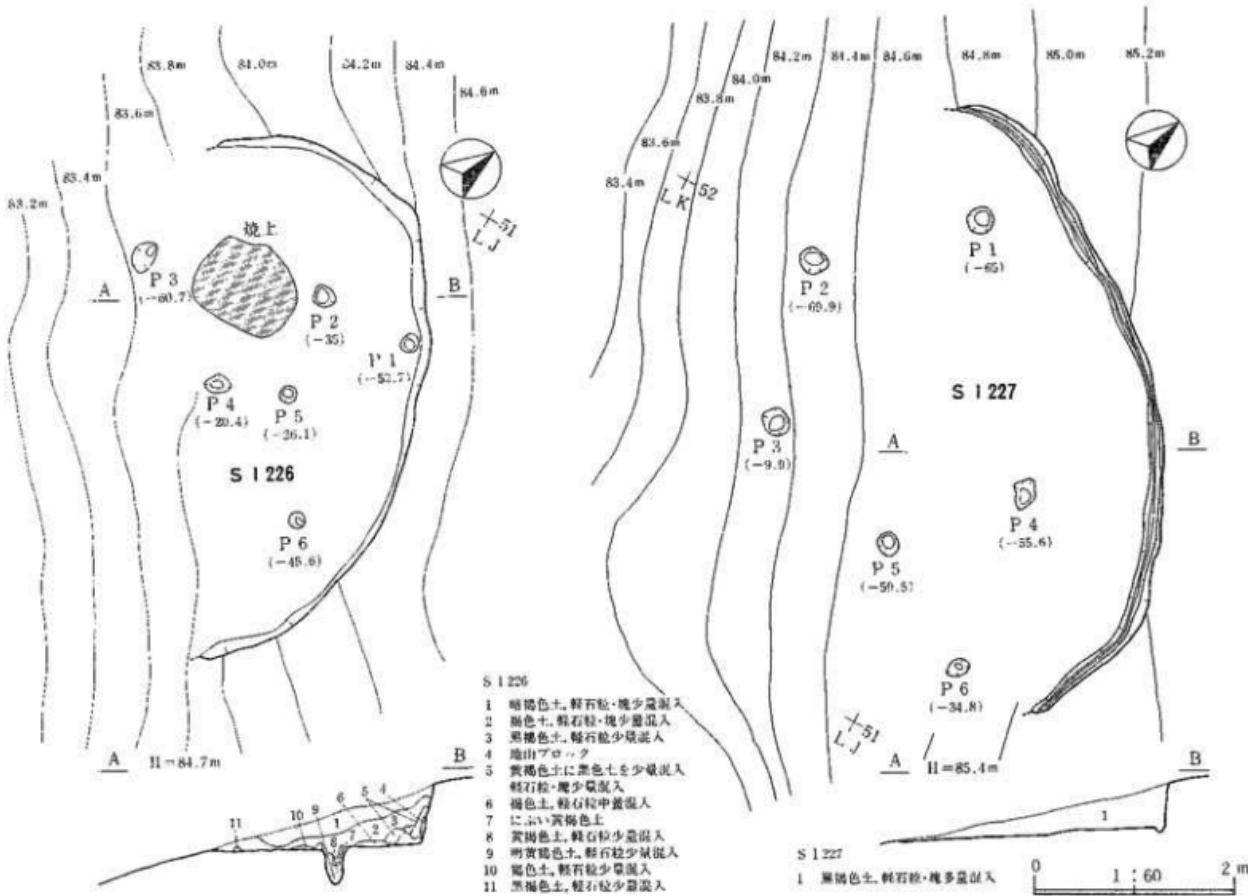
土器(第11図30～34、第12図35～39)の33は炉に埋設された土器で、口縁部は加熱によって赤変し、脆くなっている。底部は欠損している。胴下端から外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁がやや外反する波状口縁の深鉢形土器である。口縁部文様帶は、絡条体圧痕文と粘土紐・塊の貼付で構成されている。それは上から、口縁に直交する短い圧痕列、口縁に平行する7～8条の圧痕文、縦位の圧痕列が施された低い隆帯の順である。4つの小さな波頂部下には橋状把手を有し、その中央には垂下する1条の粘土紐を貼付し、その口唇部には深い切り込みが入っている。4つの橋状把手の中間にはやはり圧痕文の施されたボタン状貼付文が付されている。土器内面は平滑で、胎土には纖維を含まない。36は炉の内外に散乱した状況で出土した深鉢形土器で、胴部上半以上を欠いている。胴部上半が加熱により赤変していることから、何らかの形で炉に使われた可能性がある。37は、4つの低い波頂部を持つ波状口縁の深鉢形土器である。口縁部文様帶の下端には、1条の太い隆帯が貼付されている。隆帯上と口縁部上端には縦位の絡条体圧痕文が施され、両者の間には、繩文原体の側面圧痕と繩文原体の閉端部による刺突文が交互に2段ずつ施されている。口縁部下には垂下する細い粘土紐を貼付している。また、口唇にも絡条体圧痕文が口縁に直交して施されている。土器内面は平滑で、胎土には纖維を若干含む。34・36は地文が単節斜繩文でその上に綾絡文を施文しているもので同一個体かと思われる。35は住居跡の柱穴(P 1)上部から縦に割られた大破片となって重なって出土したものである。底部から胴部上半までは直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する深鉢形土器である。口縁部は複合口縁で、文様帶そのものが部厚く、横から見ると胴部よりも1段高くなっている。口縁部の幅は4.5cmで33・37より狭い。口唇部と口縁部文様帶下端には縦位、その間に横位の絡条体圧痕文を施文している。文様帶の中ほどには等間隔に5箇のボタン状貼付文が付され、ボタン状貼付文上には繩文原体の側面圧痕を渦巻状に施文している。土器内面は平滑である。31は口縁部破片で、口縁部文様帶下端に隆帯を有し、繩文原体の側面圧痕文を、口縁端と隆帯上には縦位に、両者の間には横位に施している。特に口縁端から口唇部の圧痕は深い。



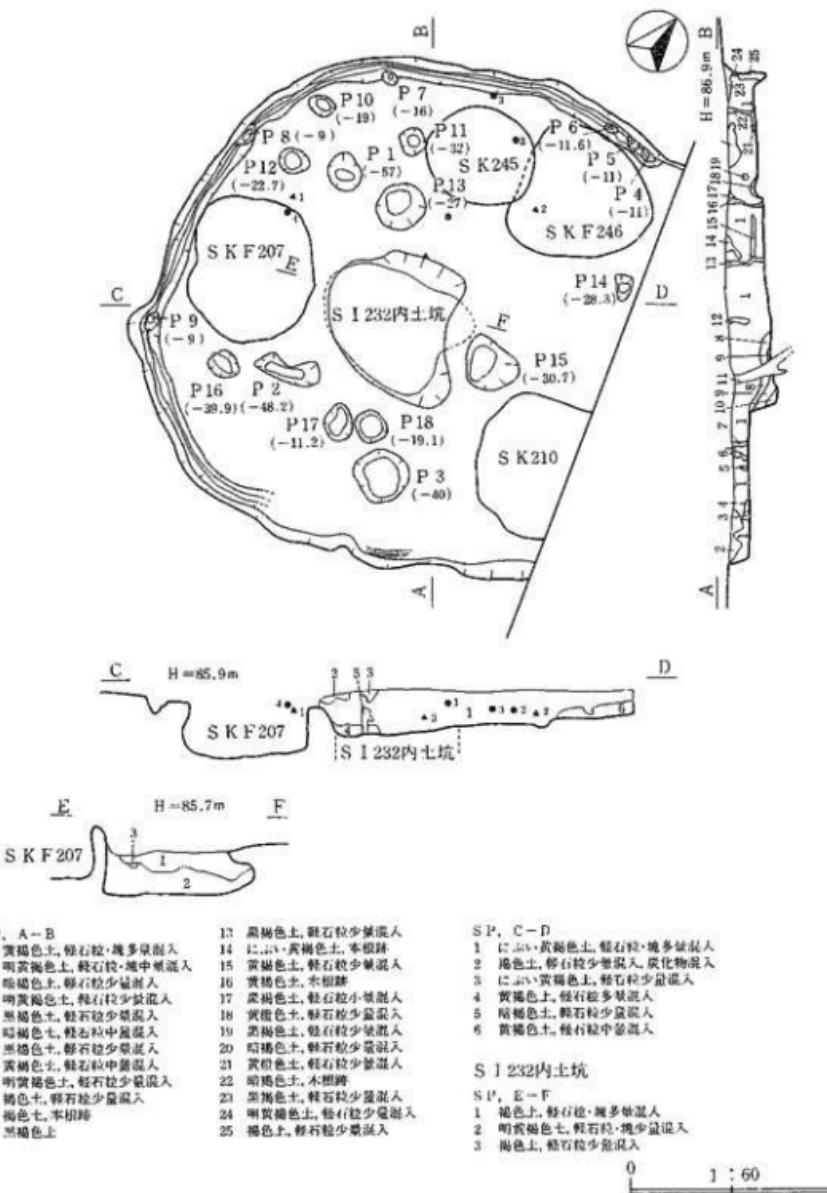
第5図 S I 213堅穴住居跡



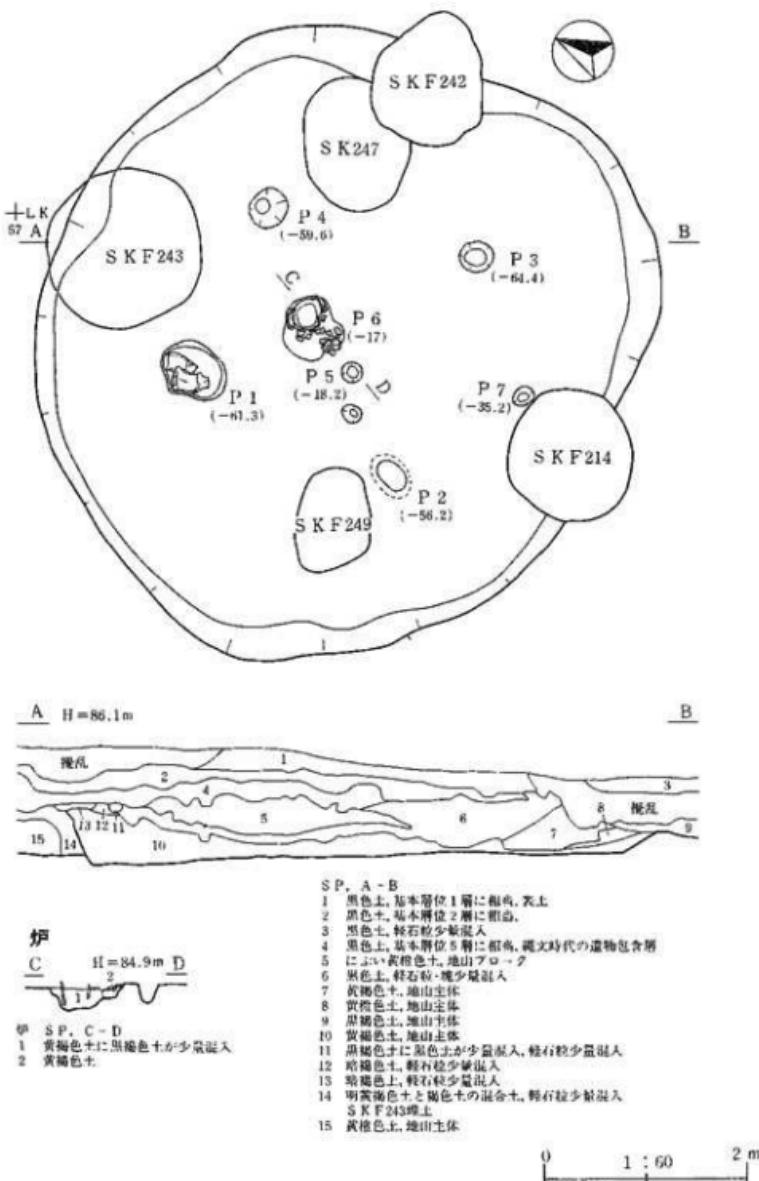
第6図 S 1213堅穴住居跡 炉1・2、土坑



第7図 S I 226-227縦穴住居跡

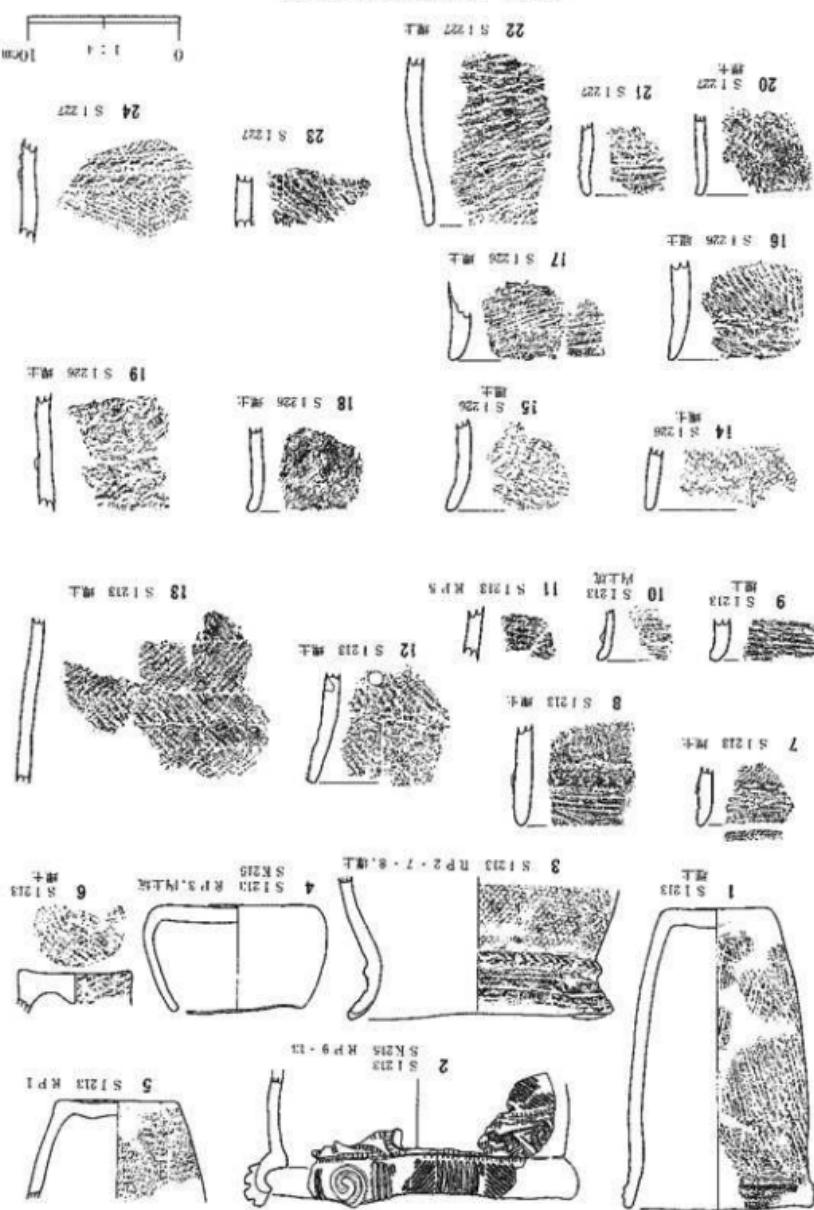


第8図 S I 232堅穴住居跡

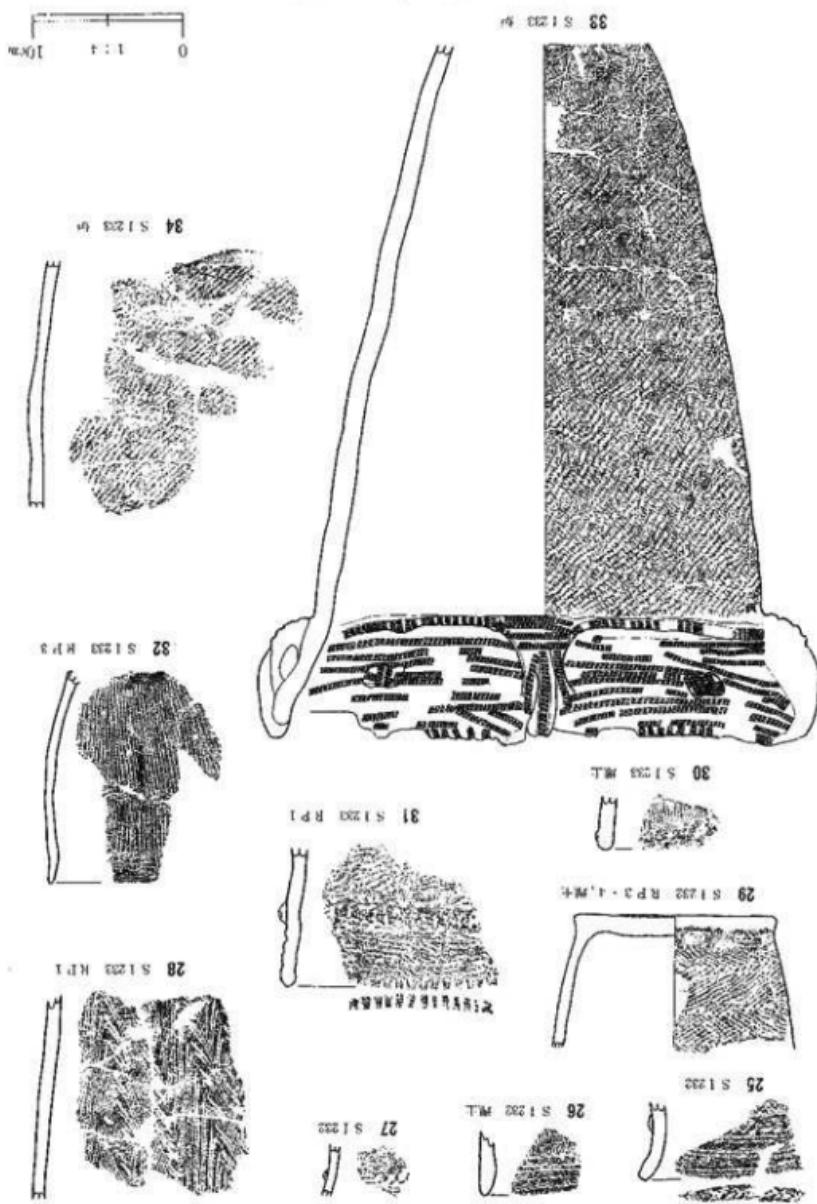


第9図 S I 233堅穴住居跡

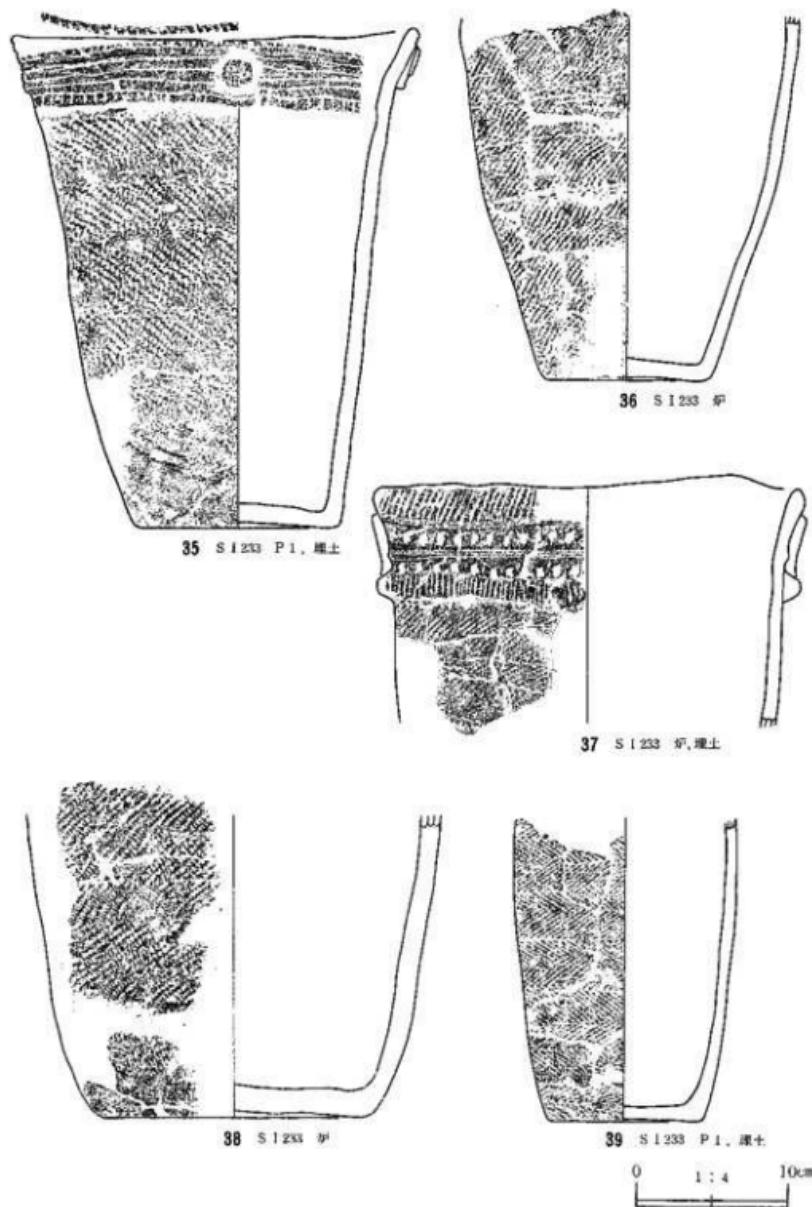
第10圖 豐火住居跡出土土器(1)



第11图 莱文化层出土石器(2)



第1图 石器出土石器之出土器物



第12図 墓穴住居跡出土土器(3)

胎土には纖維を混入し、焼成良好である。炉埋設土器や柱穴から出土した土器は円筒下層式土器から円筒上層式土器への移行期の土器と考えられ、時期は前期末～中期初めにかけての住居跡と考えられる。

(2) フラスコ状(袋状)土坑

S K F 201(第13図、図版4)

L J 64グリッドで検出した。平面形は不整橢円形、断面形が袋状を呈する。規模は坑口部113×153cm、頸部94×110cm、坑底部径116～130cmで、深さ101cmである。底面はほぼ平面である。上部の一部をS D200に切られている。

遺物は、覆土中から縄文土器片が出上したが、細片で図示できなかった。

S K F 202(第13図、図版4)

L I 64グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形が袋状を呈する。規模は坑口部と頸部径が126cm、坑底部径193cm、深さ97cmである。底面は若干波打つ部分があるもののほぼ平坦である。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第21図)の40は胴部破片で、結束ある羽状縄文を施している土器である。石器は擦石(敲石の機能も兼備)1点(第33図44)、他に剝片が2点出土した。

S K F 203(第13図、図版4)

L I 63グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形がフラスコ状である。規模は坑口部径148cm、頸部径130cm、坑底部径196cm、深さ174cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は、底面からほぼ完形の縄文前期末・円筒下層d₁式土器の深鉢形土器(第13図42)が出土したのをはじめとし、多数の縄文土器と石器、剝片が出土した。土器(第12図39、第13図41～58)の41、42、44、45～49の狭い口縁部文様帶は縄文原体の側面圧痕文で構成されており、49を除く土器では文様帶下端に細く低い隆帯を有する。胴部には41のように木目状燃糸文を施しているもの、46のように羽状縄文を施しているもの、44のように羽状縄文と縦位の燃糸文を交互に施しているもの、48のように縄文を施しているもの、49のように燃糸文を施しているものなどバラエティーに富んでいる。50は内外面にていねいなミガキを施している無文の土器である。破片であるために、詳細は不明であるが、破片下端が屈曲しており底部に続く部分と考えられる。従って50は、ゆるい波状口縁を呈する小型無文の鉢形土器と考えられる。口縁端の下1.5cmに、成形時に穿たれた径6mmの小孔が貫通している。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には纖維を含まず焼成は大変良好である。石器は、削器2点(第33図46：Ⅲ類、47：Ⅱ類)が出土し、他に剝片が29点出土した。

S K F 204(第14図、図版4)

L J 63とL I 63グリッドで検出した。平面形が不整円形、断面形は坑口部が頸部よりも大きくひらくフラスコ状である。規模は坑口部径108cm、頸部径83cm、坑底部径160cm、深さ123cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第22図59~61)の61は波状口縁で、頸部に隆帯を有し、波頂部から垂下する粘土紐を貼付している。口縁部文様帶には横位に3条1組の縄文原体の側面圧痕文を施文。隆帯上と口唇部にも継に縄文原体の側面圧痕を施文している。石器の出土ではなく、剝片2点が出土した。

S K F 205(第14図、図版4)

L I 62・63グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形がフラスコ状である。規模は坑口部径93cm、頸部径87cm、坑底部径169cm、深さ107cmである。底面には部分的に3~5cmの凹凸がある。

遺物は縄文土器と石器が出土した。土器(第22図63~65)はいずれも胴部破片で、64は多軸格条体回転文、65は木目状然糸文を施文しているものである。石器は、擦石(凹石の機能も兼備)が1点(第33図44)出土した。

S K F 206(第14図)

L I 62グリッドで検出した。東側一部が調査区域外のため全体を把握することはできないが、平面形がほぼ橢円形を呈すると考えられ、断面形がフラスコ状である。規模は坑口部から頸部が60(推定)×75cmの橢円形、坑底部167cm、深さ148cmである。底面はほぼ平坦であるがゆるやかな凹凸がある。壁際の埋土は地山の色とよく似ており区別がつきにくい。

遺物は縄文土器、剝片が出土した。石器は出土せず、剝片が3点出土した。土器(第22図66、67)はいずれも口縁部破片で、狭い文様帶を画する隆帯上に刺突文を施している土器である。

S K F 207(第14図、図版4)

L J 61・62グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形が袋状である。規模は坑口部径が117~143cm、頸部径128cm、坑底部径156cm、深さ57cmである。底面はやや凹凸がある。本フラスコ状土坑はS I 232の上に構築され、上部東側をS D 200に切られていることから、S I 232より古く、S D 200より新しい。

遺物は縄文土器と石器が出土した。土器(第22図62・68・69)の62は口縁部に刻目、その下に細い沈線を横に3条施文する薄手の晩期中葉の土器である。68は羽状縄文、69は木目状然糸文を施文する前期末葉の土器である。石器は、茎部にアスファルトの付着した石鏃1点(第33図49:IV類)と、刻線石1点(第33図48)、石刀状石製品(柄部破片)1点、剝片9点及び礫1点が出土した。

S K F 209(第15図)

L L54グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形が袋状で、バックホーによって、頸部まで削平されている。規模は頸部径110cm、坑底部径122cm、深さ67cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は縄文土器が1点(第22図70)出土した。磨滅しているが、羽状縄文と思われ、内面は研磨され平滑となっている。

S K F 214(第15図、図版5)

L K55グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形が袋状である。規模は坑口部径128cm、坑底部径65cm、深さ112cmである。底面はほぼ平坦である。本フ拉斯コ状土坑が、前期末から中期初めと考えられるS I 233堅穴住居跡を切っていることから本フ拉斯コ状土坑が新しいものである。

遺物は縄文土器が出土した。石器は出土せず剝片4点と礫1点が出土した。土器(第22図71~73)はいずれも胴部破片で、71は縦位の撚糸文の上に間隔をあけて、間延びした縹絡文を施文している。72は斜縄文、73は羽状縄文を施文しているもので、いずれも内面は研磨されて平滑である。本フ拉斯コ状土坑はS I 233より新しいことから、中期以降の構築と思われる。

S K F 216(第15図、図版5)

L K54グリッドで検出した。平面形が不整円形で、断面形は壁中段までは垂直に立ち上がり開口部で上方に開く形である。規模は坑口部径120cm、頸部径120cm、坑底部径100cm、深さ106cmである。底面には少し凹凸がある。本フ拉斯コ状土坑は、S I 213の両辺南寄りの壁を切っている。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第22図74~76)の74~76はいずれも胴部破片で、74は無文地に浅い沈線2条を施文している薄手の土器である。75は撚糸文、76は多軸絡条体を施文している。石器は半円状扁平打製石器1点(第34図50: VI類)、石皿3点(第43図127・129・133)の4点が出土し、他に剝片が3点出土した。

S K F 218(第15図)

本フ拉斯コ状土坑の坑口部をL I 54グリッドで検出したが、坑底部はL I 53・L H54グリッドへ広がっている。平面形はほぼ円形、断面形がフ拉斯コ状ではあるが、底面が北東方向に大きく張り出す点が他のフ拉斯コ状土坑と異なる。規模は坑口部径107cm、坑底部は隅丸長方形で長軸350×短軸250cm、深さ102cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第22図78~85)の78は、波状口縁を廻し波頂部を中心にして絡条体圧痕文を綴・斜めに施文しているもので、薄手で、内面研磨され平滑である。79~81は太い隆帯に指頭状の圧痕文を施文している土器である。79は口唇上にも同様の

圧痕文をおよそ3cm間隔に施文している。82は隆帯の上下に爪形文を施文している土器である。83の外側は無文、内面に条痕を施文している。84も外側が無文の底部である。底部は上げ底で、胴部下端には指による成形痕が残る。本フ拉斯コ状土坑は出土した土器から前期中葉の土坑と考えられる。石器は、削器1点(第34図53: I類)、凹石1点(第34図51: I類)、石皿2点(第43図119・120)の4点が出土し、他に剝片41点、礫3点出土した。

SKF 223(第15図)

LJ 53グリッド坑の南側で検出した。平面形は不整円形、断面形がフ拉斯コ状である。規模は坑口部が径104cmの不整円形、頭部径95cm、坑底部径115cm、深さ73cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は縄文土器、剝片が出土した。石器は出土せず、剝片4点と礫1点が出土した。土器(第23図86~89)の86・87はいずれも胴部破片で、86は燃糸文、87は羽状縄文を施文している土器である。88・89は底部破片で、88は平底で、底外面から丸味をもって外に強く張り出す器形を呈し、胴部の内面に横位の条痕文を、外面に燃糸文を施文している。底面には、草の茎状の圧痕が1ヶ所だけ見えている。胎土には纖維を含む。

SKF 224(第16図)

LI 51グリッドで検出した。東側一部が調査区域外のため全体を把握することはできないが、平面形がほぼ円形を呈するものと考えられ、断面形はフ拉斯コ状である。規模は坑口部径170~180cm(推定)、坑底部径150~155cm(推定)、深さ106cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第23図90~94)の90~92は口縁部に横位もしくは縱位に燃糸文を施文しているもので、91は口唇部が面取りされ平坦となっている。93は開端部に結び目のある無節の原体を横位に回転した斜縄文を施文し、94は一部剥落しているが頭部隆帯をもつ土器である。石器は、削器2点(第34図52: III類、54: II類)が出土し、他に剝片9点と礫1点が出土した。本フ拉斯コ状土坑の時期は出土土器から前期後半の土坑と考えられる。

SKF 225(第16図、図版5)

L 150・51グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形がフ拉斯コ状である。規模は坑口部径254cm、頭部径213cm、坑底部径276cm、深さ150cmである。底面は平坦である。本フ拉斯コ状土坑はSI 227の南西隅を切っている。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第23図95~105)の95~99・101は口縁部破片で、95は縄文原体の側面圧痕文、96は燃糸文、97は不整燃糸文、98は羽状縄文を施文している。99は口縁部が外反し、剥落した隆帯の上には細く浅い数条の沈線、下には2条の沈線を施文するものである。これらの土器の胎土には纖維を混入する。100・101・104は隆帯をもつ土器で、

100・104は、陸帯上に縄文原体の側面圧痕を施しているものである。101は陸帯が剥落しているが、第12図37の土器とそっくりな文様構成をとる土器である。102は撲糸文、104は木目状撲糸文を施文する。石器は削器1点(第34図55: III類)、半円状扁平打製石器4点(第35図60~62: VII類、他に圓錐1点)、凹石1点(半円状扁平打製石器の機能も兼備)(第35図61: II類)の6点(重複加算1)が出土し、他に剝片17点と礫3点が出土した。出土した土器から、本フ拉斯コ状土坑は前期後半の土坑と考えられる。

S K F 228(第16図)

L J 54・55、LK 54・55グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形がフ拉斯コ状である。規模は坑口部径130cm、頸部径108cm、坑底部径223cm、深さ96cmである。底面は中央部がやや低くなっているが、ほぼ平坦である。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第23図106~119)の106は、外面に不整撲糸文を施し、内面は研磨され平滑となっている。107~113・117は口縁部破片である。107・110・111は陸帯を有しない土器で、不整撲糸文や縄文を施文している。108・109・113は縄文原体の側面圧痕で文様帯を構成しているものである。112は陸帯を有し口縁部に羽状縄文、陸帯上とその上下に縄文原体の側面圧痕を施文しているもので、内面は研磨され、平滑である。117には、4つの低い波頂部があり、複節の縄文原体の側面圧痕文と小さな竹管文によって口縁部文様帯が構成されている。竹管文は文様帯下端の平行する側面圧痕間に1列だけ施されている。

石器は、石鎚1点(第35図56: V類)、石匙1点(第35図59: I-B類)、搔器5点(第35図58・第36図63・65・67・68: I類)、削器4点(第35図57・第36図64: III類、第36図66: II類)、異形石器1点(第36図69)、半円状扁平打製石器1点(第37図75: IV類)、擦石1点(凹石II類の機能も兼備)(第37図70)、石皿2点(第43図128・130・132)の17点(重複加算1)が出土し、他に石刀状石製品(柄部破片)1点(第37図71)、剝片17点及び礫2点が出土した。本フ拉斯コ状土坑は出土土器から、円筒下層c式期の土坑と思われる。

S K F 230(第16図)

L K 63グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形が袋状である。規模は坑口部径145cmの不整円形、坑底部径170cmの不整円形、深さ64cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は出土しなかった。

S K F 231(第16図)

L J 63、LK 63グリッドで検出した。平面形は不整椭円形、断面形がフ拉斯コ状である。規模は坑口部98×117cm、頸部60×110cm、坑底部122×154cm、深さ80cmである。底面はほぼ平坦だが、中央部はどやや深くなっている。

遺物は出土しなかった。

S K F 234(第17図)

L K 59グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形がフラスコ状である。規模は坑口部径234cm、頸部径214cm、坑底部径234cm、深さ124cmである。底面は平坦で、ほぼ中央に直径31cm、深さ14cmのピットがある。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第24図120・121)の120は、多軸絡条体を回転施文しており、内面は研磨されて平滑となっている。121は羽状縄文を施文している。石器は、凹石が1点(第37図74: 頸)出土し、他に剝片1点と礫1点が出土した。本フラスコ状土坑は、出土土器から前期後半の土坑と考えられる。

S K F 235(第17図)

L J 56グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形がフラスコ状である。規模は坑口部径118cm、頸部径67cm、坑底部径105cm、深さ55cmである。底面はほぼ平坦である。本フラスコ状土坑はS K F 250を切っている。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第24図122・123)の122は、狭い口縁部文様帶に縄文原体の側面圧痕を平行に施した土器である。石器は、石匙1点(第37図78: III-A類)、石錐1点(第37図72: II類)、石皿1点(第43図134)の3点が出土し、他に剝片1点が出土した。本フラスコ状土坑は出土土器から円筒下層d式期の土坑と思われる。

S K F 236(第17図、図版5)

L I・L J 57グリッドで検出した。平面形は不整橢円形、断面形がフラスコ状である。規模は坑口部径101cm、頸部57×78cm、坑底部100×118cm、深さ63cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は縄文土器が出土した。土器(第24図124~127)の126は胴下部の破片で、斜縄文と横走する綾格文を施している。127は頸部の小破片であるが、浅く細い沈線と竹管文を施文している土器である。本フラスコ状土坑は出土土器から前期後半の土坑と思われる。。

S K F 237(第17図、図版5)

L I 56グリッドで検出した。平面形は不整橢円形、断面形がフラスコ状である。規模は坑口部86×125cm、頸部82cm、坑底部径115~118cm、深さ63cmである。底面は中央部ほどゆるく深くなっている。

遺物は縄文土器が出土した。土器(第24図128)の128は小型深鉢形土器の底部付近の破片で、外面に細かい撻糸文を縱位に施し、内面は丁寧な器面調整を行っている。

S K F 239(第17図)

L K 61・62グリッドで検出した。平面形は不整橢円形、断面形がフラスコ状である。規模は坑口部132×160cm、頸部82×99cm、坑底部174×208cm、深さ141cmである。底面はほぼ平坦

である。本フラスコ状土坑はSK I 238の床面でプランを確認したことから、SK I 238より古いものである。

遺物は繩文土器、石器、剝片が出土した。土器(第24図129～133)の129と130は同一個体で、斜縄文を全面に施文し、底面には網代のある深鉢形土器である。内面は研磨され平滑で、焼成が非常に良好である。131・132は羽状縄文、133は繩文を施文している。石器は、窓状石器1点(第37図77：Ⅲ類)、半円状扁平打製石器1点(第37図76：Ⅶ類)、擦石1点(第37図73)の3点が出土し、他に剝片2点と礫1点が出土した。

S K F 240(第18図)

L K 63坑の南側、L J・LK 62グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形がフラスコ状である。規模は坑口部140×144cm、頸部110×133cm、坑底部171×181cm、深さ88cmである。底面はほぼ平坦である。

遺物は繩文土器、剝片が出土した。土器(第24図134～138)の134・137は細い隆帯を2条貼付して口縁部文様帶を画するもので、その上下に撚糸文や羽状縄文を施文している土器である。135は、口縁部に絡条体圧痕を4条横位に施文している。136は多軸絡条体回転文、138は繩文の結節回転による斜行縄文と継縄文を施文しているものである。

S K F 241(第18図)

L K 60グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形がやや筒形に近い。規模は坑口部径251cm、頸部径247cm、坑底部径260cm、深さ93cmである。底面には中央からやや東南寄りに91×109cmの不整橢円形で、深さ14～18cmのくぼみがあり、それ以外はほぼ平坦である。重複関係はSK I 208に切られていることから、本フラスコ状土坑が古い。

遺物は繩文土器、石器、剝片が出土した。土器(第24図139～141)のいずれも斜縄文を施文している土器で、内面は研磨され平滑である。石器は、削器1点(第38図79：Ⅳ類)、凹石1点(第38図80：Ⅱ類)、擦石1点(第38図81)の3点が出土し、他に剝片3点が出土した。

S K F 242(第18図)

L J 55・56グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形が袋状である。規模は坑口部径108cm、坑底部径170cm、深さ110cmである。底面はほぼ平坦だが、やや西側が低い。重複関係は、S I 233の壁とSK 247を切っていることから、本フラスコ状土坑が新しい。

遺物は繩文土器、石器が出土した。前期前半の土器が出土したが、細片で図示できなかった。石器は半円状扁平打製石器が1点(第38図82：Ⅰ類)出土した。

S K F 243(第18図)

L J 56・LK 56グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形が袋状である。規模は坑口部径158cm、坑底部径273cm、深さ80cmである。底面は中央にややくぼんだところがあり、

全体的にやや起伏がある。重複関係は、S I 233に切られていることから、本遺構が古い。

遺物は石器、剝片が出土した。土器(第24図142・143)の142は底部で、燃系文を底部下端まで施し、143は胴部に多軸絡条体の回転のある前期後半の土器である。石器は、石匙が1点(第39図86: I-C類)出土し、他に剝片1点が出土した。

S K F 246(第19図)

L I 62グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形がかなりいびつな袋状である。規模は坑口部径140cm、坑底部153×184cm、深さ51cmである。底面は中央よりやや東側で9cmの段がついている。本フ拉斯コ状土坑はS I 232竪穴住居跡の床面で、SK 245と重複して確認されたもので、平面プランや土層断面からSK 245より古いということがわかった。本フ拉斯コ状土坑は埋土の堆積状況より埋められたと思われる。したがって、S I 232、SK 245のいずれよりも古い。

遺物は縄文前期の土器、剝片が出土した。

S K F 249(第19図)

L K 56グリッドで検出した。平面形は不整橢円形、断面形がフ拉斯コ状を呈する。規模は坑口部74×104cm、坑底部144×180cm、深さ68cmである。底面はほぼ平坦である。重複関係はS I 233の床面でプランを確認したが、埋土の状況から自然堆積と思われ、貼床もないことから、S I 233より新しい。

遺物は縄文土器、石器が出土した。土器(第24図144・145)のいずれも胴部に燃系文を施すもので、144の内面は研磨されて平滑である。石器は、搔器1点(第39図84: I類)、削器3点(第39図85・86: I類、87: III類)、半円状扁平打製石器が1点(第38図83: IV類)の5点出土し、他に礫4点が出土した。

S K F 250(第19図)

L J 56グリッドで検出した。平面形は不整円形、断面形がフ拉斯コ状である。規模は坑口部径188cm、頸部径146cm、坑底部径264cm、深さ133cmである。底面はほぼ中央部に35~41cmの略円形で深さ9cmのピットがあり、それ以外はほぼ平坦である。重複関係は、SK F 235に切られていることから、本フ拉斯コ状土坑が古い。

遺物は、石皿が1点(第43図135)出土しているが、土器は出土していない。

(3) 土坑

S K 210(第19図)

L I 61グリッドで検出した。平面形は東側一部が調査区外のため全体を把握することはできないが、不整円形を呈すると考えられ、断面形は鍋底形である。規模は坑口部径137cm(推定)、

坑底部径116cm(推定)、深さ41cmである。底面はほぼ平坦である。S I 232の上から掘り込まれていることから本遺構が新しい。

遺物は縄文土器、剝片が出土した。石器は出土せず、剝片が3点と礫4点が出土した。土器(第25図146～148)の147・148は口縁部破片で、内面は研磨され、平滑である。147には細い燃糸文が横位に施されているが、これが側面圧痕によるものか、回転によるものか不明である。148は、地文が斜縄文で横位に綴縫文を施しておらず、折返し口縁となっているのが特徴的である。

S K 215(第19図)

L J 55グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形が皿状である。規模は坑口部径123cm、坑底部径103cm、深さ54cmである。底面はほぼ平坦である。本土坑は、S I 213内土坑の上にあり、本土坑が新しい。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第25図149～151)の151は口縁部の破片で、胴部上端に器最大径を有し、頸部でくびれ、口縁が外反する深鉢形土器と考えられる。口縁部文様帶には2～3条の隆帯を有すると考えられるが、この破片では1条しか見えていない。口縁部の文様は、2本1組の横位の縄文の側面圧痕文で、ゆるい波状口縁の波頂部下には同じ原体で「ハ」の字状の文様を描いている。149・150は胴部破片で、149は多輪絡条体回転文を施しておらず、150は大変薄手で無文の土器である。石器は、石鏃1点(第39図92：IV類)、削器1点(第39図91：破損品につき分類不能)、磨製石斧1点(第40図93：I-B類)の3点が出土し、他に剝片2片出土した。

S K 219(第19図)

L I 53グリッドで検出した。平面形は不整梢円形、断面形が鍋底状である。規模は坑口部160×183cm、坑底部径が153cm、深さ51cmである。底面はほぼ平坦であるが、小さい凹凸が数ヶ所ある。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第25図152～154)の152～154はいずれも胴部破片で、152・153は燃糸文、154は外面縄文で内面に条痕文を施している土器である。石器は、石槍2点(第40図97：I類・98：IV類)、搔器2点(第40図94・96：I類)、削器1点(第40図95：破損品のため分類不能)の5点が出土し、他に剝片7点が出土した。

S K 221(第20図)

L I 53グリッドで検出した。平面形は不整梢円形、断面形が皿状である。規模は坑口部が110×155cm、深さ28cmである。底面はほぼ平坦であるが、中央部にややくぼんだ所がある。

遺物は出土しなかった。

SK 245(第20図)

L I・L J 62である。平面形はほぼ橢円形、断面形が浅い皿状である。規模は坑口部95×109cm、坑底部81×96cm、深さ12cmである。底面はほぼ平坦である。S I 232堅穴住居跡の床面で、SKF 246フラスコ状土坑と重複しているのを確認した。本土坑とSKF 246では、土層断面より本土坑の方が新しく、SKF 246は埋められたと思われる。

遺物は出土しなかった。

SK 247(第18図)

L J 56グリッドで検出した。平面形はほぼ橢円形、断面形が鍋底状である。規模は坑口部107×133cm、坑底部82×97cm、深さ30cmである。底面には中央よりやや西側に径20cm、深さ25cmのピットがある。重複関係は、SKF 242に切られていることから本土坑が古いものである。

遺物は、石皿が1点(第43図131)出土した。

SK 251(第20図)

L I 54・L J 54グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形が浅い皿状である。規模は坑口部径119～130cm、坑底部径110cm、深さ12cmである。底面はほぼ平坦である。本土坑は、S I 213の床面を精査していくプランを確認したもので、土坑上面から柱穴(P 2)が掘り込まれていることから、本土坑が古い。

遺物は出土しなかった。

(4)堅穴状遺構

SK I 208(第18図)

L J 60、LK60グリッドで検出した。平面形は不整橢円形、断面形が浅皿状で、主軸方向はN-64°-Eである。規模は長軸323cm、短軸224cm、深さ57cm、面積5.48m²である。床面はほぼ平坦であるがしまりは良くなく、柱穴や焼土は検出されたかった。重複関係は、SK 241を切っていることから、本堅穴状遺構が新しいものである。

遺物は縄文土器、石器、が出土した。土器(第25図155～169)の155・156・162・164は幅1cmほどの隆帯を縦・横・斜めに貼付し、隆帶上に縄文原体の側面圧痕文、隆帶間には半月状の縄文原体を側面圧痕した爪形文もしくは半截竹管状の刺突列を施文した土器である。155の口縁は折り返し口縁風に肥厚しており、その下と口縁部文様帯の下端に付された隆帯の間には斜位の隆帯が連続する山形状に貼付され、下方の連結部にはボタン状の貼付文が加えられている。ボタン状貼付文は器周11個付されている。そして、この連結山形状の隆帯によって生じた合計22の三角(逆三角)形を呈する空間には、爪形状の刺突列によって様々の文様が描かれているが、この中の連続する3ヶ所には刺突列の他に、曲線を描く縄文の側面圧痕文が施文されて

いる。なお、本土器の文様に使用されている爪形状の刺突には、半截竹管様の工具によるもの、草の茎によるもの、縄文原体を半月状に曲げたものの3種類が見られる。内面は平滑で、胎土に纖維を混入する。156はいわゆる扇状把手の部分で、やや外反しあつ肥厚している。隆帯間に纖維を混入する。156はいわゆる扇状把手の部分で、やや外反しあつ肥厚している。隆帯間に纖維を混入する。162も類似した構成からなる土器である。160は隆帯がやや細くなり、隆帯間に縄文原体の側面圧痕文を施している。163は隆帯間に平行な4～5条の縦条体圧痕文を、波状となる口縁部と隆帯上には継ぐ縄文原体の側面圧痕文を施している土器で、胎土に纖維を少し含む。石器は、石匙1点(第41図101：I-A類)、石槍1点(第41図108：破損品につき分類不能)、搔器1点(第41図103：I類)、削器6点(第40図99：類、第40図100・第41図104～107：II類、第41図102：III類)、半円状扁平打製石器1点(第42図109：VI類)、石錐1点(第41図110：I類)、擦石2点(第41図111・112)、凹石1点(磨製石斧の破損品を再利用)(第41図113：I類)、の14点が出土し、他に剝片41点と疊12点が出土した。

S K I 238(第20図)

L K61・62グリッドで検出した。一部調査区域外のため全体を把握することはできないが、平面形は長橢円形を呈すると考えられ、主軸方向は、N-17°-Wである。規模は長軸572cm、短軸194cm(推定)、深さ34cm、面積13.9m²(推定)である。底面は、ほぼ平坦であるが、柱穴・焼土などは検出されなかった。重複関係は、SKF239のプランを本竪穴状遺構の床面で確認したことから、本竪穴状遺構が新しい。

遺物は縄文土器、石器、剝片が出土した。土器(第25図170～172)170・171は口縁部破片で、170はSK I 208の163と同じ特徴をもつ土器である。171は、口縁に沿って縄文原体の側面圧痕文を3条施するものである。172は木目状撲糸文を施す土器である。3点の土器とも内面は平滑である。石器は、石匙1点(第42図114：I-C類)、石槍1点(第42図115：I類)の2点が出土し、他に剝片25点が出土した。

(5) 焼土遺構

S N211(第20図)

L J 61グリッドのVI層上面で検出した。規模は23×82cmの橢円形である。

S N217(第20図)

L K54グリッドのVI層上面で検出した。規模は70×110cmの橢円形、焼土の厚さ5～10cmである。

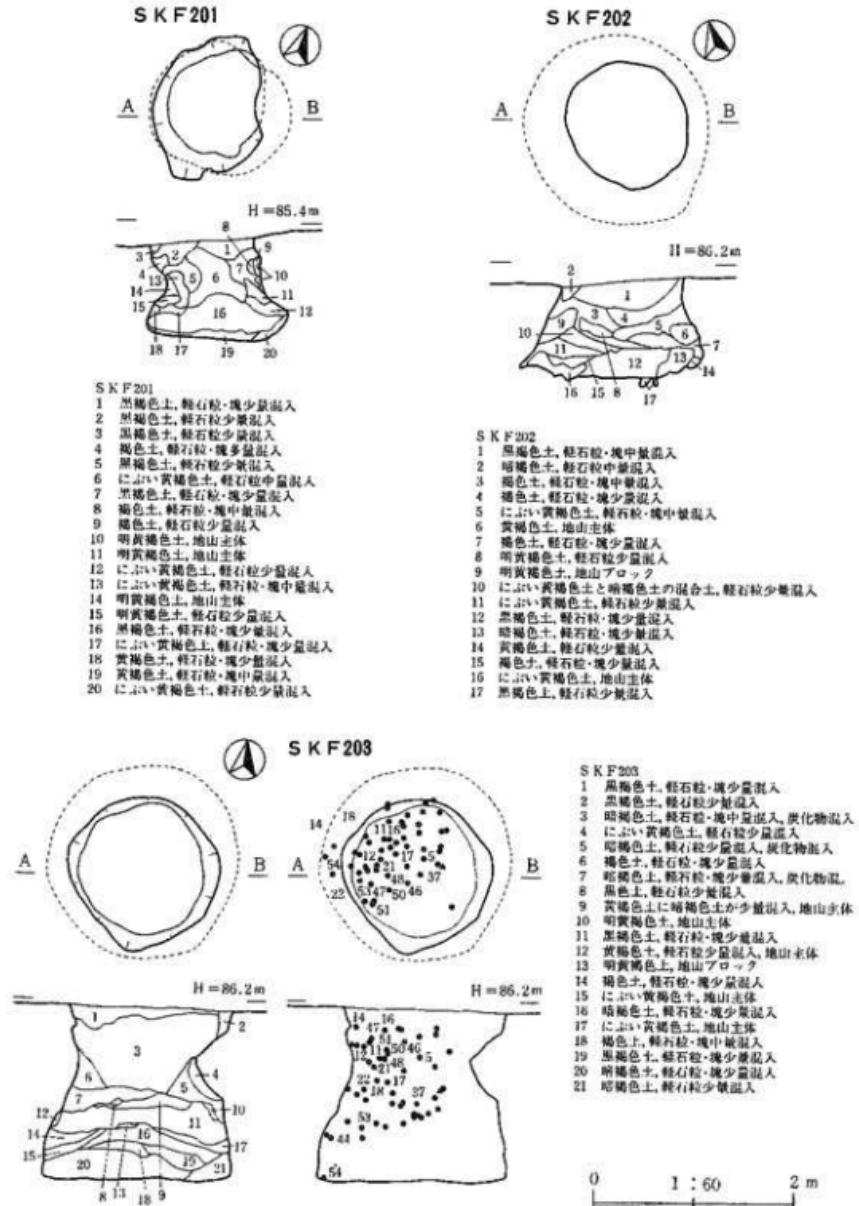
2. 弥生時代

(1) 土坑

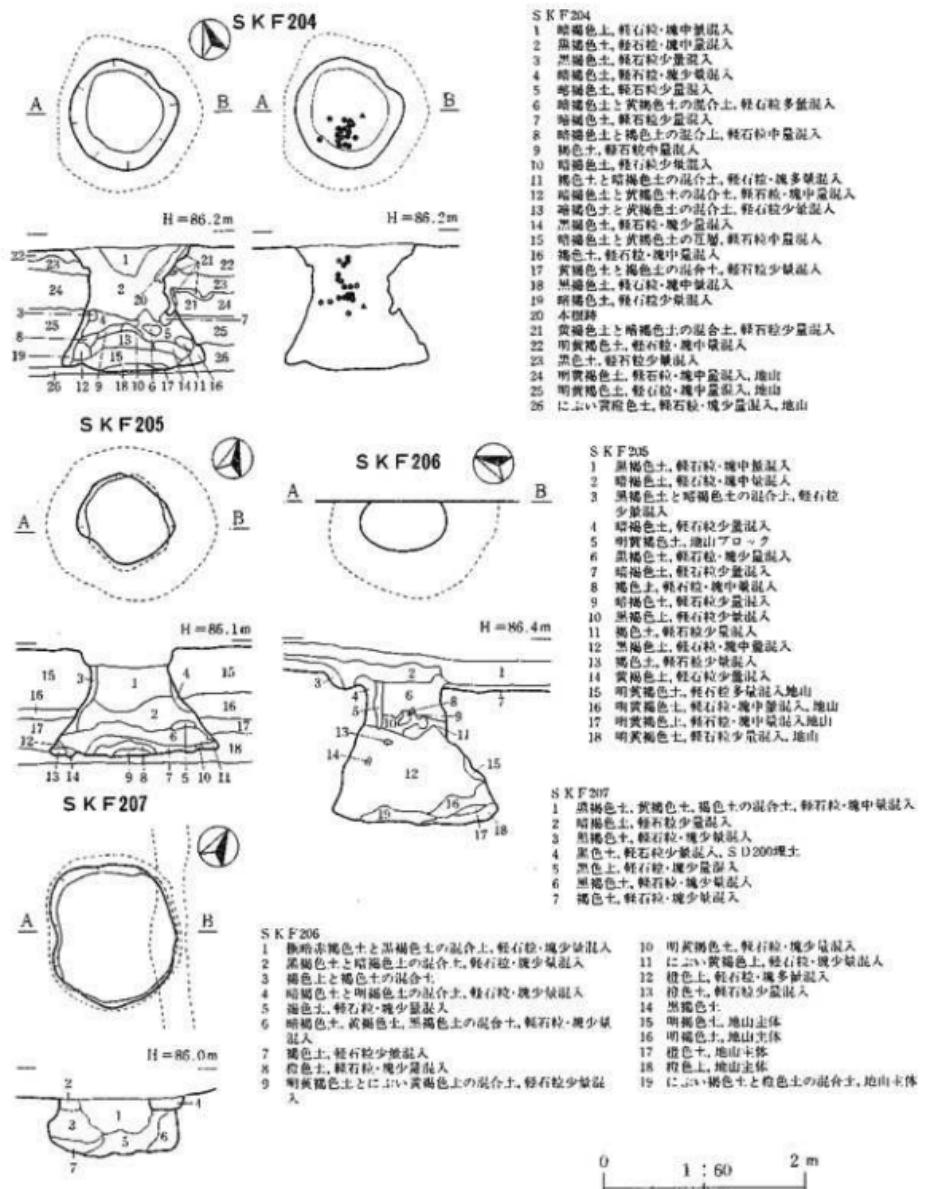
SK212(第44図)

LK58、L L57・58グリッドで検出した。当初、沢状の落ち込みかと考えられたもので、検出面からも遺物が出土している。西側の一部が調査区域外のため全体を把握することができないが、平面形は不整円形を呈すると考えられる。規模は坑口部300(推定)×395cm、深さ130cmである。壁面・床面とも凹凸が著しい。

遺物は土器、石器、が出土した。土器(第44・45図)の174は赤色塗彩の壺形土器で、口縁部と頸部に2条の沈線を施し、頸部との境の胴部上端にも1条の沈線を巡らし、その下に刺突文を施文する。わずかに波状を呈する口縁の端部には斜繩文が施されているが、他はていねいに研磨されている。頸部に、焼成前に穿たれた径5mmの小孔を有する。胎土には大きな砂粒は含まず、焼成は普通である。175は台付浅鉢形土器で、胴部に波状工字文と平行沈線文を施文するものである。台部に焼成前に穿たれた径4.5mmの小孔を有する。胎土には細かい砂粒を含み焼成良好である。器内外面に、塗彩された赤色顔料がわずかに残っている。176は鉢形土器の胴部破片である。上半には無文地に太く浅い沈線による変形工字文が、下半には横走気味の繩文地に弧状の沈線が施文されている。焼成良好で、器外面には煤状炭化物の付着が著しい。177は口縁部に刻目、胴部上半に連弧文を施文する鉢形土器である。器内外面ともに煤状炭化物の付着が著しい。178・179は同一個体で、壺形土器の胴部破片である。斜繩文地の胴部上半に数条の平行沈線が施文され、その下に、列点文が加えられている。内外面に煤状炭化物が付着しており、特に外面が著しい。180・181は鉢形土器の口縁部破片で、180はゆるい波状口縁、181は平口縁である。180・181ともに口縁端部に継位の刻目、その下に数条の平行沈線が施されている。地文として180は斜繩文、181が縱走する繩文が施文されており、口縁内側には180が2条、181が1条の沈線を有する。また、181の口唇下1.5cmには2個1対の小孔が貫通しているが、これは焼成前に穿たれたものである。185～187は刷毛目調整痕を留める壺形土器の破片である。182は壺形土器の、183・184は鉢形土器の口縁部破片である。183は波状口縁を呈し、波頂部口唇上に刻目を有する。182～184の内外面には煤状炭化物が付着している。188は鉢形土器、191・192は壺形土器の口縁部破片と考えられる。これらの土器の内外面には煤状炭化物の付着が著しい。189には煤状炭化物が付着しておらず、壺形土器の可能性もある。189・192の口唇部外側には細かい刻目、191の胴部には間隔のあく刻目が施されている。190は台付鉢形土器で、口唇上には細かい刻目が施されている。なお、174～192の土器のうち、本土坑のプラン確認後に、本土坑の埋土中に包含されていると認識されて採り上げられたものは図示した中の177・179・182・186で、他の土器は、プラン確認前に採り上げられたが、その出土



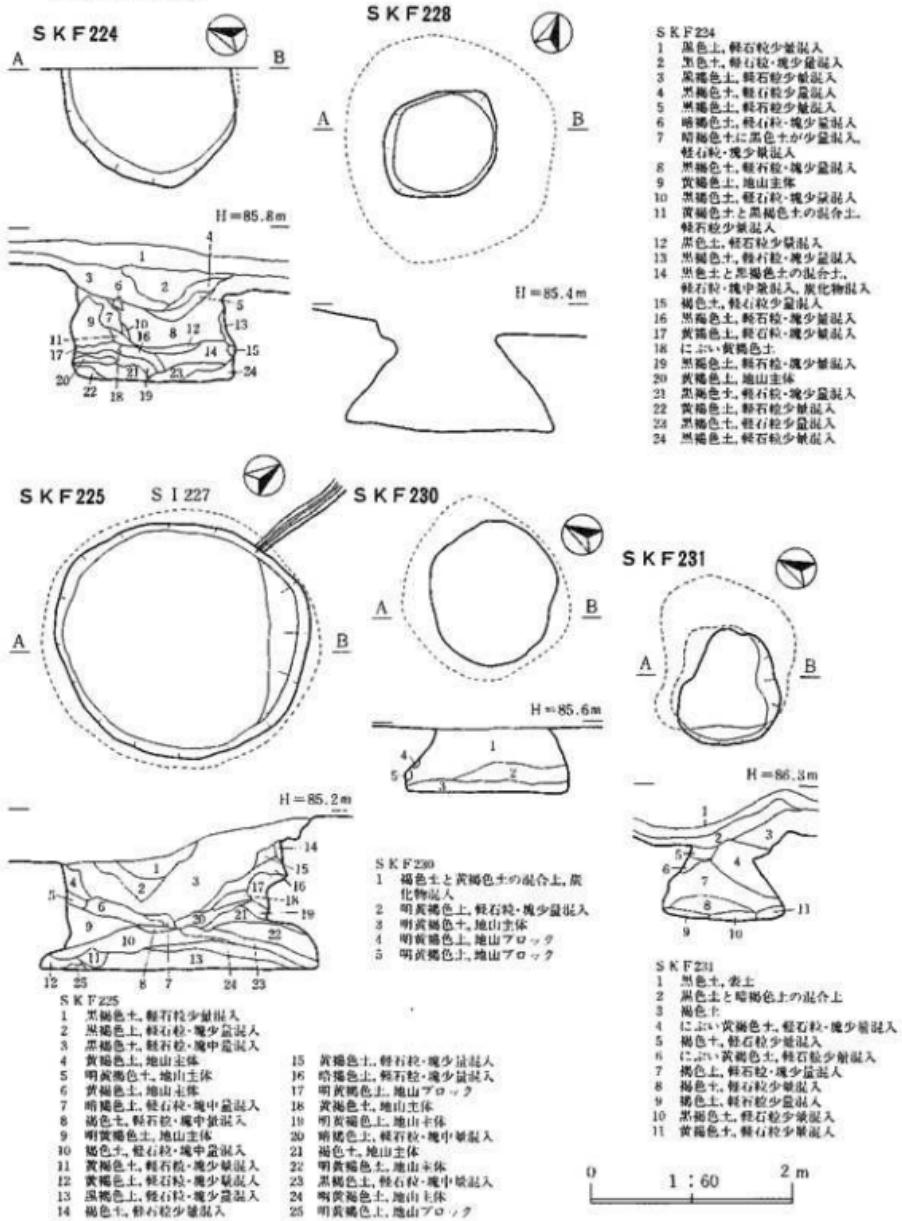
第13図 S K F フラスコ状土坑(1)



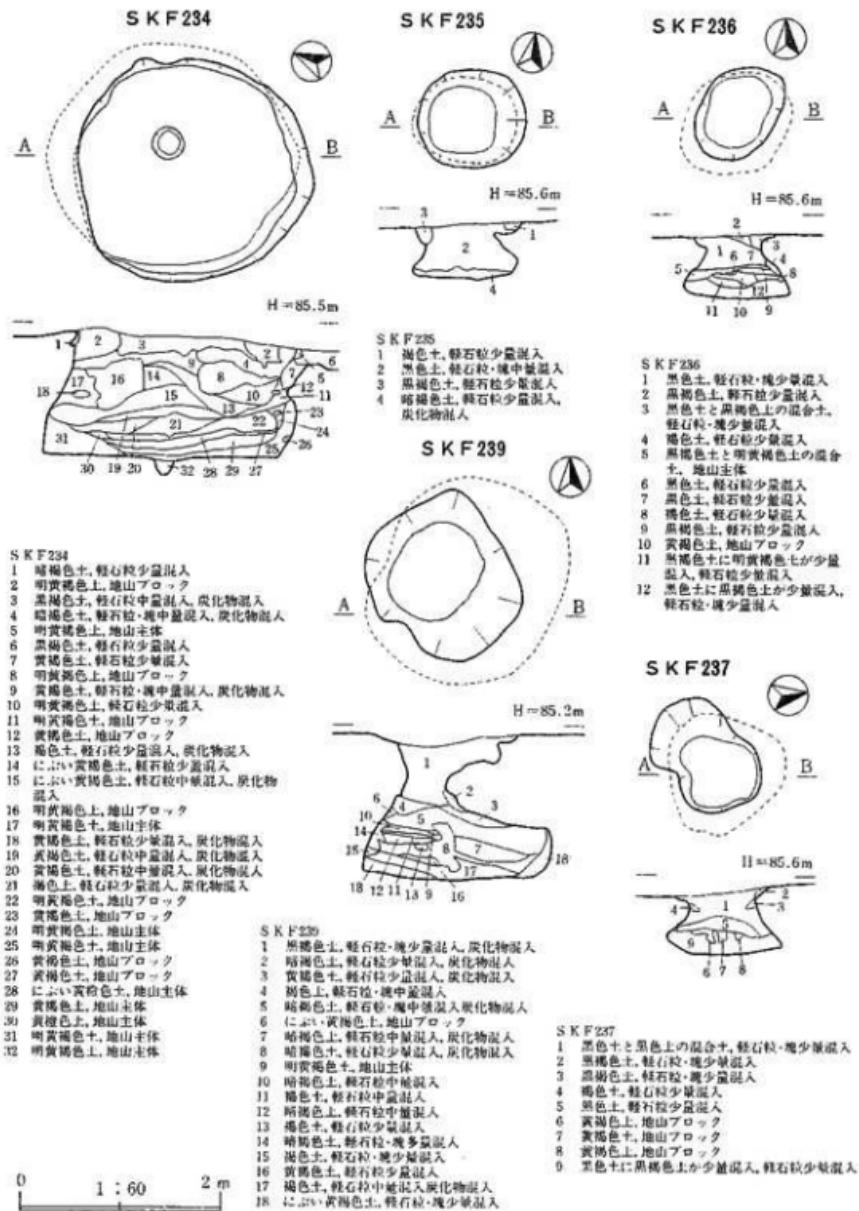
第14図 S K F フラスコ状土坑(2)



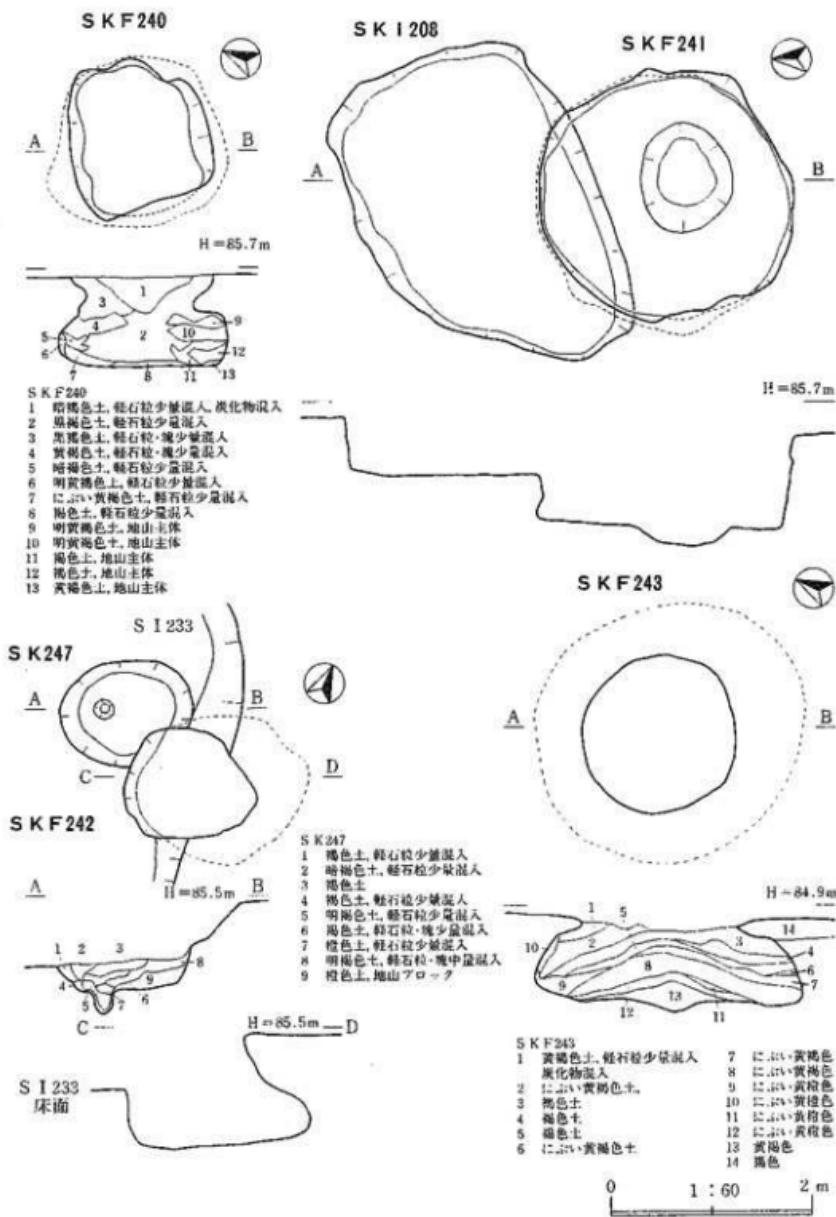
第15図 S K F フラスコ状土坑(3)



第16図 S K F フラスコ状土坑(4)



第17図 SKF フラスコ状土坑(5)

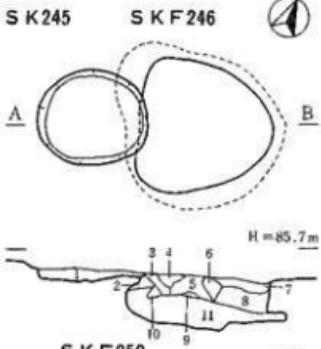


第18図 SKF フラスコ状土坑(6)

SKF249

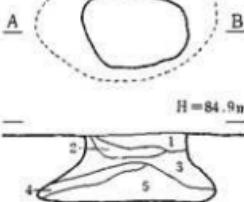


SKF245, SKF246

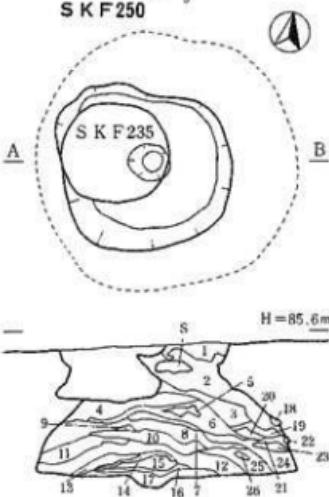


SKF246

- 1 黄褐色土、軽石粒中量混入
- 2 黄褐色土上、軽石粒少量混入
- 3 黄褐色土、軽石粒中量混入
- 4 黄褐色土、軽石粒・微量混入
- 5 黄褐色土上、軽石粒中量混入
- 6 黄褐色土上、地山ブロック
- 7 明黄褐色土、軽石粒少量混入
- 8 黄褐色土、軽石粒中量混入
- 9 黄褐色土、地山ブロック
- 10 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 11 喀褐色土、軽石粒・微量混入



SKF250



SKF249

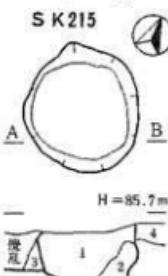
- 1 喀褐色土、軽石粒少量混入
- 2 黄褐色土、地山主体
- 3 黄褐色土、軽石粒中量混入、炭化物混入
- 4 黄褐色土上、地山主体
- 5 黄褐色土、軽石粒中量混入
- 6 黄褐色土、軽石粒中量混入、炭化物混入
- 7 黄褐色土、地山主体
- 8 黄褐色土、軽石粒中量混入、炭化物混入
- 9 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 10 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 11 黄褐色土、軽石粒中量混入
- 12 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 13 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 14 黄褐色土、地山主体
- 15 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 16 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 17 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 18 黄褐色土、地山主体
- 19 黄褐色土、軽石粒少量混入、炭化物混入
- 20 黄褐色土、地山主体
- 21 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 22 明黄褐色土、地山主体
- 23 にい黄褐色土、地山主体
- 24 黄褐色土、軽石粒中量混入
- 25 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 26 喀褐色土、軽石粒少量混入



SKF210

- 1 黄褐色土、軽石粒・微量混入
- 2 黒色土、軽石粒・微量混入
- 3 黑色土、軽石粒・微量混入
- 4 黑褐色土、軽石粒・微量混入
- 5 黑褐色土、軽石粒・微量混入
- 6 地山ブロック

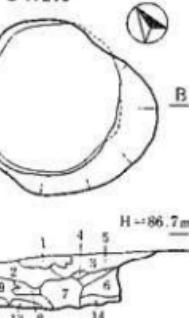
SKF215



SKF215

- 1 黒褐色土、軽石粒少量混入
- 2 黒褐色土、軽石粒少量混入
- 3 黑褐色土、軽石粒少量混入
- 4 黑褐色土、軽石粒少量混入

SKF219

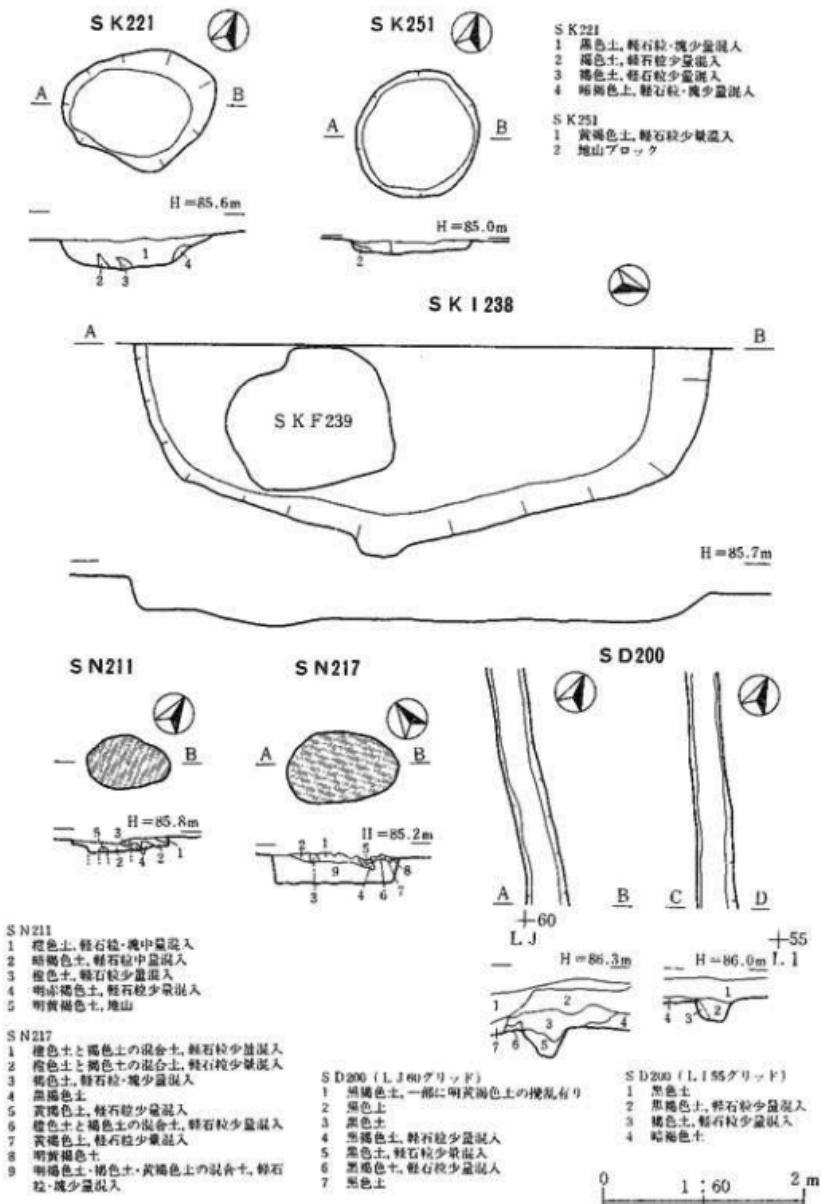


SKF219

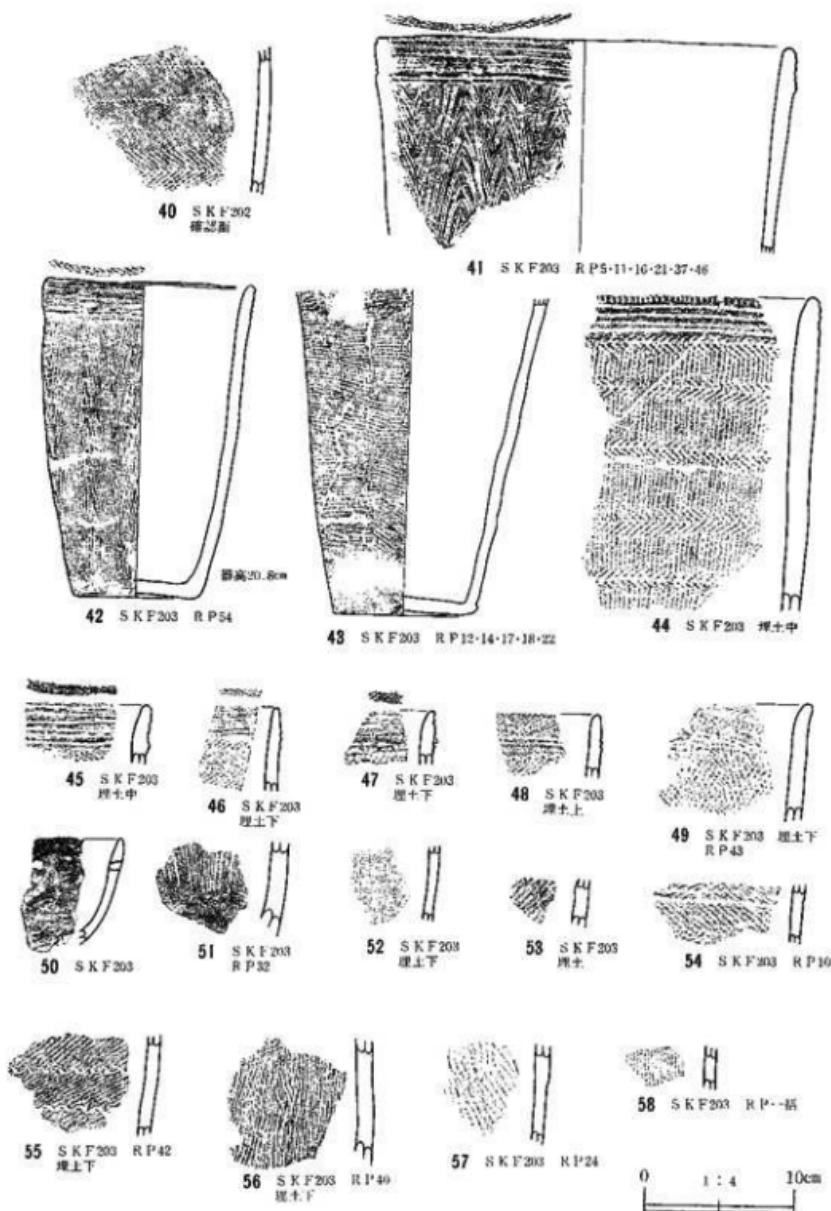
- 1 黄褐色土、軽石粒・微量混入
- 2 喀褐色土、軽石粒・微量混入
- 3 黑色土、軽石粒・微量混入
- 4 明黄褐色土、地山ブロック
- 5 喀褐色土上、軽石粒中量混入
- 6 黄褐色土、軽石粒中量混入
- 7 黄褐色土、黒褐色土の混合土、軽石粒・微量混入
- 8 黄褐色土、軽石粒少量混入
- 9 黄褐色土、軽石粒中量混入
- 10 黄褐色土、地山ブロック
- 11 喀褐色土、軽石粒少量混入
- 12 黄褐色土、軽石粒中量混入
- 13 黄褐色土、地山ブロック
- 14 黑褐色土、軽石粒少量混入

0 1 : 60 2 m

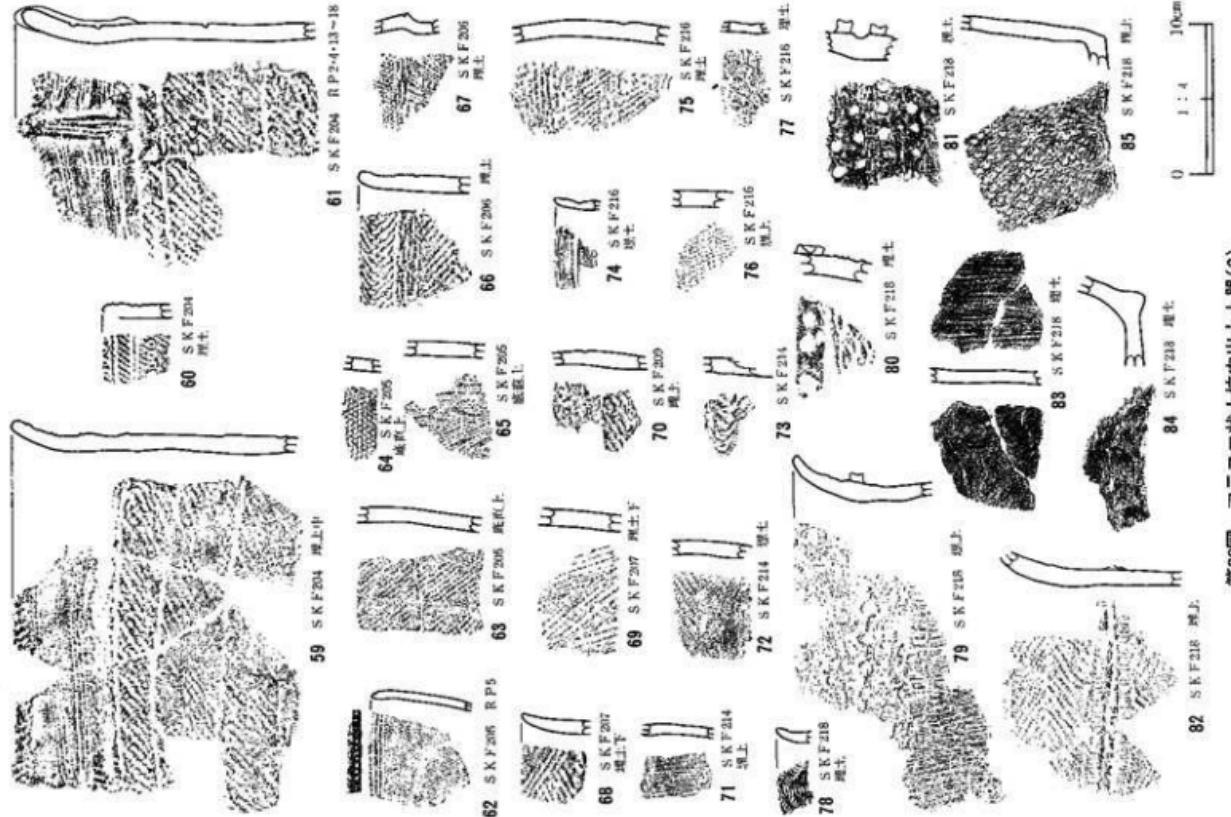
第19図 SKF フラスコ状土坑(7)、SK 土坑(1)



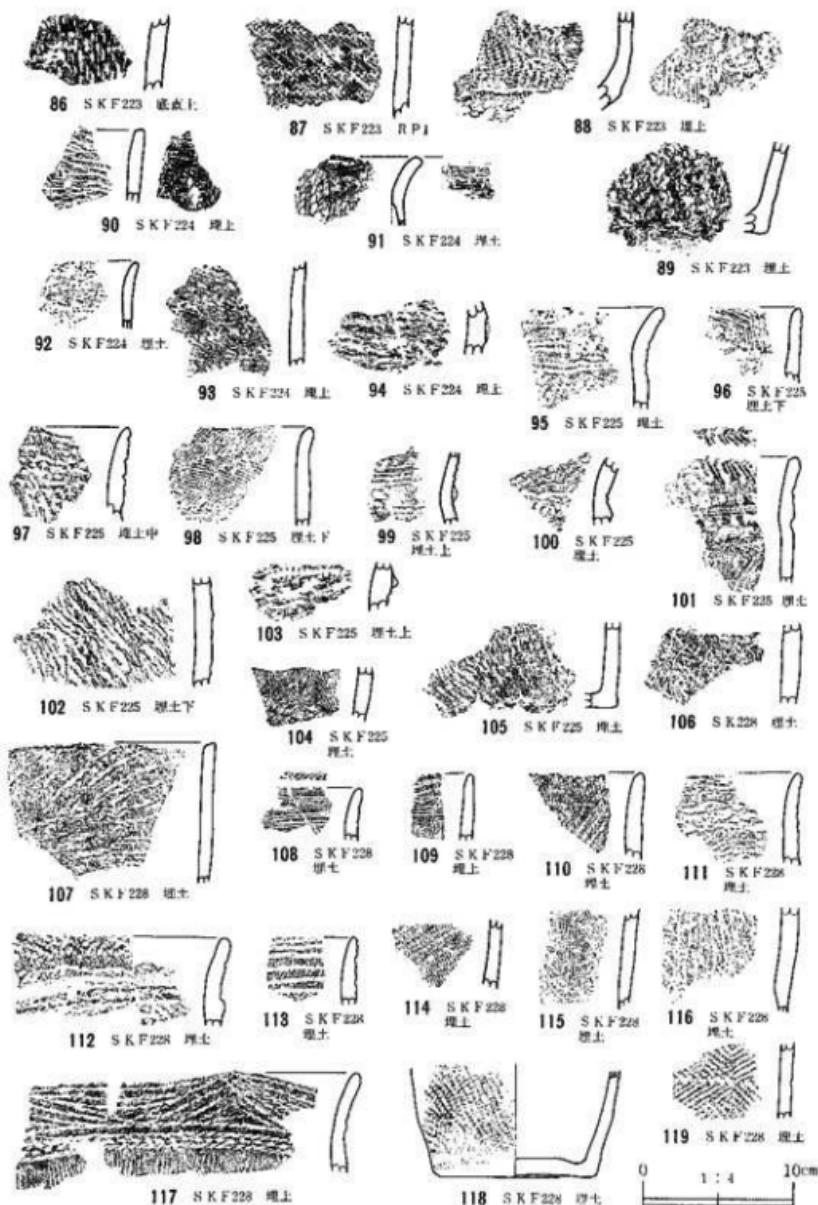
第20図 SK土坑(2)、SK1竪穴状遺構、SN焼土遺構、SD溝状遺構



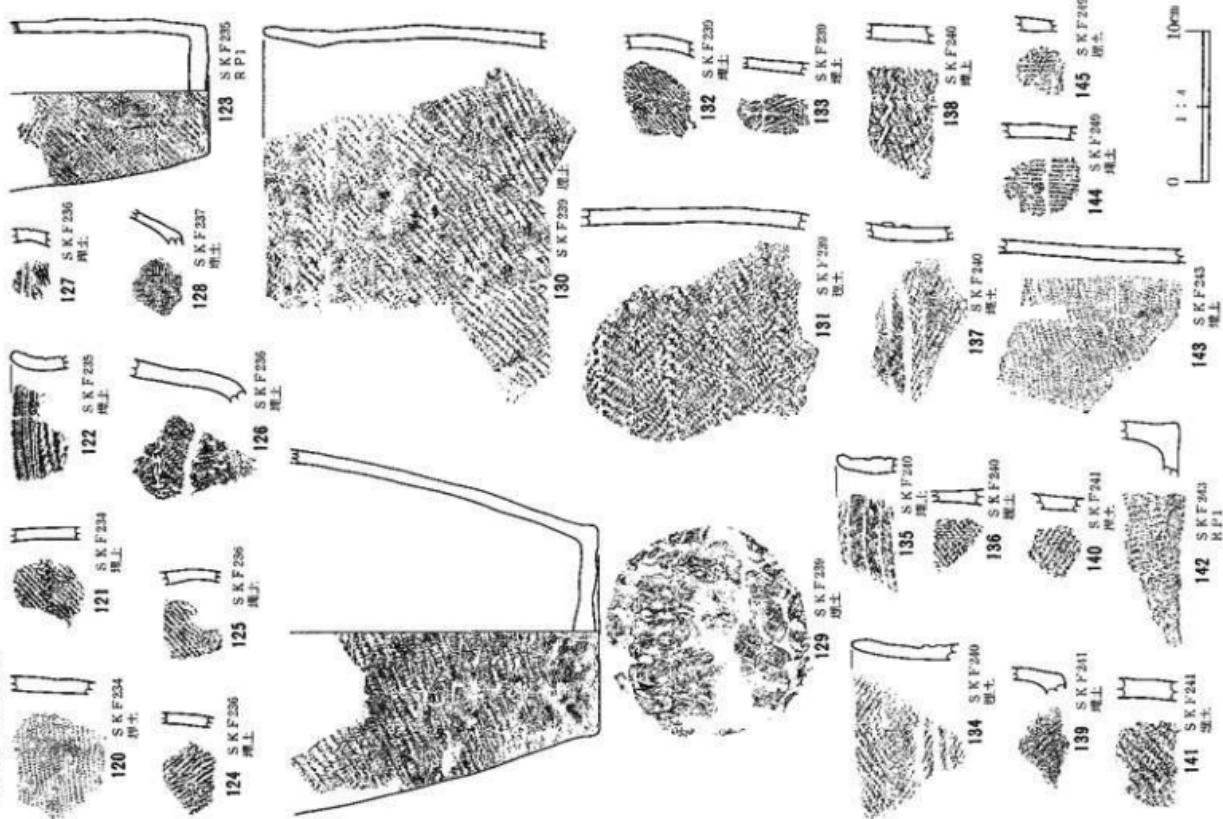
第21図 フラスコ状土坑内出土土器(1)



第22図 フラスコ状土坑内出土土器(2)

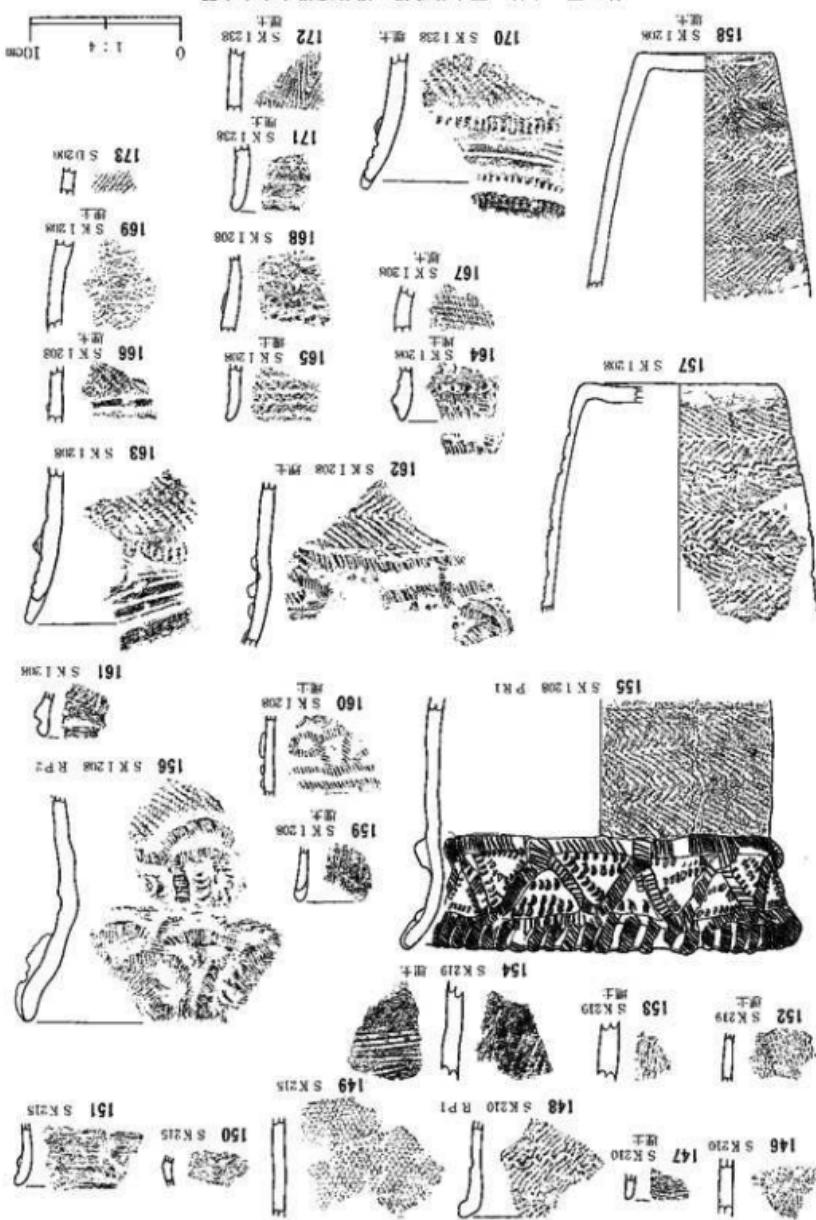


第23図 フラスコ状土坑内出土土器(3)

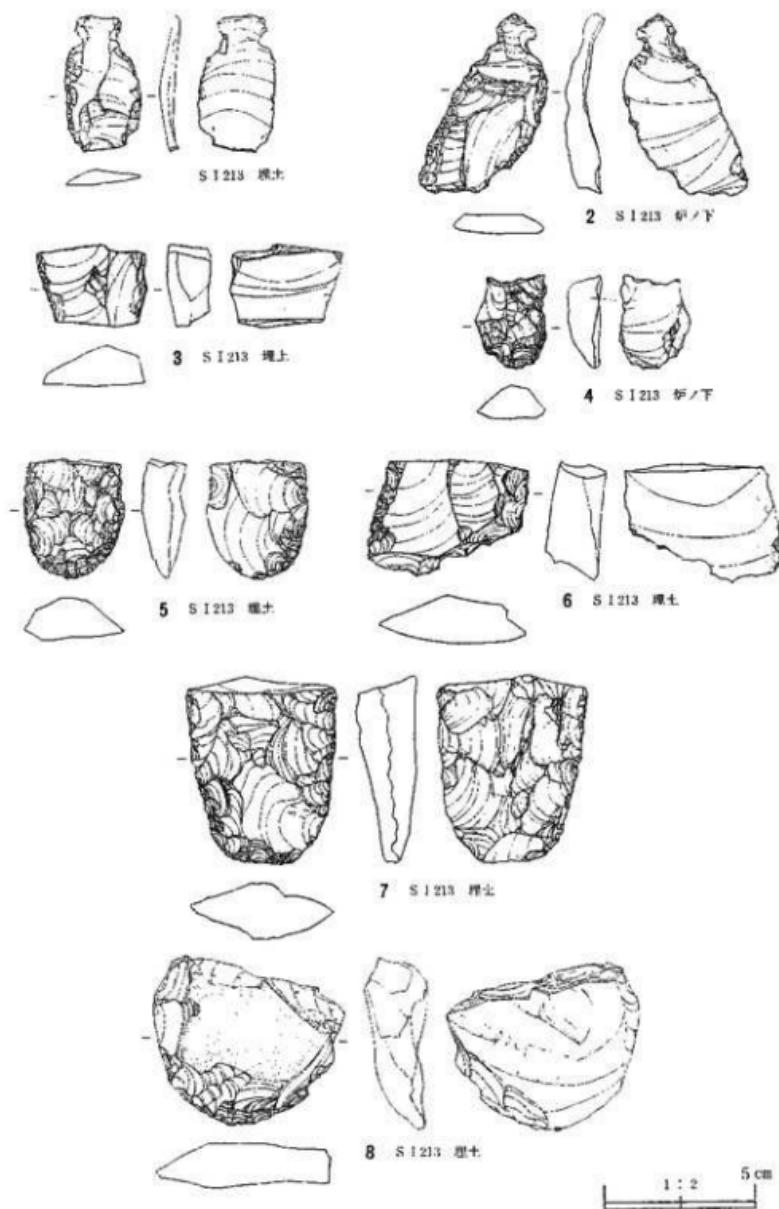


第24図 フラスコ状土坑内出土土器(4)

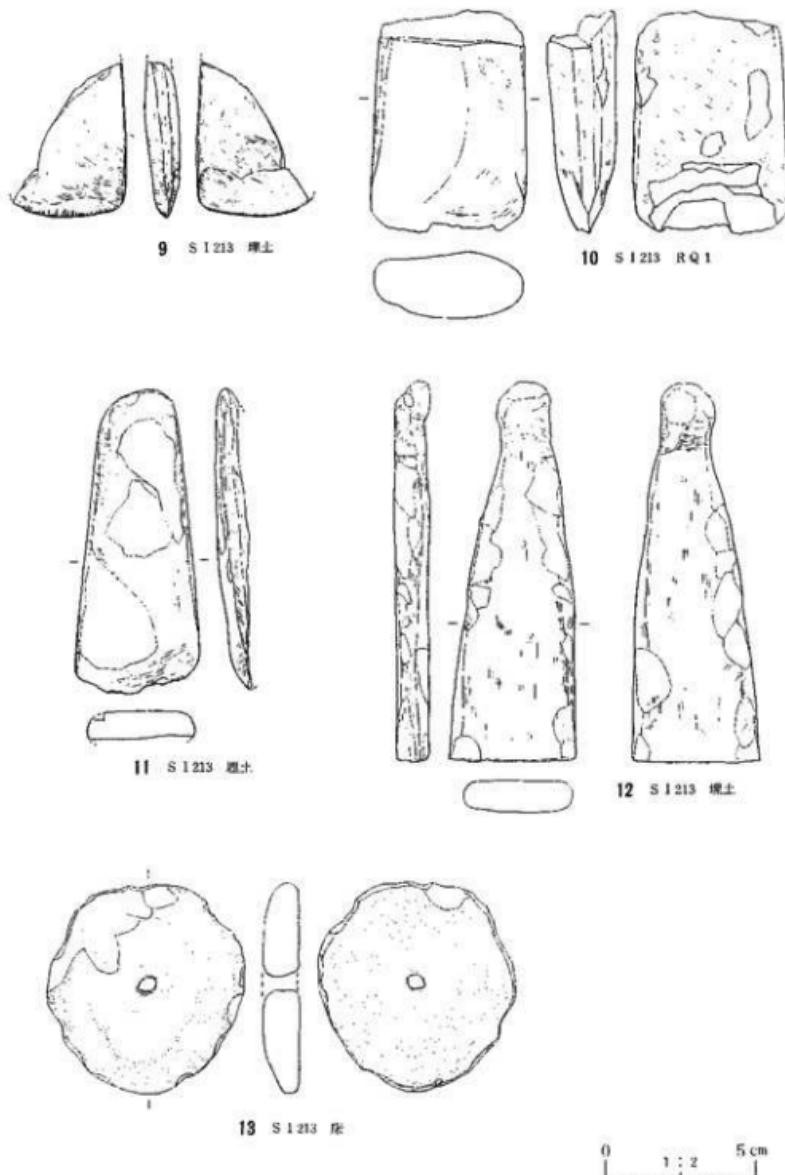
第25圖 土坑、鹽穴狀遺構・繩紋遺構內出土土器



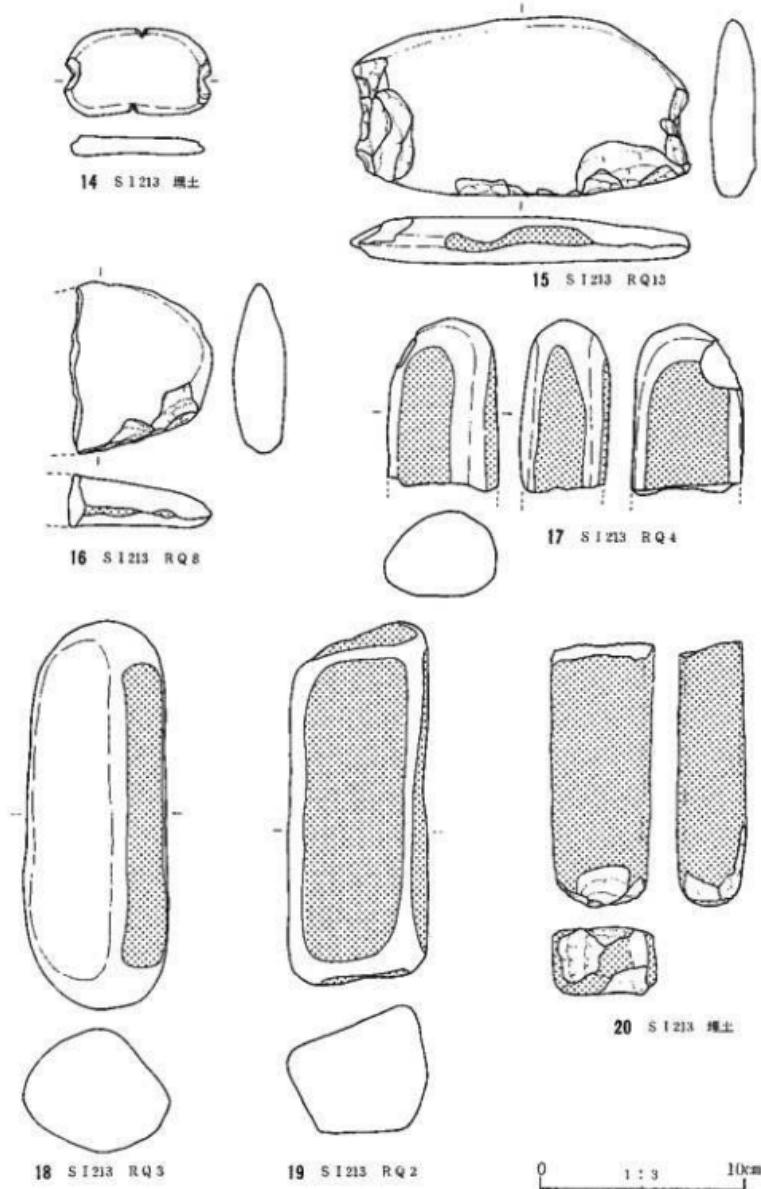
第1圖 敷出遺構上出土遺物



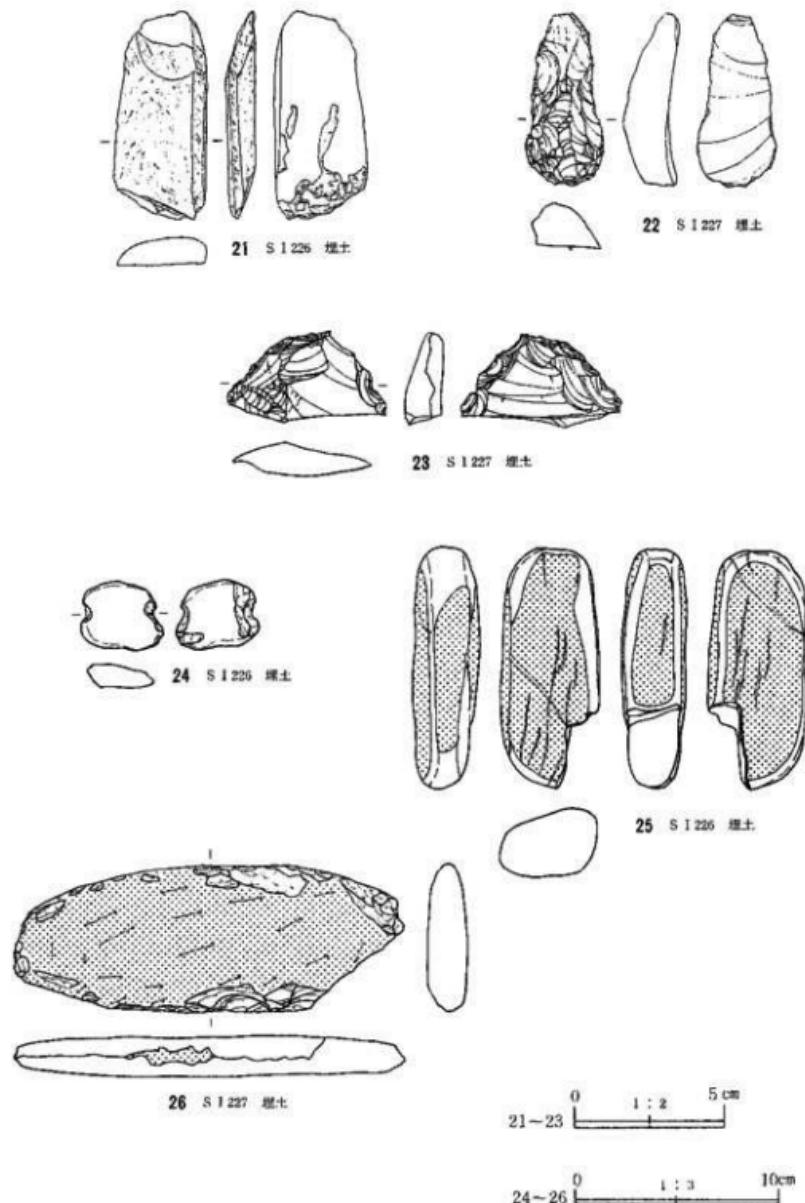
第26図 遺構内出土石器(1)



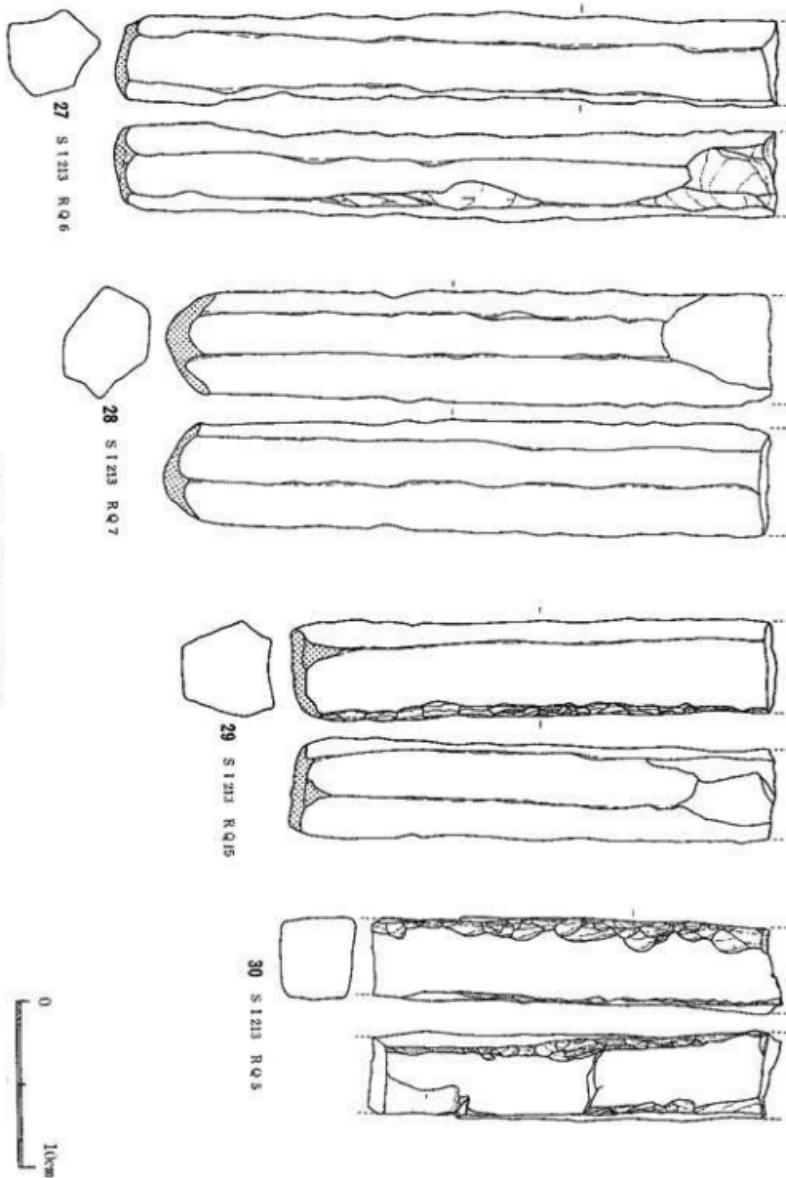
第27図 遺構内出土石器(2)



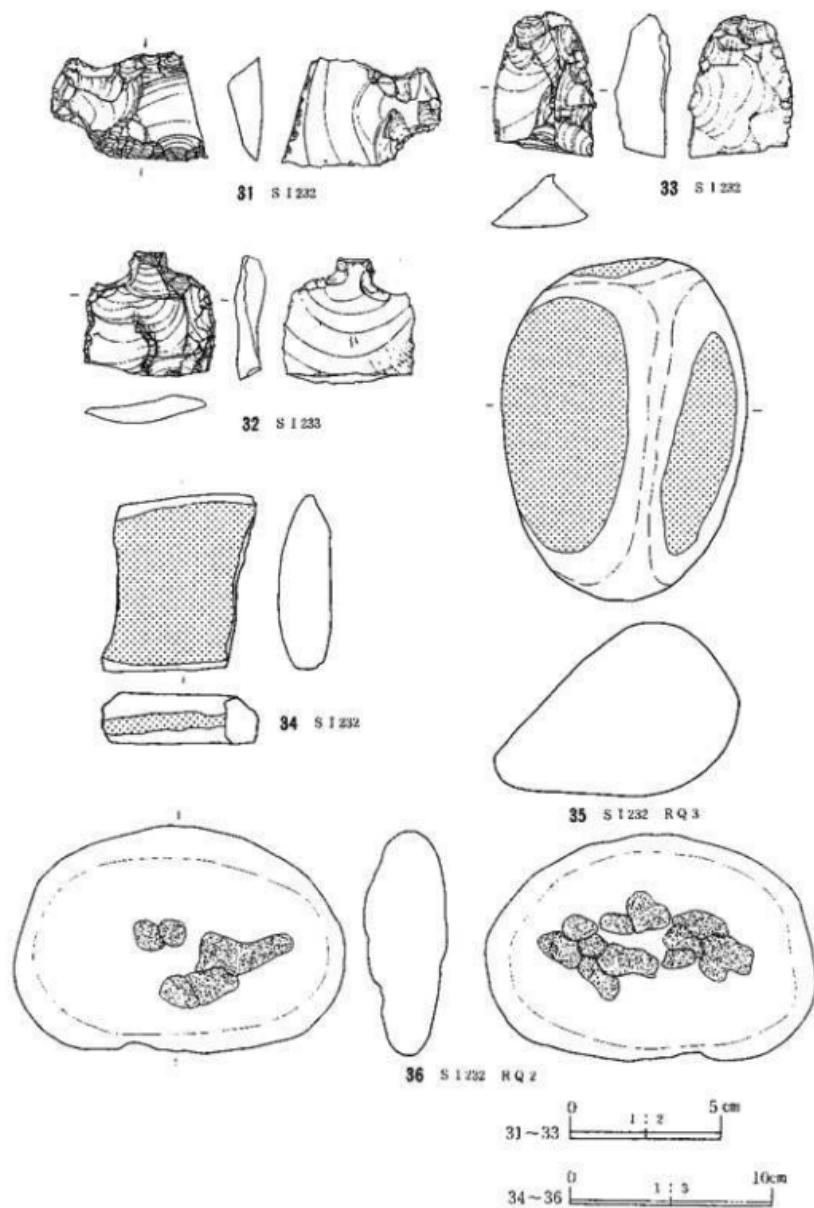
第28図 遺構内出土石器(3)



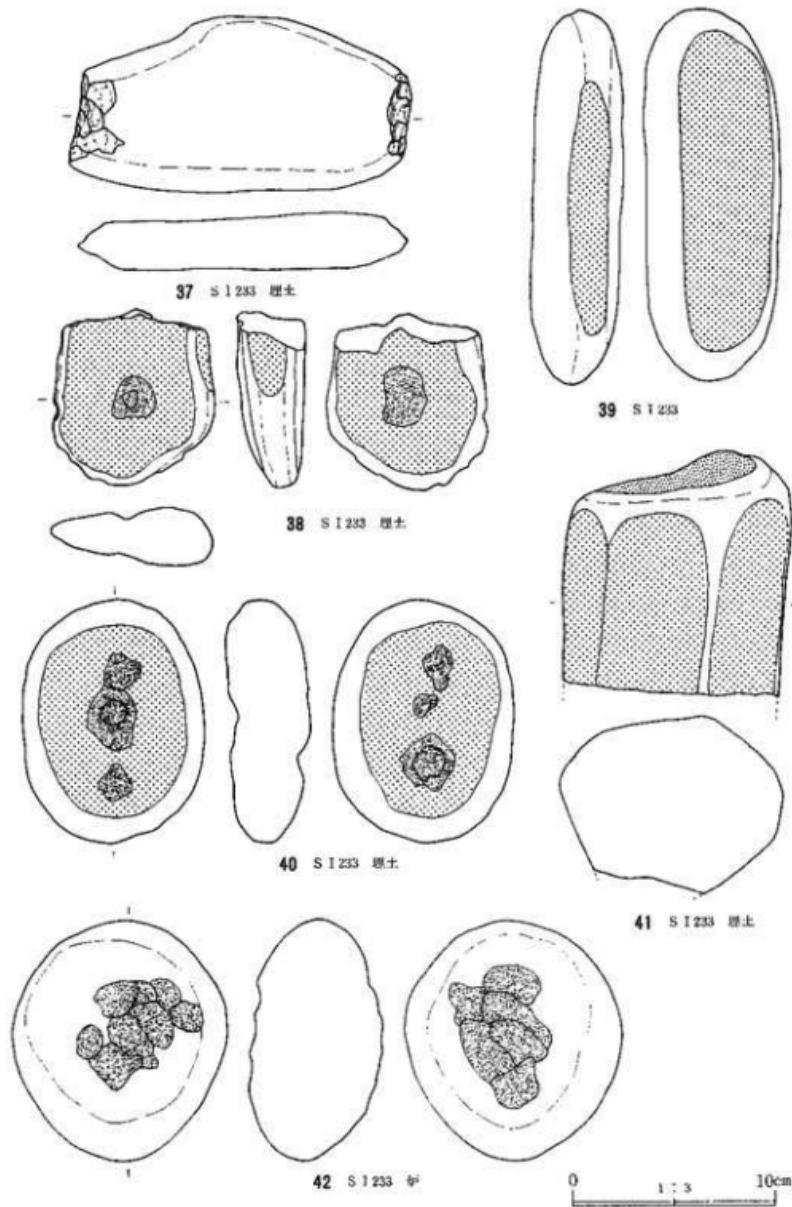
第29図 遺構内出土石器(4)



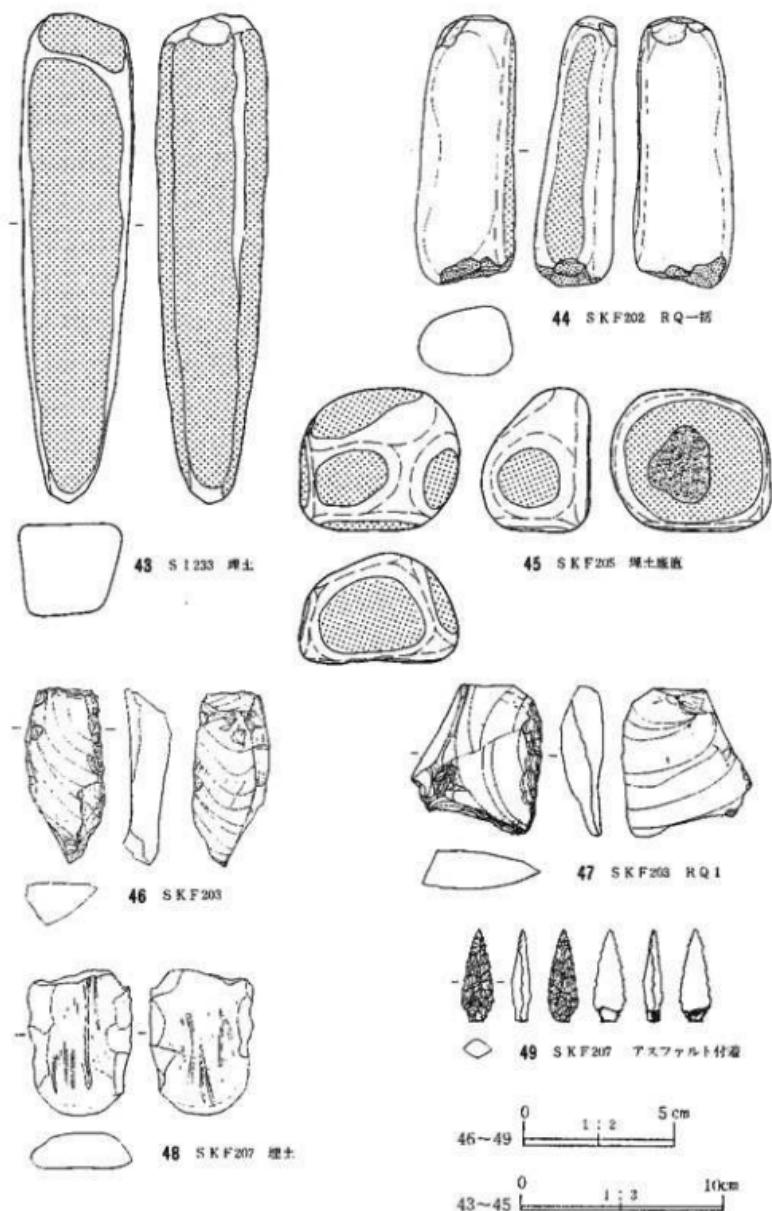
第30図 遺構内出土石器(5)



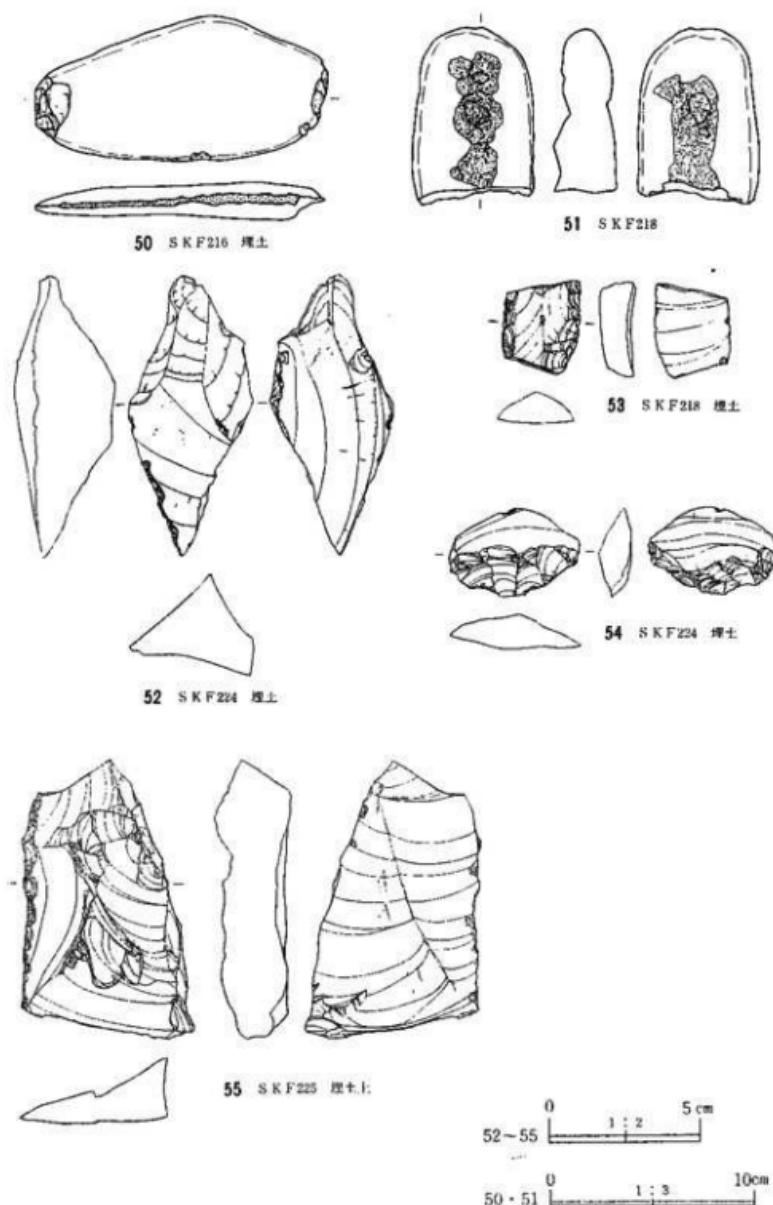
第31図 遺構内出土石器(6)



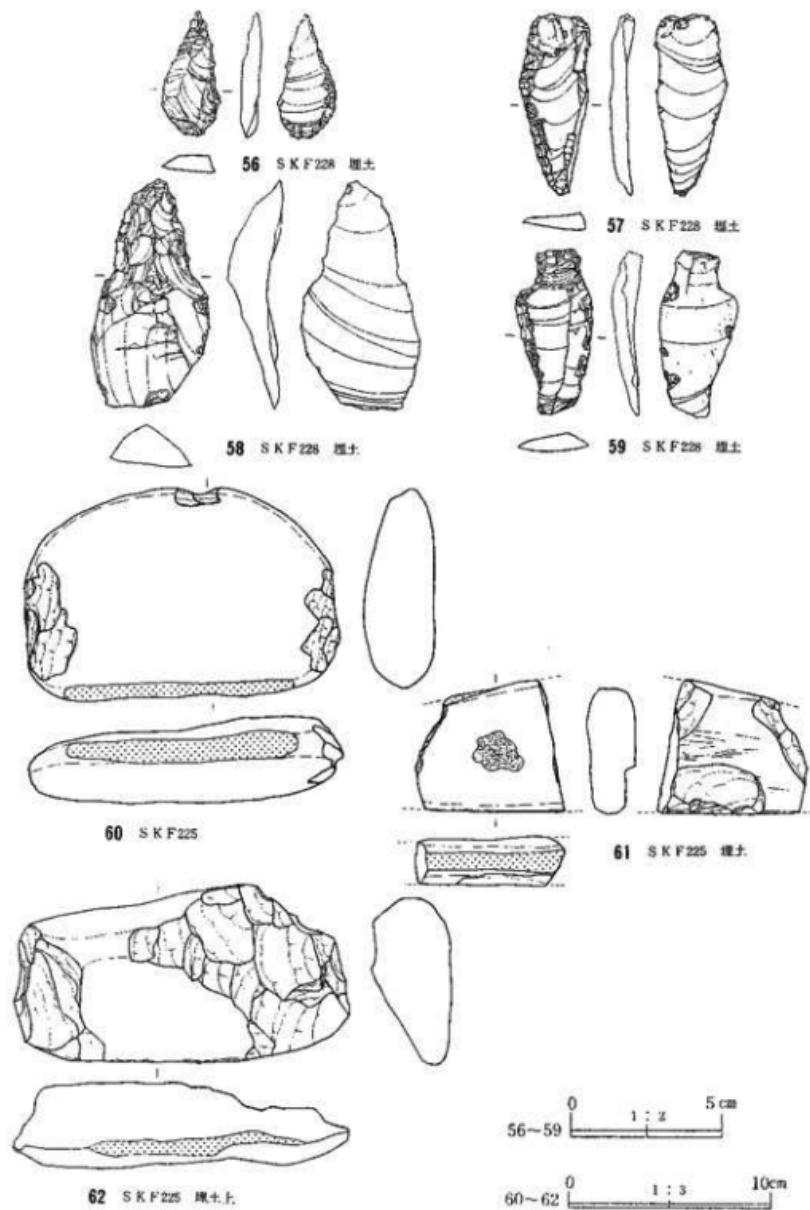
第32図 遺構内出土石器(7)



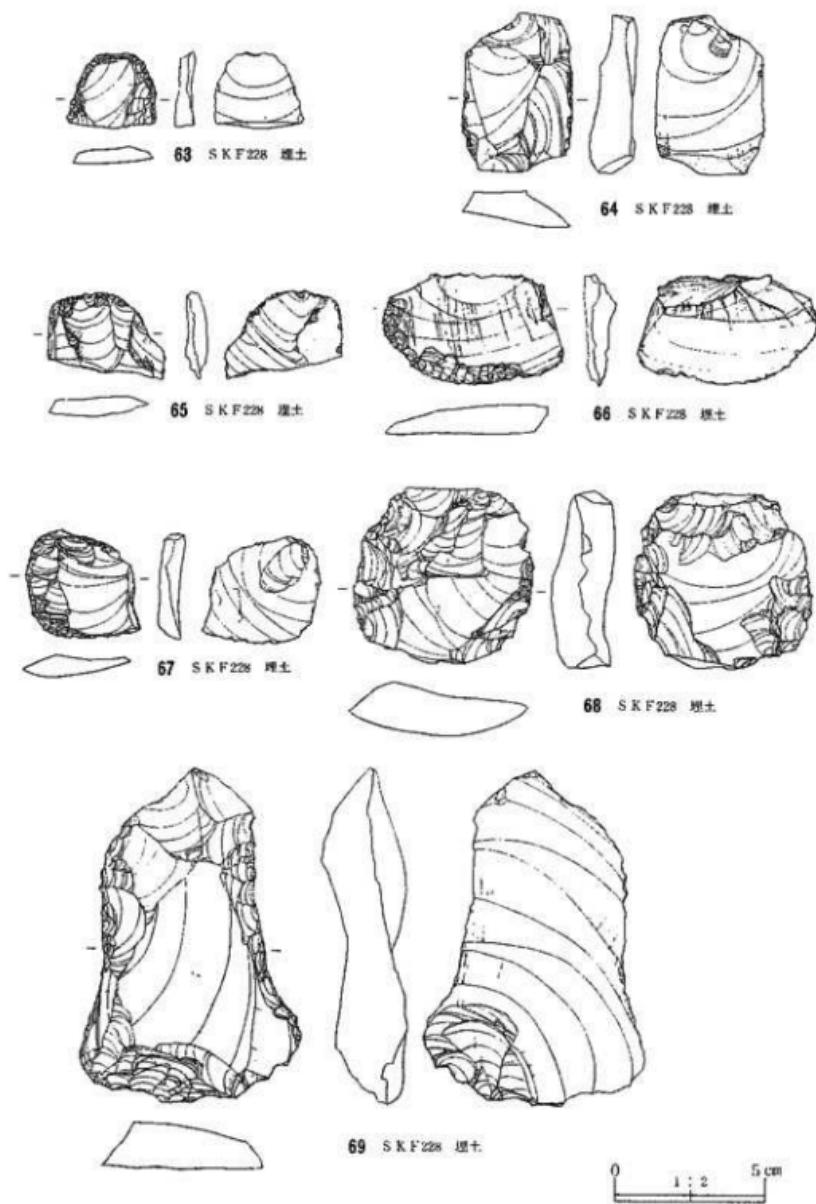
第33図 遺構内出土石器(8)



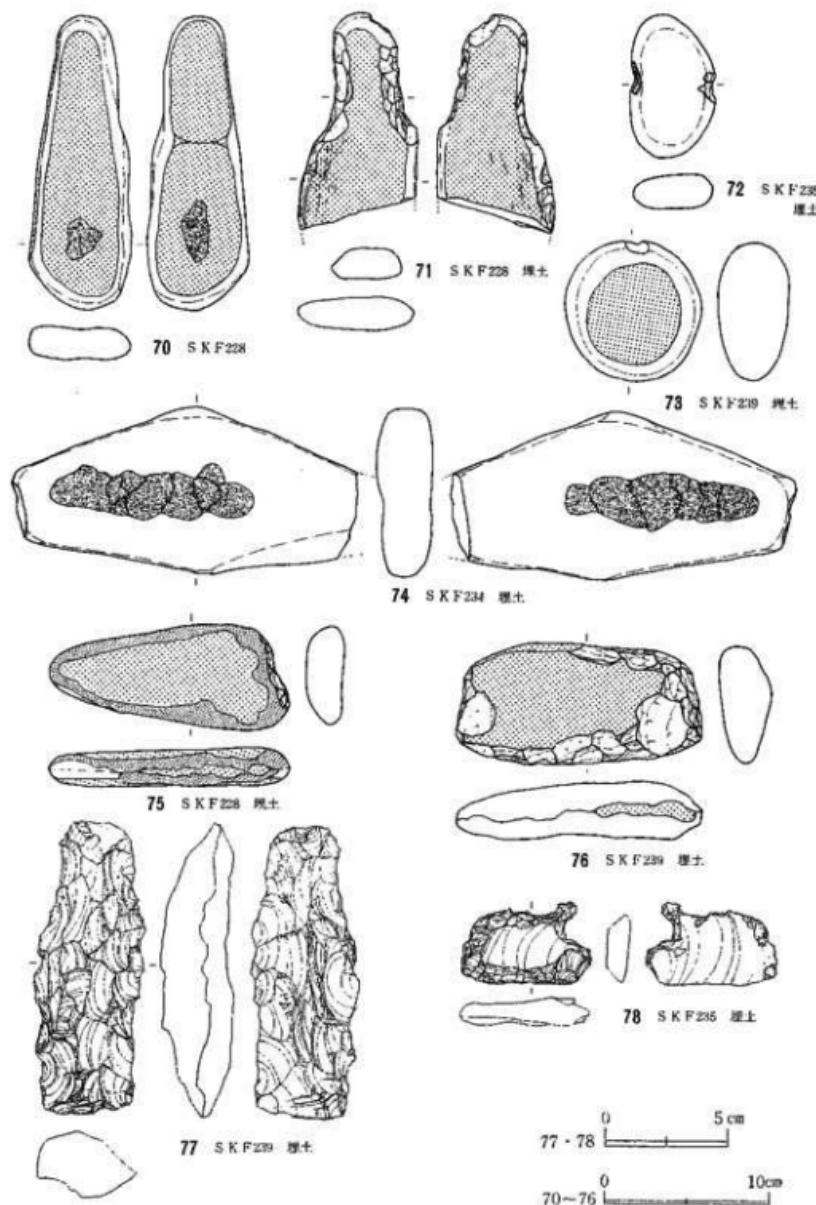
第34図 遺構内出土石器(9)



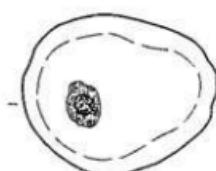
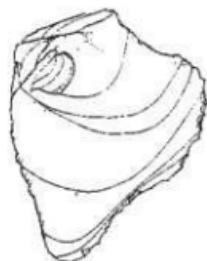
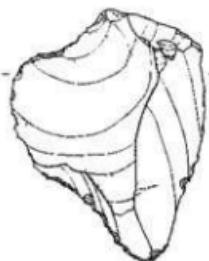
第35図 遺構内出土石器(10)



第36図 遺構内出土石器(11)

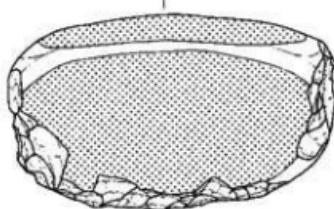
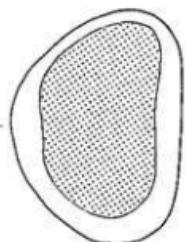


第37図 遺構内出土石器(12)



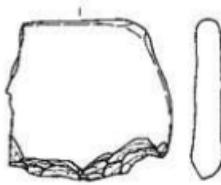
79 SKF241 塗土

80 SKF241 塗土

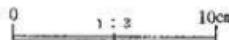
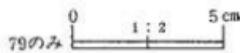


82 SKF242 塗土

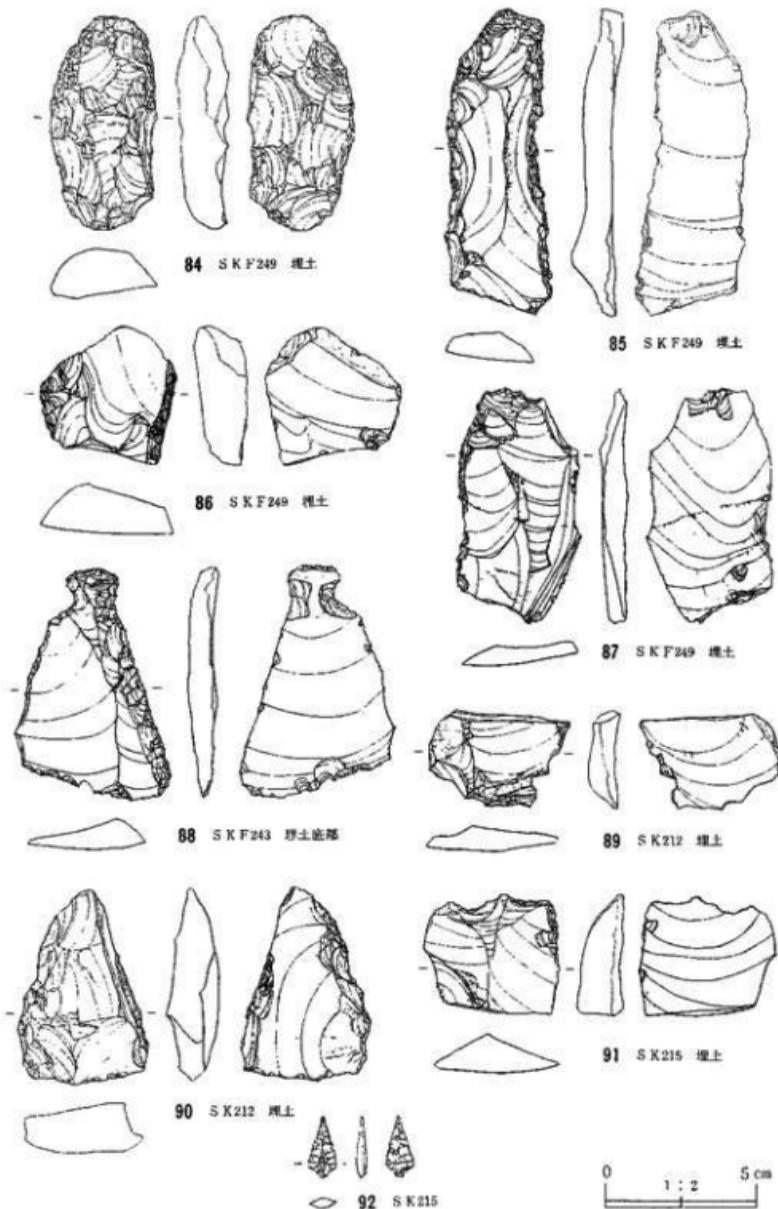
81 SKF241 塗土



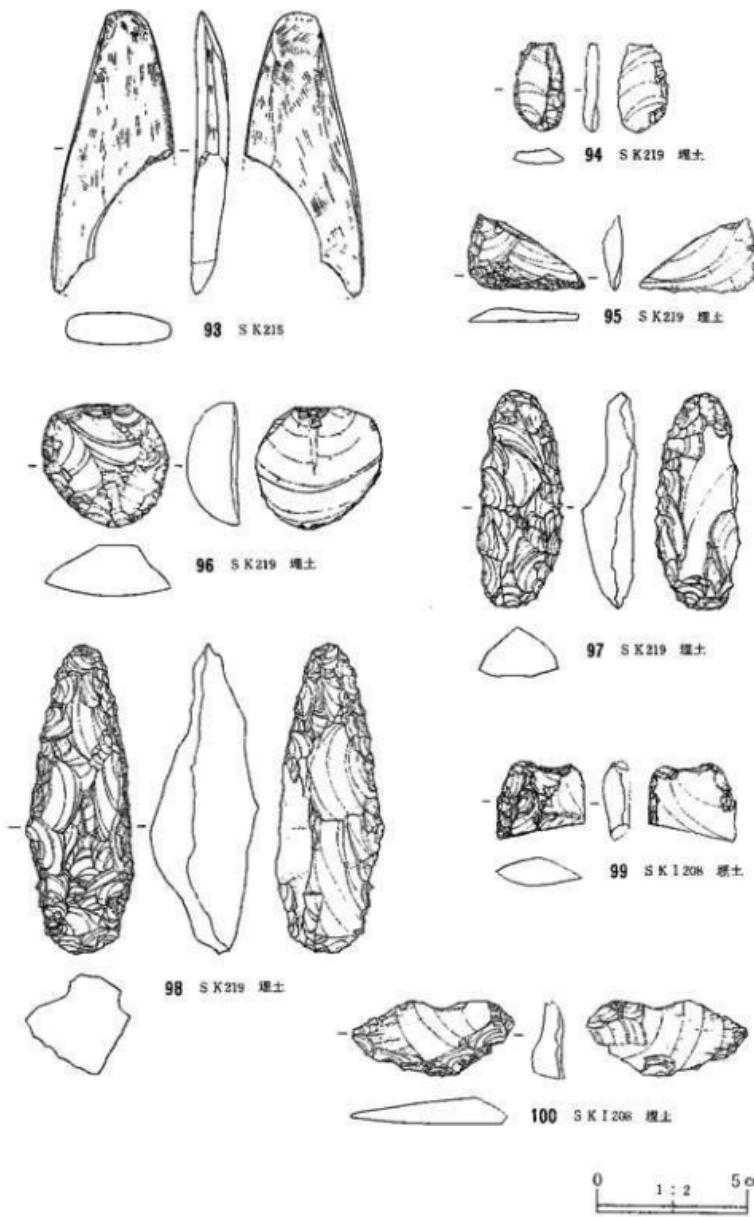
83 SKF249



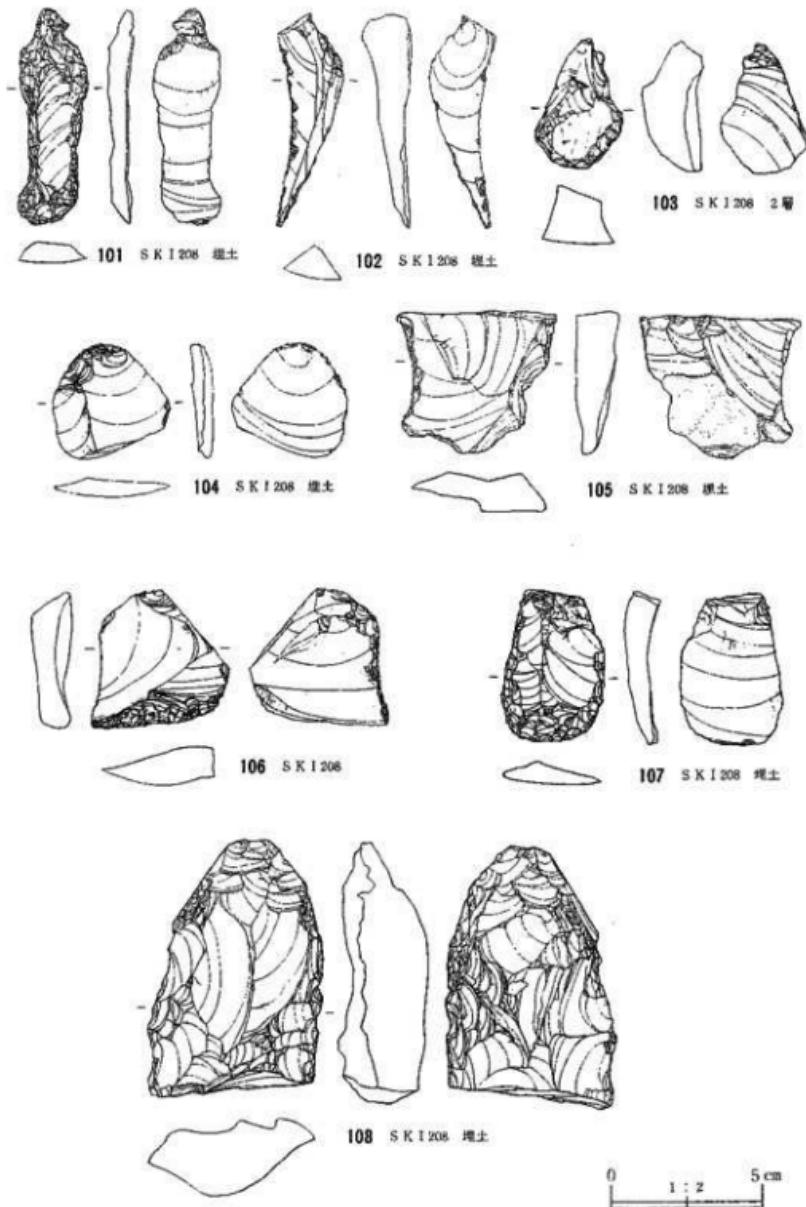
第38図 遺構内出土石器(13)



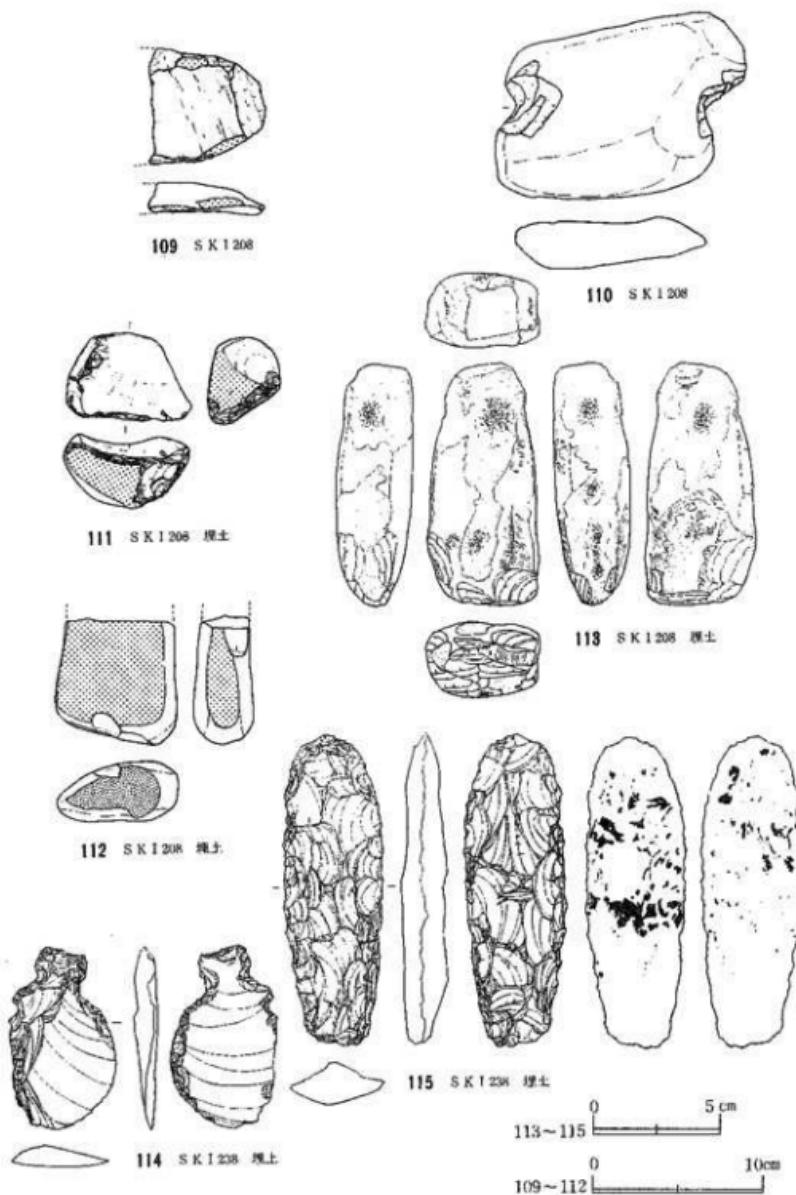
第39図 遺構内出土石器(14)



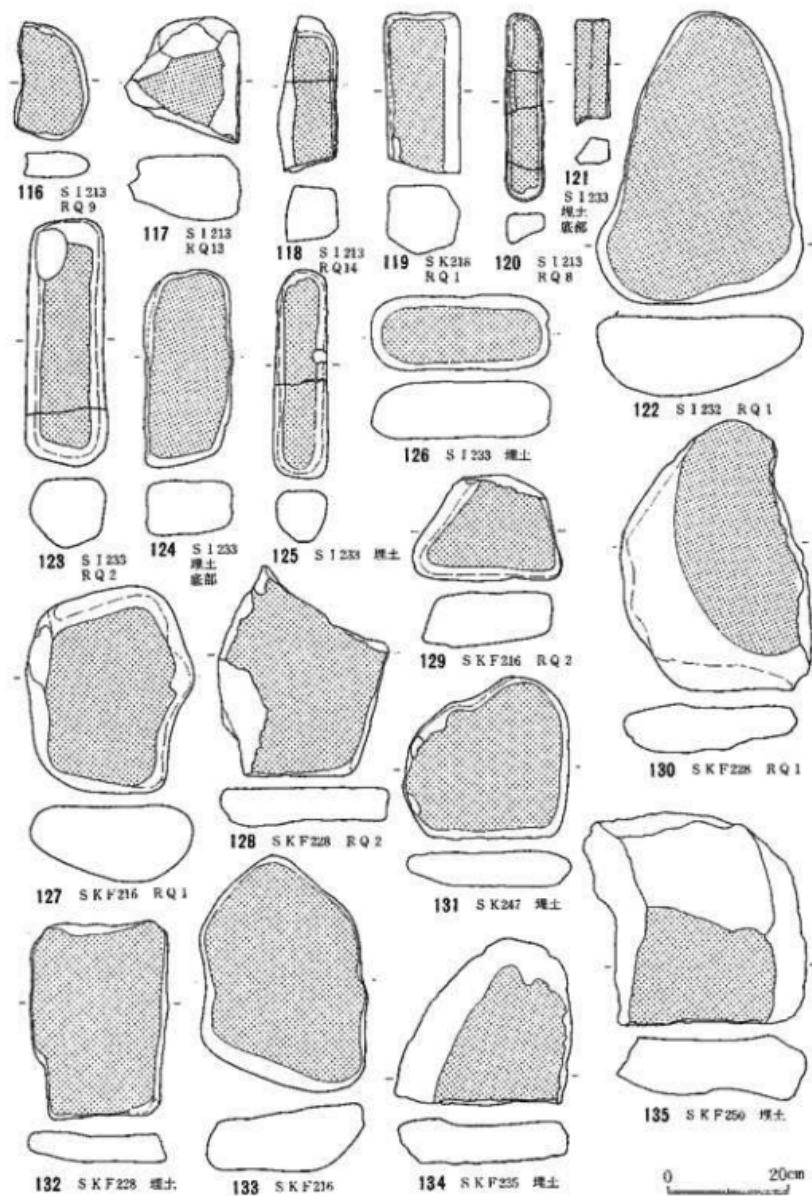
第40図 遺構内出土石器(15)



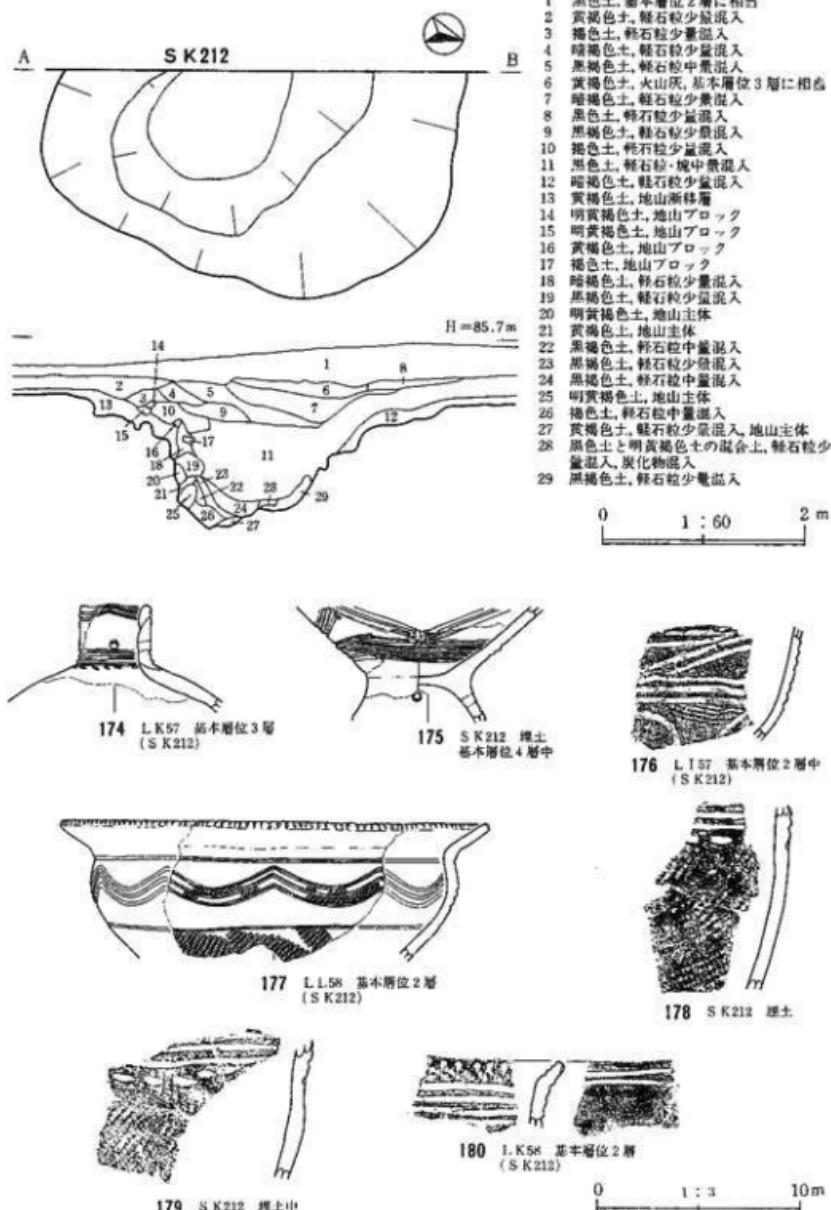
第41図 遺構内出土石器(16)



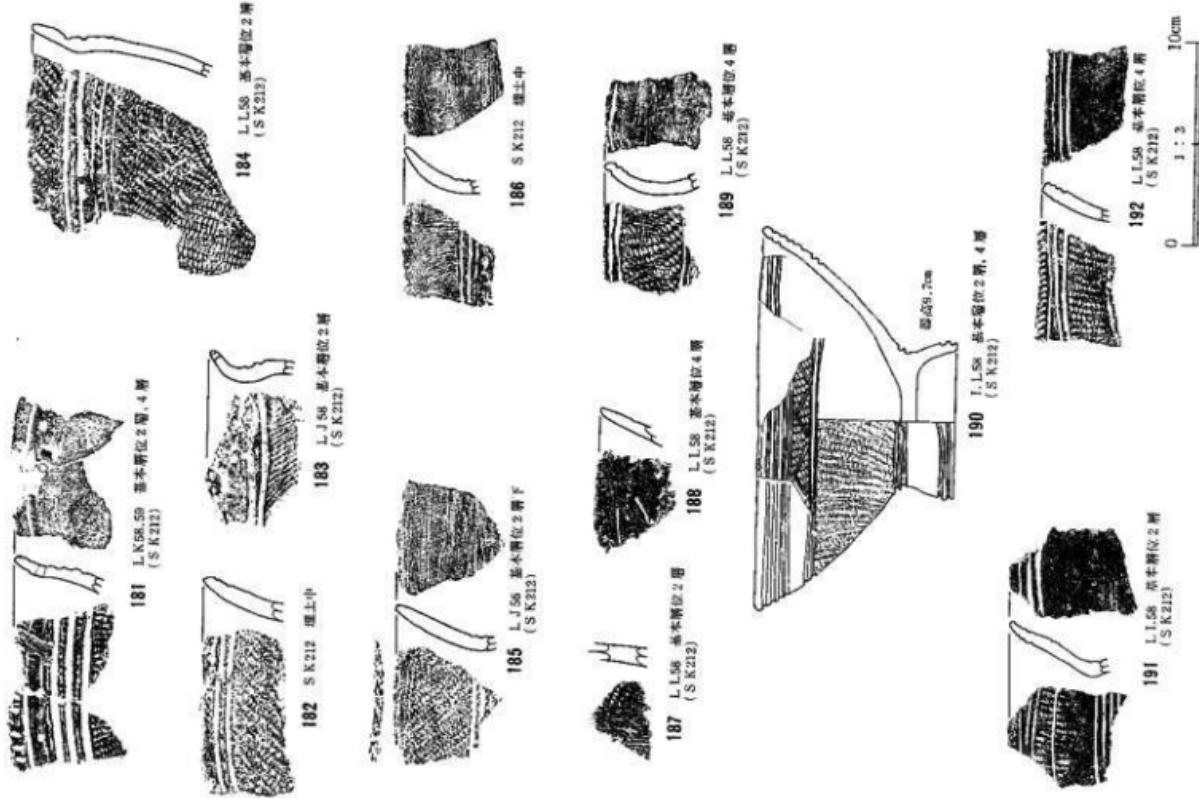
第42図 遺構内出土石器(17)



第43図 遺構内出土石器(18)



第44図 SK212土坑、土坑内出土土器(1)



第45圖 土坑內出土土器(2)

C

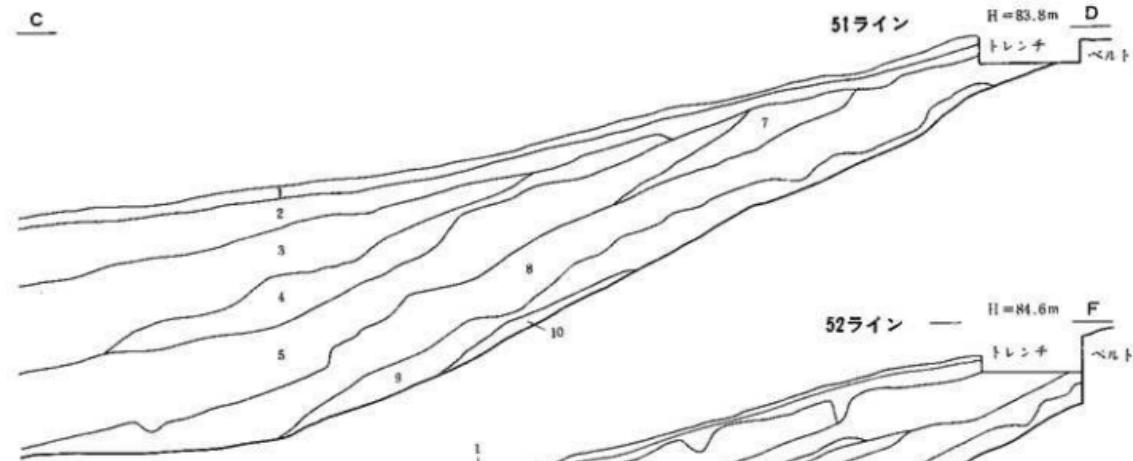
51ライン

H = 83.8m

D

トレンチ

ベルト



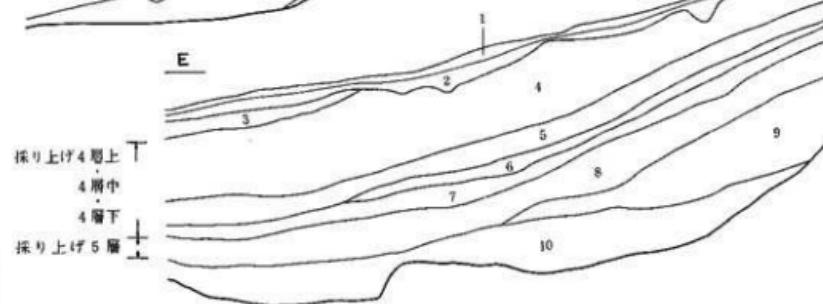
52ライン

H = 84.6m

E

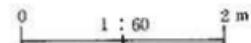
トレンチ

ベルト



第46図 ST 220捨て場土層図(51・52)ライン

- 1 黒色土、表土。
- 2 黒色土、軽石粒少量混入。
- 3 黒色土、軽石粒・塊少量混入。
- 4 黒褐色土に黒褐色土が少量混入、軽石粒・塊中量混入。採り上げ時の4層
- 5 黒褐色土、軽石粒・塊中量混入。採り上げ時の4層
- 6 黒褐色土、軽石粒・塊中量混入。採り上げ時の4層
- 7 黒褐色土に黒色土の混合土、軽石粒・塊少量混入。採り上げ時の4層
- 8 黒色土、軽石粒・塊少量混入。採り上げ時の5層
- 9 黒褐色土に黒褐色土と地山ブロックが少量混入。採り上げ時の6層
- 10 黒褐色土とにごい黄褐色土の混合土、軽石粒・塊中量混入。地山漸移層



地点が、土坑のプラン内にあることから、本来的には本土坑の埋土中に包含されていたものとして扱った。石器は、削器が2点(第39図89・90:破損品につき分類不能)出土し、他に剝片21片と礫2点が出土した。

3. 時期不明

(1)溝跡

S D 200(第20図)

検出地区はL I 55グリッドからL J 64グリッドにかけて伸びる。断面形はU字型である。規模は幅36~40cm、底面幅22~28cm、深さ22~28cmである。重複関係はS I 232、SK F 207を切っていることから、S D 200が新しいものである。

遺物は縄文土器、剝片が出土した。土器(第25図173)は撫糸文を施文する土器である。

第2節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、大部分が縄文時代の土器・石器で、土製品・石製品は微量で、他に平安時代の須恵器壺の破片が極く微量出土した。これらの遺物は、上部平坦面から出土したものは少なく、全体の9割以上の遺物が南西部斜面の捨て場(S T 220)から出土した。捨て場の土器は縄文時代早期・前期・中期・晚期のもので、このうち前期の上器が主体を占める。

捨て場は、上部平坦面から斜面下まで比高差が5.6mあり、急斜面となっている。斜面下では、表土から地山漸移層までの深さが最深部で240cmに達する。第46図は、捨て場の東西51・52ラインの土層断面図である。土層は表土から地山漸移層まで10層に分層できた。各層は斜面の上面から下面にいくにつれて層厚を増しているが、斜面途中で層が途切れたり、新しい層が形成されたりして波状になっている部分も見受けられ、その傾向は上部ほど顕著である。これは、斜面上から捨てられた遺物や流れてきた土砂が堆積する際に起きた伏流現象の結果と思われる。したがって遺物は各層から出土しているが、時期の異なる土器が混在している場合が多い。このうち多量に出土したのは第3~7層で、厚い部分では60~80cmほどになる。土色は全体的に黒~褐色土を呈し、軽石粒・塊が混入している。遺物の採り上げは層位毎に行なったが、類似した土色・土性のため、平面的には見分けがかなり難しい。そのため、第4~7層の厚い所は第4層として、上・中・下に分け、第8層は第5層、第9層は第6層として採り上げた。

1. 土器

前述のように縄文時代早期・前期・中期・晚期・弥生時代などの土器が出土した。したがって土器の分類は施文部位や文様構成・種類・器形によって時期毎に群に分け、その内で細分した。出土地点・出土層名は挿図中に明記している。なお、説明にあたって必要な土器は、遺構内のものも適宜、引用した。遺構内・外出土土器の挿図中の土器番号は通し番号となっており、遺構外出土土器は挿図番号(第47~63図)を省き、挿図中の土器番号のみを記した。

第1群土器(193~230) 早期の土器である。内面調整が条痕によって行われ胎土に繊維を含むものと含まないものがある。色調は褐色~赤褐色を呈し、薄手の作りで、全体的に焼成が良好である。内外の器面調整、文様の施文によって細分した。

第1類(193~195)

条痕文を施文した後、細い粘土紐の貼付けにより幾何学的な細隆起線文を施す土器で、器厚は5~7mmと薄い。173・174は口縁部で、上面が面取りされ、平坦で条間は4~5mmと狭い。

第2類(196~202)

条痕文を施文した後、幾何学的な沈線文を施文したもので、いずれも条痕文はわずかに痕跡を残すのみである。条間は5mmと狭い。色調はほとんど赤褐色を呈する。196・197は口縁部破片で、202の底部付近の土器と似た文様構成である。199・201は196・202より沈線が細く浅い。

第3類(203~220)

縦・横に条痕文を施文した後、沈線文を施文するもので、2類以外を一括した。沈線は太いものや細いものなどバラエティーに富む。203~206は太い沈線文を力強く施文するもので、205は波状口縁を呈する。208・210・211・218のようにやや太めの沈線を浅く施文するものや、215・219・220のように先端部の鋭い工具で細い沈線を施文するものなどがある。

第4類(221~225)

内外に条痕文を施文する土器である。

第5類(226~227)

外面にのみ条痕文を施す土器である。

第6類(228)

無文の土器である。大変薄く、硬質である。

第7類(229~230)

条痕文を施文後、沈線を施文するもの。やや器厚があり、胎土に繊維を多く混入している点

で第3類と異なる。

第II群土器(231～378) 前期の土器である。ほとんどの土器が胎土に纖維を含み、数例を除いては深鉢形土器である。器形や口縁部の文様、文様帯の有無から下記のように分類した。

第1類(231)

無文土器で231の1点のみである。口唇部がやや平坦になるものである。胎土には多くの纖維を含み、器厚は10mmと厚い。

第2類(232～279)

隆帯や区画された文様帯をもたないもので、口縁部に原体を回転させて文様を施文しているものである。これらは以下に細分できる。

- a. (ア)外面に纖文か撚糸文、内面に条痕文を有する(232～238)。口唇部が平坦かそれに近い形状を示す。口唇上には、237が山形状の小突起、233が纖文の回転文、238が指頭状の押圧文を有する。
 - (イ)外面に纖文と条痕文、内面に条痕文を有する(239)。1点のみである。
 - (ウ)外面に纖文、内面に撚糸文を施文する(240)。1点のみである。口縁部上面に刻目を施す。
- b. 撥糸文の土器である(241～252、255～257、259～253)。口縁部に平行に数条の纖文原体の側面圧痕文を施すものもある(247)。器形や口縁部施文法にいくつかのバラエティーが認められる。241は小さい底部から外反ぎみに丸味をもって立ち上がり、胴上半で直線的になり、口縁部がやや外反する。口唇上に刻目を有する。242・243は小さい底部から外反ぎみに直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反する。242は上げ底となっている。244～246は胴部に縱位の撚糸文(244は木目状撚糸文)、口縁部下に横～斜位の撚糸文を施文するものである。249は底径と口径の差があまりない小型の深鉢形土器である。250～252は波状口縁を呈し、250・252が2つの波頂部、251が4つの波頂部を持つ。250は、口唇上に刻目をもつ。249～252は器高に対して、口径が小さく、ほっそりした感じの土器である。260は口縁部直下に纖文原体の側面圧痕文を3条施文する。
- c. 繩文の土器である(253・254・258・264～268)。253・254は同一個体である。264～266は口唇部が平坦になっているもので、266は波状口縁である。267は内面に横位のミガキが加えられ、特に平滑である。
- d. 不整撚糸文を施文する土器である(269～271)。
- e. 羽状纖文を施文する土器(272～276)である。口縁部直下に横位に沈線や、刺突を施文するものもある。

f. 網目状撚糸文を施文する土器である(277~279)。

第3類(280~291・370)

隆帯をもたないもので、口縁部に原体を回転させて文様を施文しているものである。これらは以下に細分できる。

- 不整撚糸文を施し、胴部は撚糸文を施文するもの(280~287・370)。
- 羽状繩文を施文するもの(288~290)。290は口頸部に撚文原体の側面圧痕を施文する。
- 譙文を施文するもの(291)。

第4類(292~336)

指頭圧痕文や絡条体圧痕文、爪形文を施す隆帯をもつもので、口縁部文様帶に原体を回転させて文様を施文しているものである。これらは以下に細分できる。

- 不整撚糸文を施文するもの(292~307)。隆帯の上下に沈線をもつものもある。隆帯上に指頭圧痕を施文し、口縁が大きく外反し、口縁部上面に刻目をもつものが多い。器形は、293のように径の小さい底部から胴部上半にかけてわずかに外に張り出し、口縁部が外反するものを主体とする。
- 撚糸や多軸絡条体を施文するもの(308~317)。隆帯の上下に沈線をもつものもある。隆帯上には指頭圧痕を施文し、口唇上に刻目をもつものも多い。器形は4類aに似るが、口縁部の外反が第4類aほど大きくはない。
- 羽状繩文や斜行繩文を施文するもの(318~335)。羽状繩文は結束のあるものとないものがある。隆帯は低く、細いものが多いが、中には隆帯がなく、側面圧痕で区画するものもある(322)。結束ある羽状繩文の施された土器は、隆帯上に爪形文が付されわずかに外に向かって直線的か、底部から真っすぐに立ち上がる器形が多い。
- 繩文を施文するもの(336)。隆帯上と口唇上に指頭圧痕を施文し、口縁部が大きく外反する。

第5類(337~369)

口縁部文様帶の幅が狭く、主にその下端に細く低い形ばかりの隆帯を有し口縁部文様帶に主として譙文原体の側面圧痕文を施文するもの。内面は研磨されて平滑である。

- 側面圧痕文が横位に数条平行して施された文様を主体とする。
(ア) 平口縁に沿って直線的に施されたもの(337~351)。口縁部文様帶が大変狭い。337は、底径が大きく、底部から胴中央にかけてわずかに外に張り出し、口縁部までは真っすぐ立ち上がる器形で、どっしりとした感がある。
(イ) 波状口縁に沿って曲線的に施されたもの(352~354)。352は隆帯が上下に2本貼付され、胴部に多軸絡条体が施文されている。354は複合口縁で、文様帶にボタン状貼付

- 文をもつものである。
- b. 側面圧痕文が山形状や菱形に施された文様を主体とする(355~364)。文様帶の広いものと狭いものがある。
 - (ア)側面圧痕文が直線的なもの(355~360)。
 - (イ)側面圧痕文が曲線的なもの(361~364)。
 - c. 側面圧痕文が主に横位に数条平行して施された文様帶に、垂下する側面圧痕文を加えるもの(365~368)。文様帶の広いものが多い。366は、胴部上端で内傾し、頭部ですばまり口縁部上半が外反するか直線的に立ち上がる器形であると考えられる。
 - d. 369は胴部破片で、本類のいずれに属するか不明であるが、内面(図の右上端)に木の実の圧痕が残っている。

第6類(371~378、第10図2・4)

前期の土器と思われるが、上記の分類に入らないものを本類とした。

- a. 口縁部に爪形状の刺突文を施す隆帯をもち、口縁部文様帶に刺突文とボタン状貼付文を施す土器である(371)。371は、器最大径が胴部中位にある深鉢形土器である。小さな底部から外傾して立ち上がった胴部は、その中位で大きく膨らんだ後内傾し、頭部ですばまり、口縁部が弱く外傾する。口縁には4つの山形状突起を持ち、その下にボタン状の貼付文が付され、突起部は内弯する。口縁部文様帶は無文地で、先端が整ってない断面円形の刺突具による刺突が施されている。胴部の木目状燃糸文は条間が大きい。
- b. 口縁部文様帶に竹管文を施す土器である(372~375)。372と373、374と375は同一個体で、372と373の胎土には繊維を混入しない。374と375の口縁部文様帶には、上から不整燃糸文、4段の竹管刺突列、綾格文が施されている。
- c. 口縁部に平行沈線と刺突を施すもの(376)。
- d. 口縁部に横位に浅い沈線文を施し、つまみ出したような隆帯をもつもの(377)。
- e. 小波状口縁を有し、口縁部下に口縁に平行にヘラ状工具で押引き状の沈線を5条施し、その下に単軸絡条体第3類を回転施文(葺瓦状燃糸文)するもの(378)。378の胎土には、砂粒を多く含むが繊維を含まず焼成が非常に良い。内面の口縁部には段を有する。
- f. 胴部が張り出し、頭部がくびれ口縁部が外反する円筒土器にはない器形で、渦巻状の貼付文や、山形状の刺突文、沈線文を施す土器である。S I 213堅穴住居跡から1点(第10図2)出土している。赤褐色で、胎土に砂粒を混入する。
- g. 広い底部から曲線的に内傾する小型鉢形土器で、無文の土器である。赤褐色で、胎土に砂粒を混入する。S I 213堅穴住居跡から1点(第10図4)出土している。

第III群土器(第11図33、第12図35) 前期末から中期初頭の土器である。S I 233堅穴住居跡から出土した。

第1類(35)

複合口縁の深鉢形土器である。文様帶には縄文原体の平行な側面圧痕文とボタン状貼付文を施文するものである。

第2類(33)

4つの橋状把手をもつ深鉢形土器である。隆帯で画された口縁部文様帶には横位に絹条体圧痕文とボタン状貼付文を施文する土器である。

第IV群土器(第25図155・156、379～387) 中期の土器である。器形や口縁部の文様から下記のように分類した。

第1類(380・383～385)

口縁部文様帶に縄文原体の側面圧痕文を横位や梢円形に施文するものである。380・384は弁状突起もしくは先端の割れた山形突起をもち、突起下から垂下する2条の隆帯を施文しているもので、焼成良好で胎土に纖維を含まない。385は弁状突起下の隆帯間にボタン状貼付文様の粘土塊を充填しているもので、胎土にはわずかに纖維を含む。

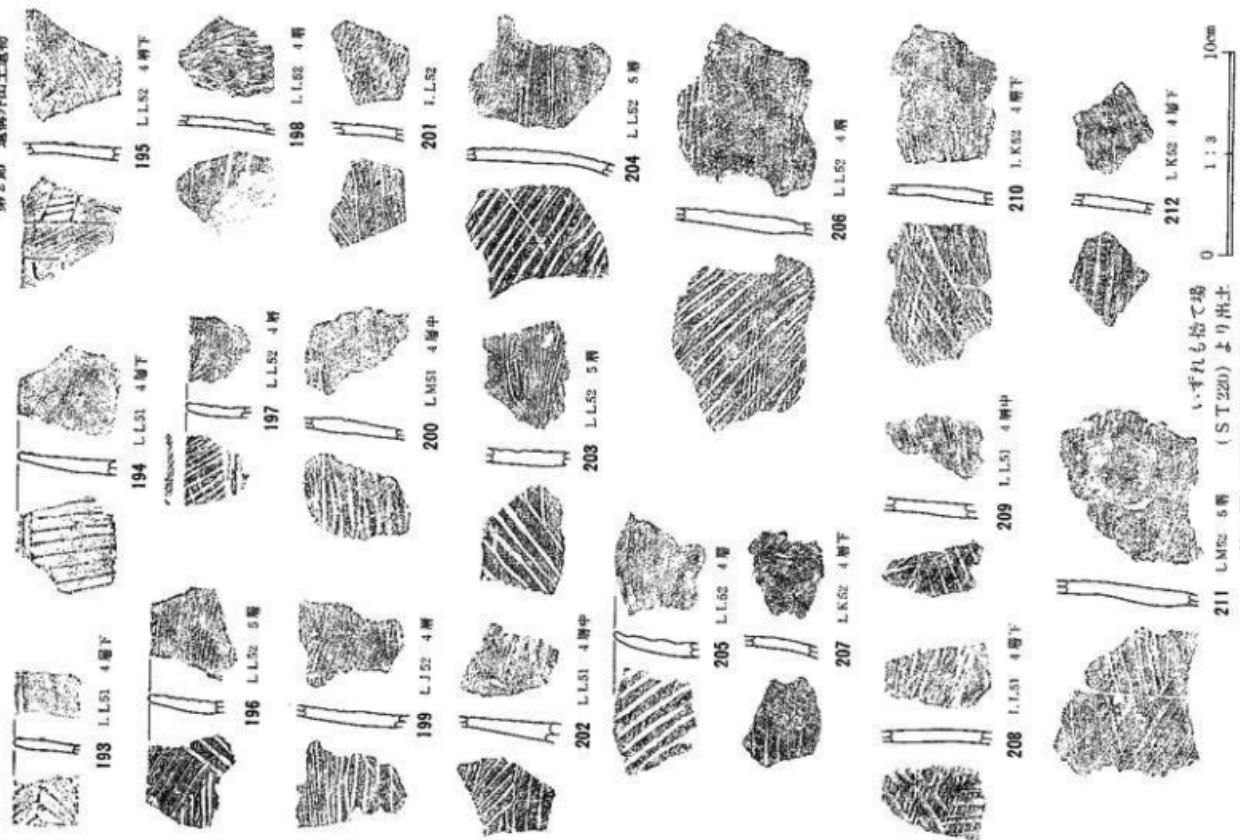
第2類(第25図155・156・162、379・381)

口縁部文様帶に、主に半截竹管による爪形文と縄文原体の側面圧痕による爪形文を施文する土器である。155・156・162はSK I 208堅穴状遺構から出土した土器である。155は両方の爪形文を隆帯間に施文し、156・162・379は後者の爪形文を施文している土器である。

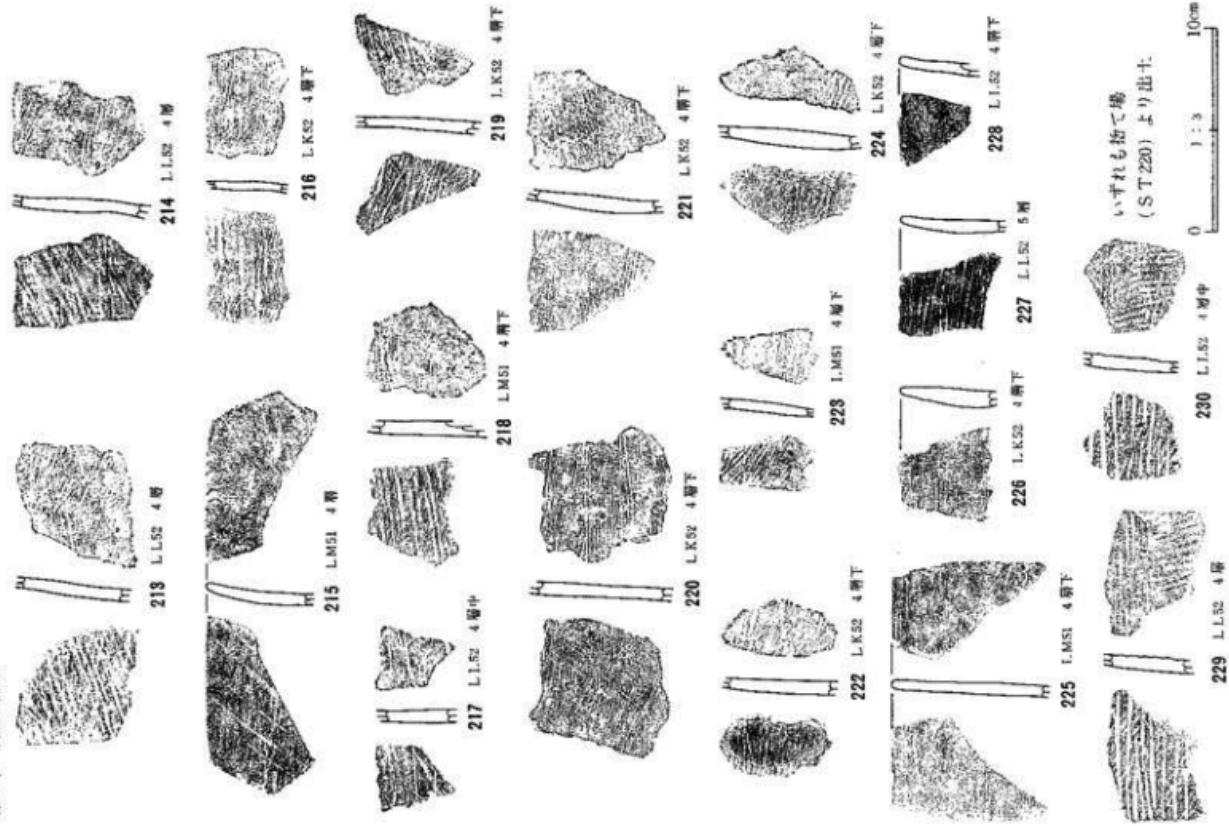
第3類(388～395)

上記の分類に入らない土器を一括した。

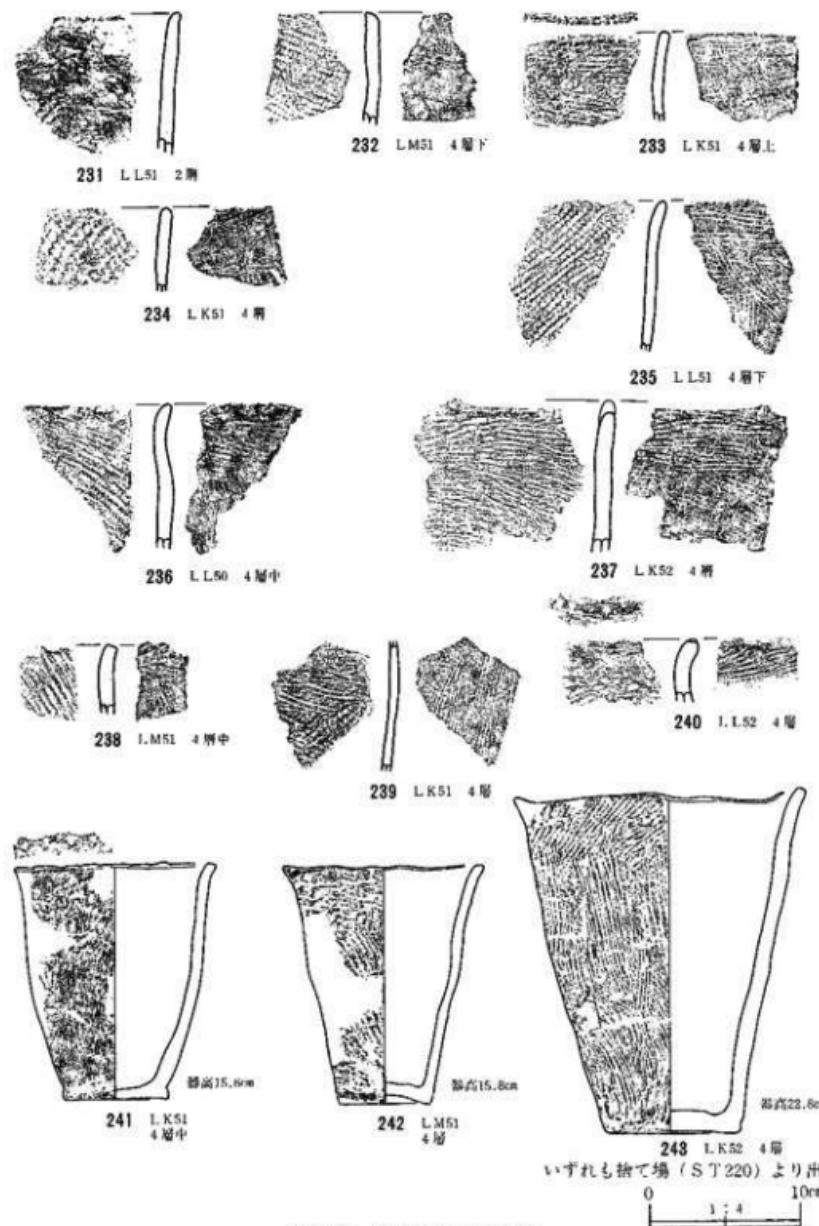
- a. 折返し口縁の土器で橋状把手が付され、口縁部文様帶を沈線文と刺突文で構成するものである。(389～391)。389～391は、同一個体である。焼成良好で、胎土に砂粒を混入する。
- b. 折返し口縁下の平行な沈線間に、斜行する短沈線を施文するものである(392・393)。392・393は同一個体である。焼成良好で、胎土に砂粒を混入する。
- c. 地文の斜行縄文上に沈線を施文するものである(394)。赤褐色で、焼成は普通で、胎土にわずかの砂粒が混入する。
- d. 全体に斜行縄文を施文した、口縁部がわずかに肥厚する土器である(395)。ほぼ直立する器形を呈する。
- e. 内外とも無文の深鉢形土器で、胎土にはわずかに纖維を混入する(388)。



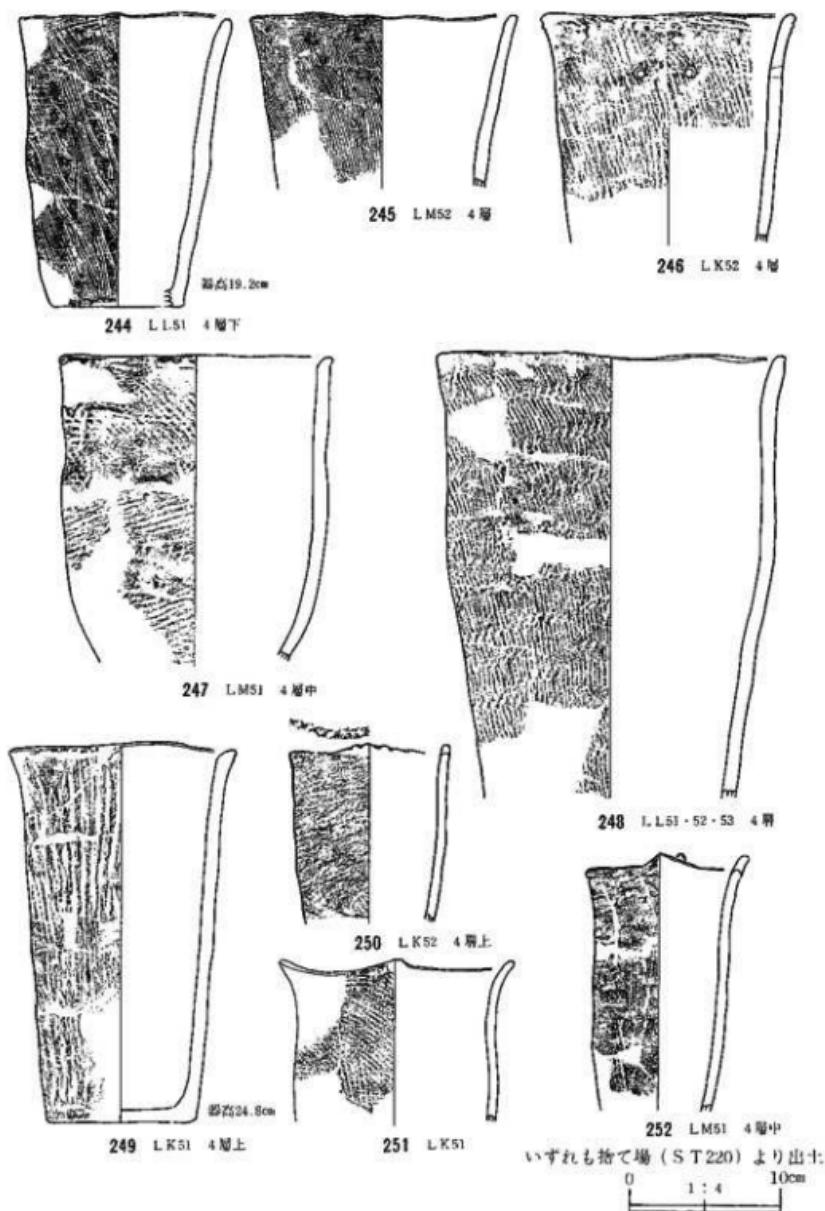
第47図 遺構外出土器物(1)



第48図 遷櫛外出土器(2)

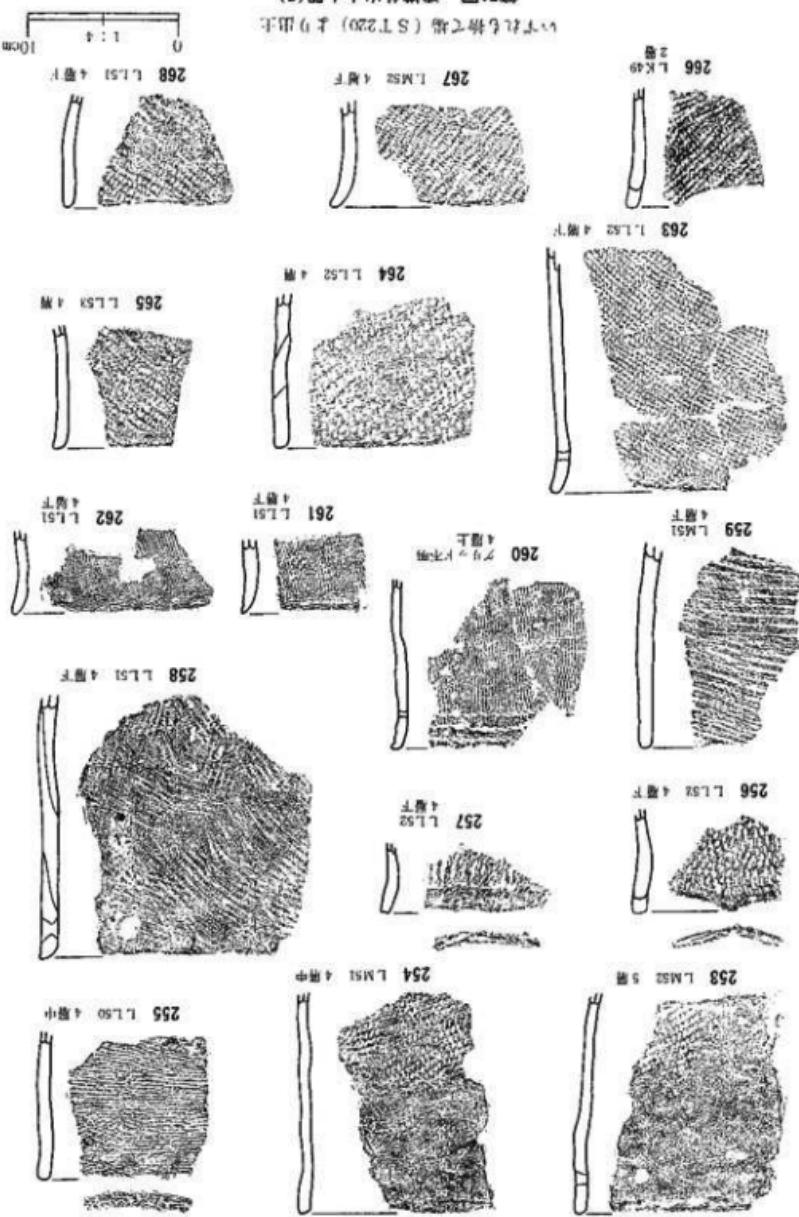


第49図 遺構外出土土器(3)

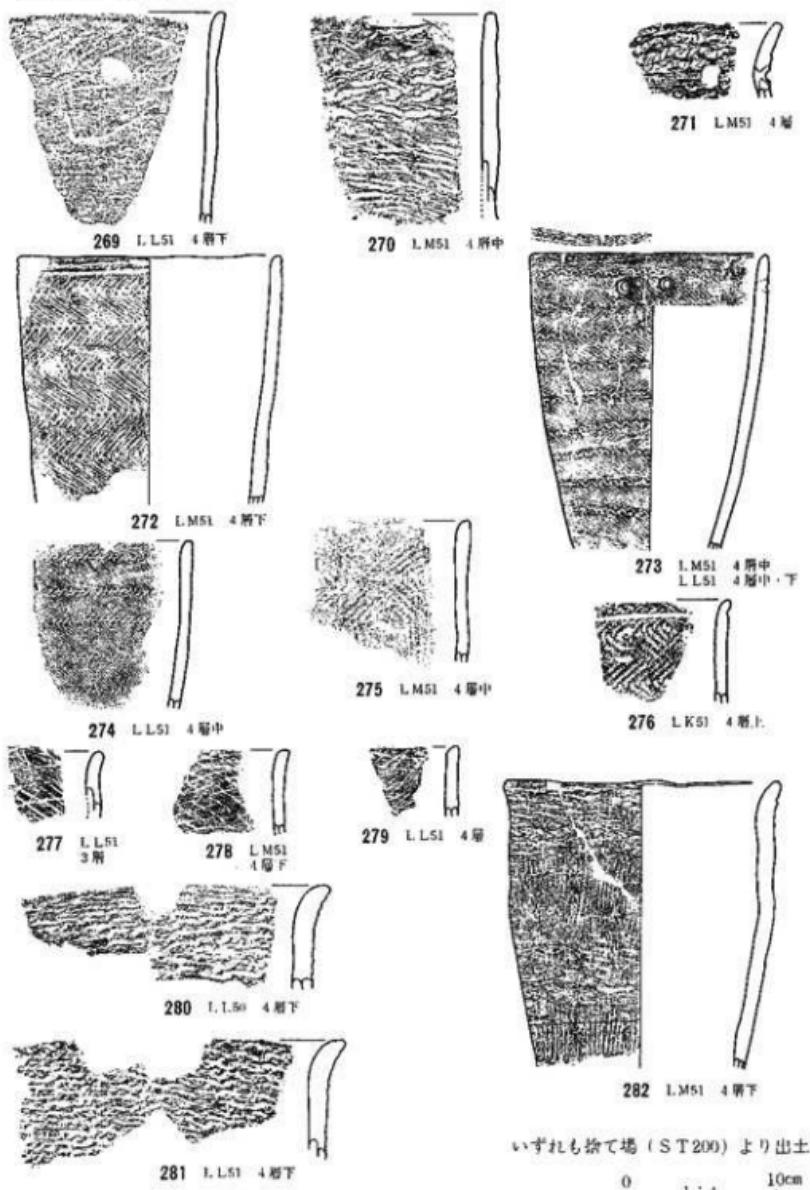


第50図 遺構外出土土器(4)

第51圖 遷都外出土器(5)
S.T.220) 29出土
石刀石斧

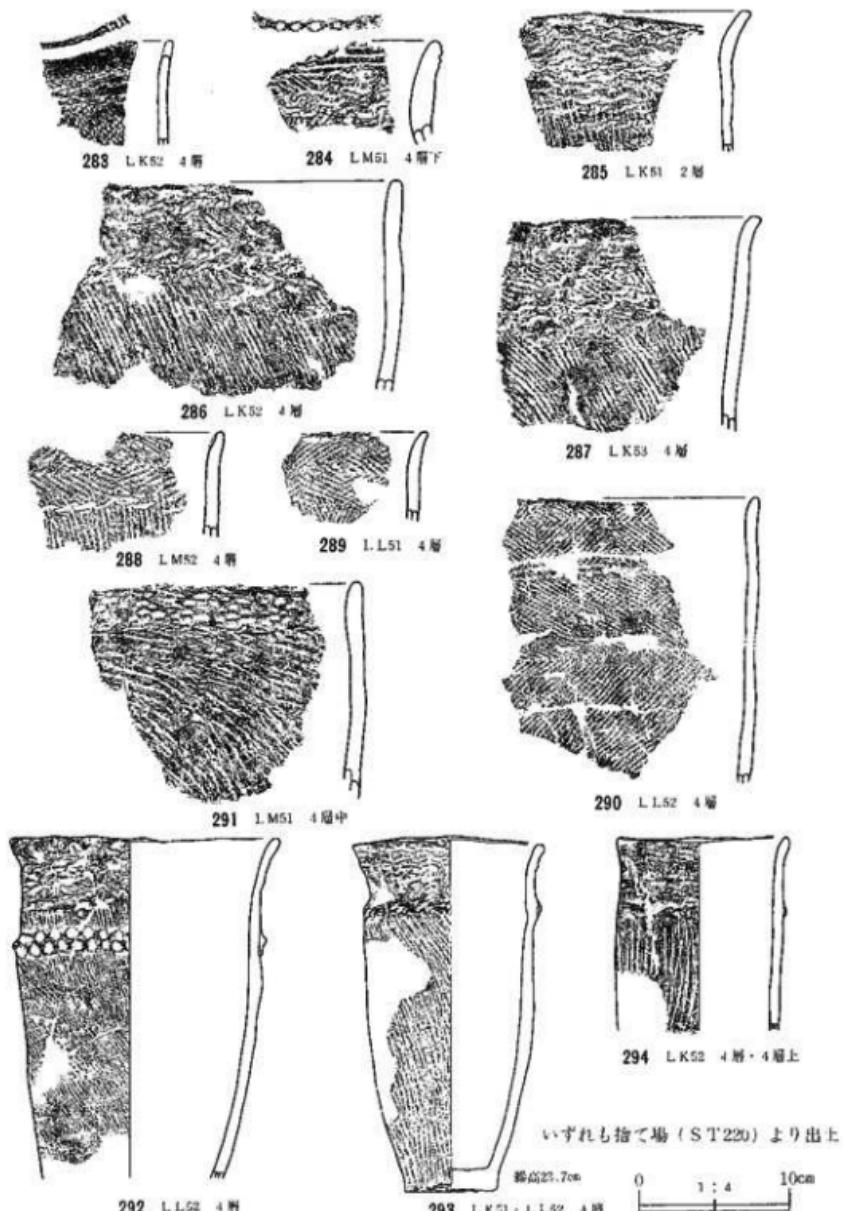


第2章 遷都外出土器物

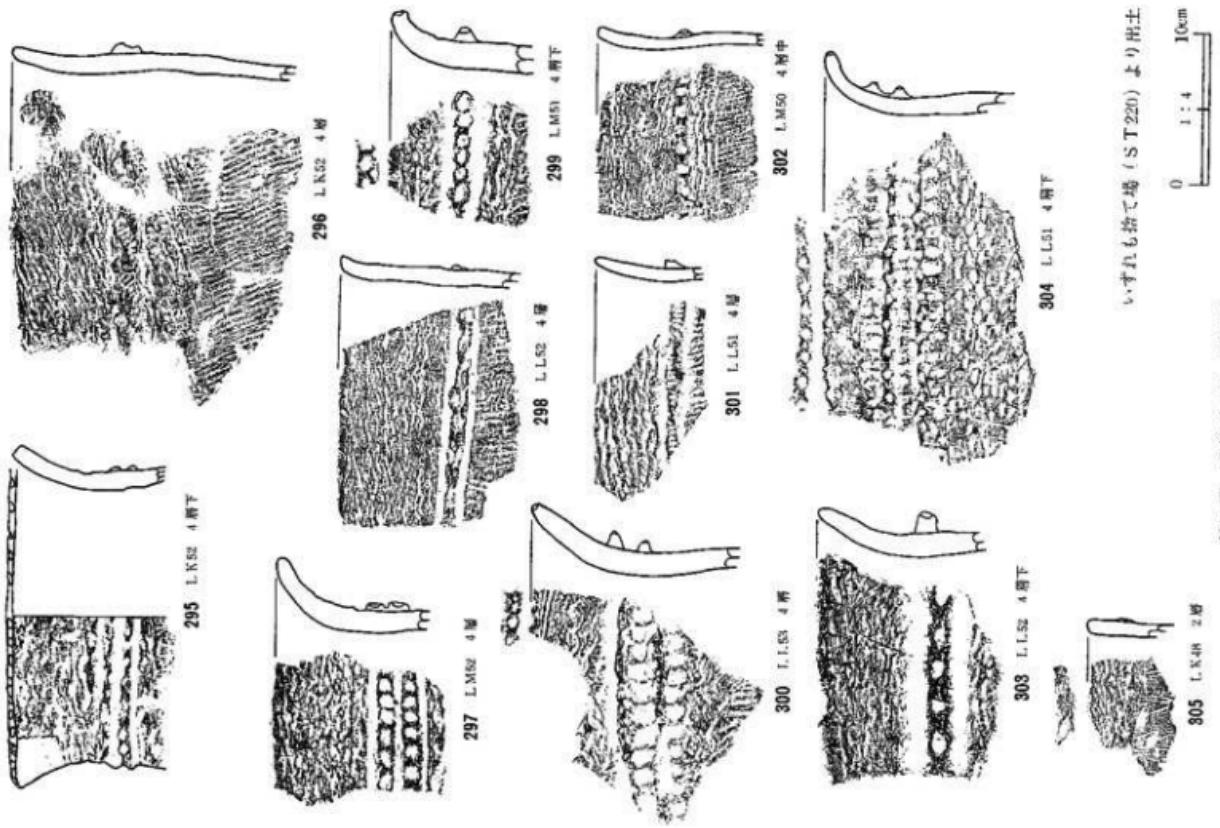


0 1:4 10cm

第52図 遺構外出土土器(6)



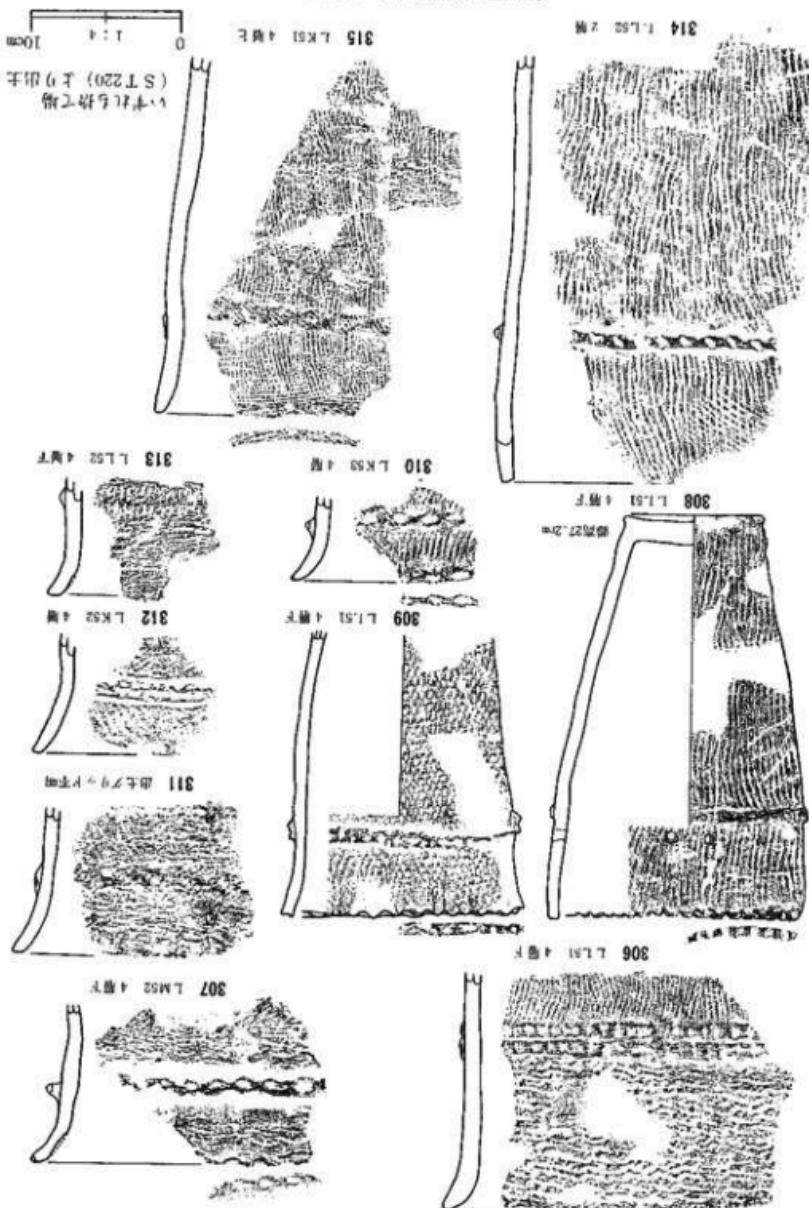
第53図 遺構外出土土器(7)



い、ずれも捨て場 (ST26) より出土

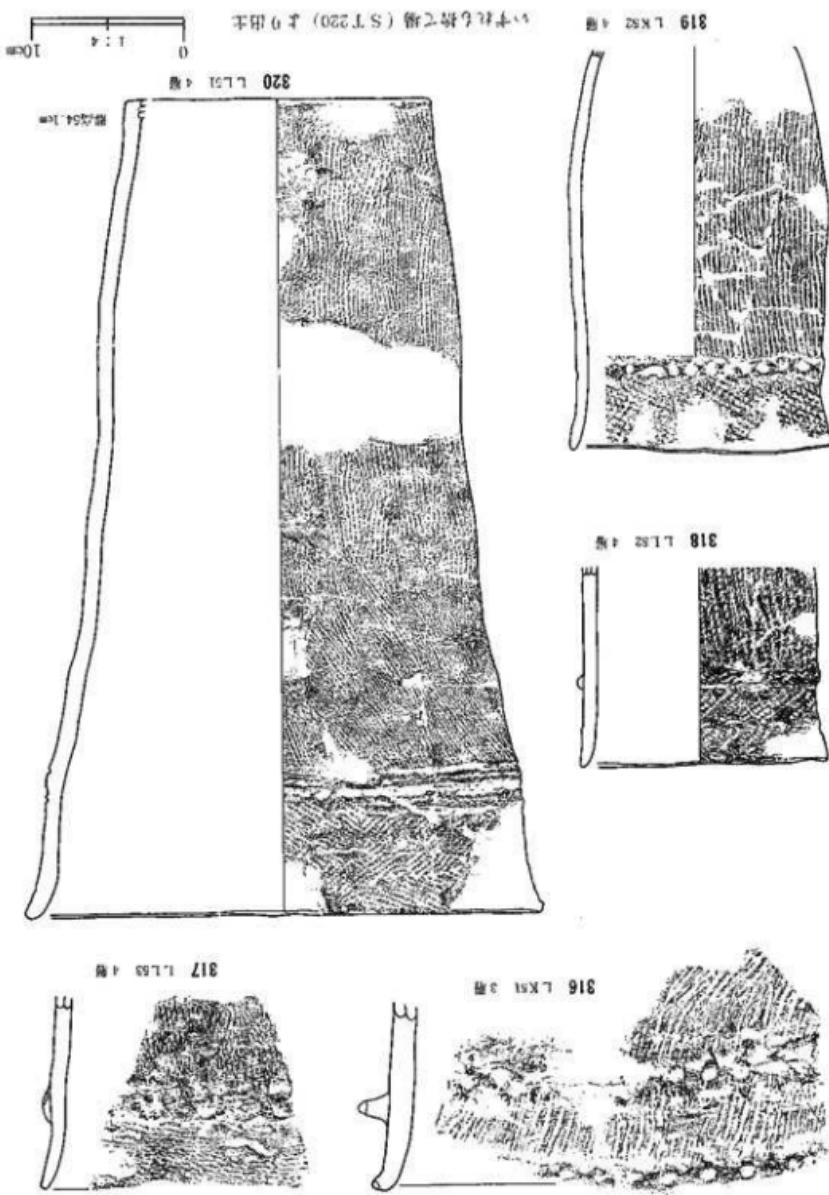
第54図 通縫外出土土器(8)

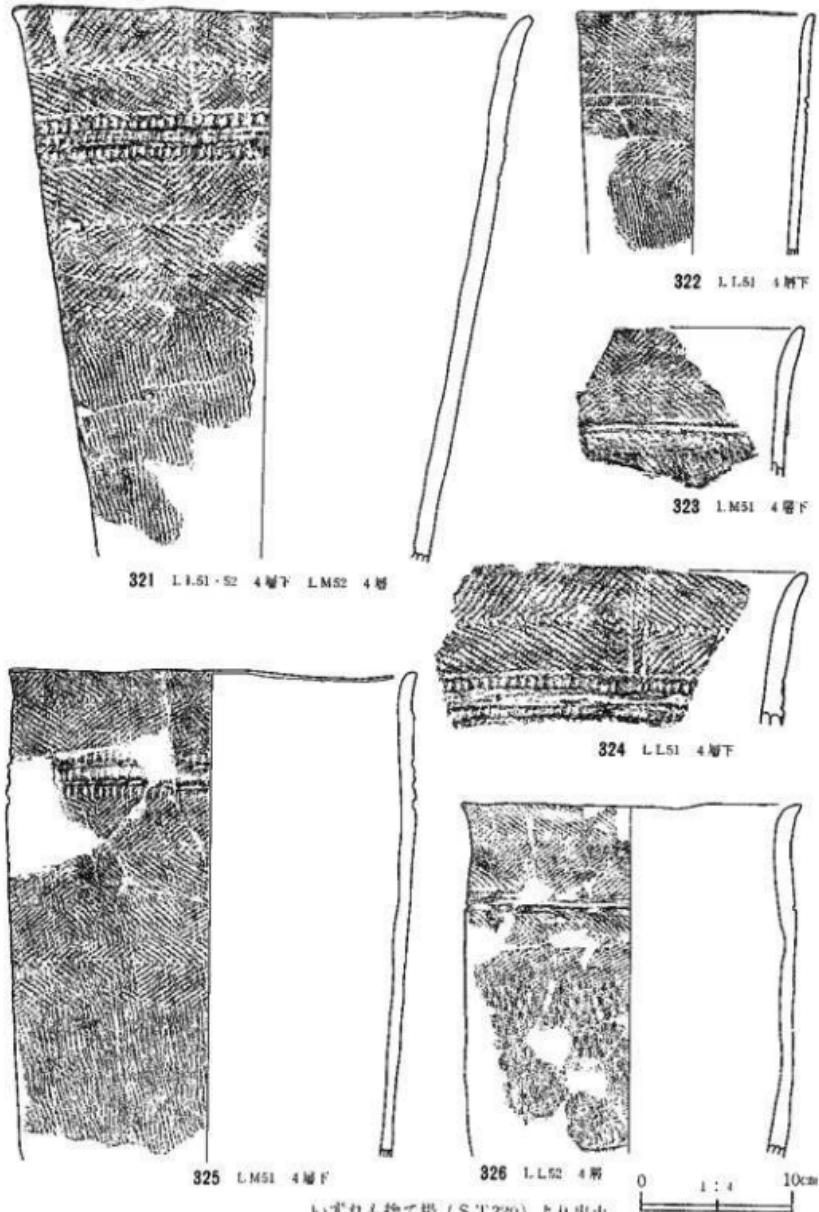
第55圖 遺物外出土土器(9)



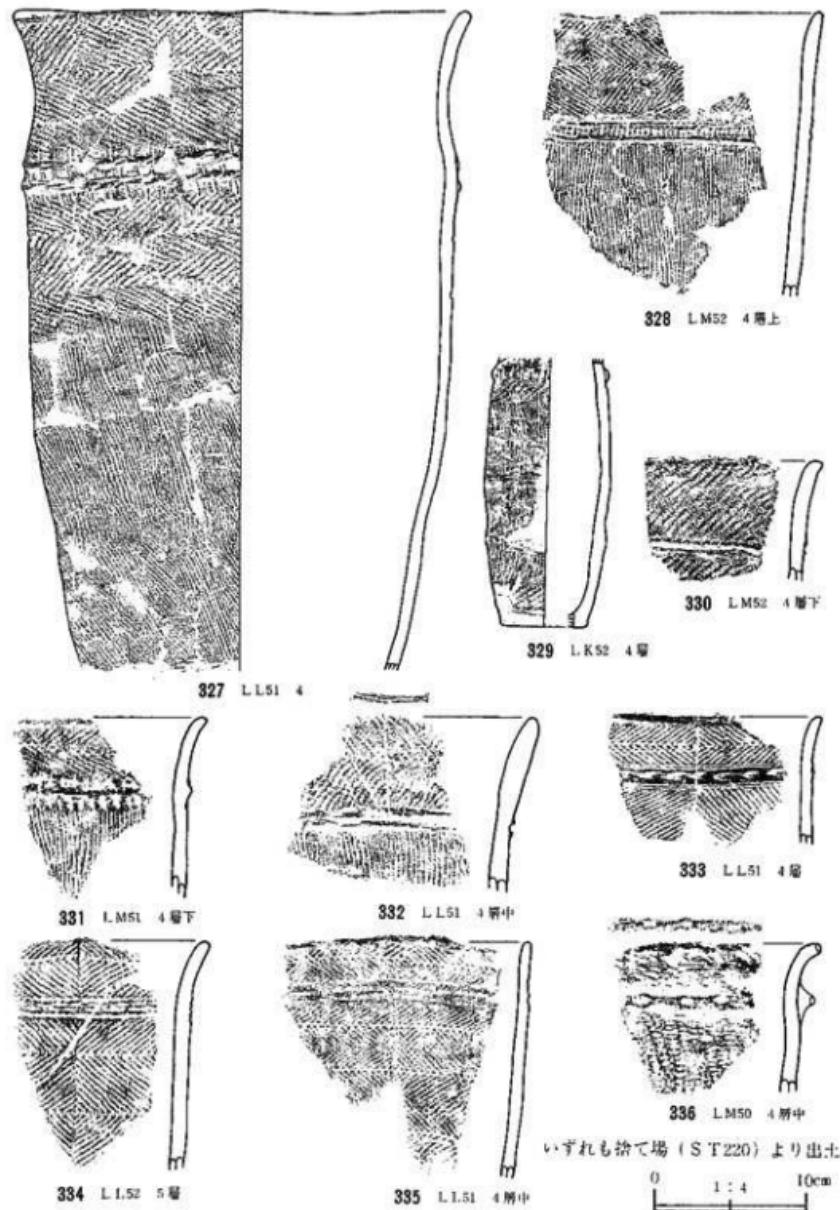
第2圖 遺物外出土遺物

第56図 遺構外出土土器(10)

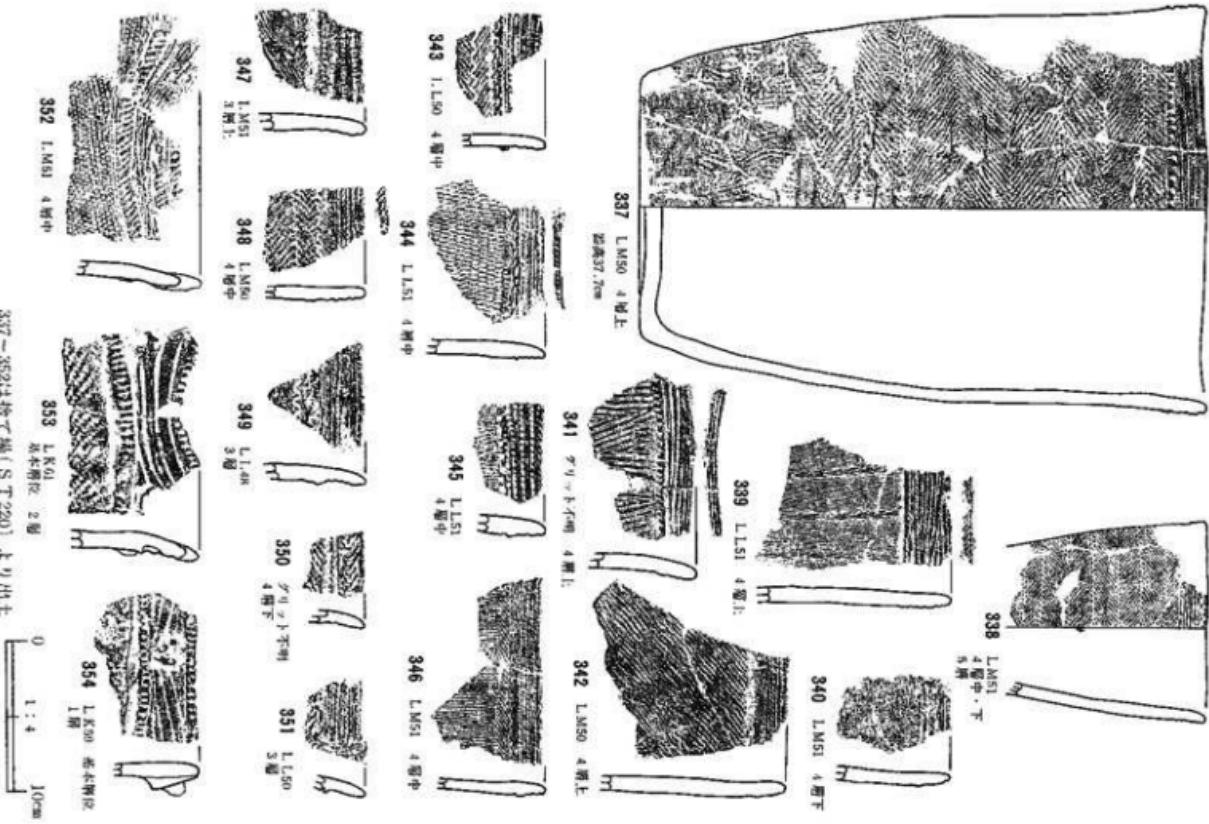




いすれも捨て場 (S T 220) より出土
第57図 造構外出土土器(11)

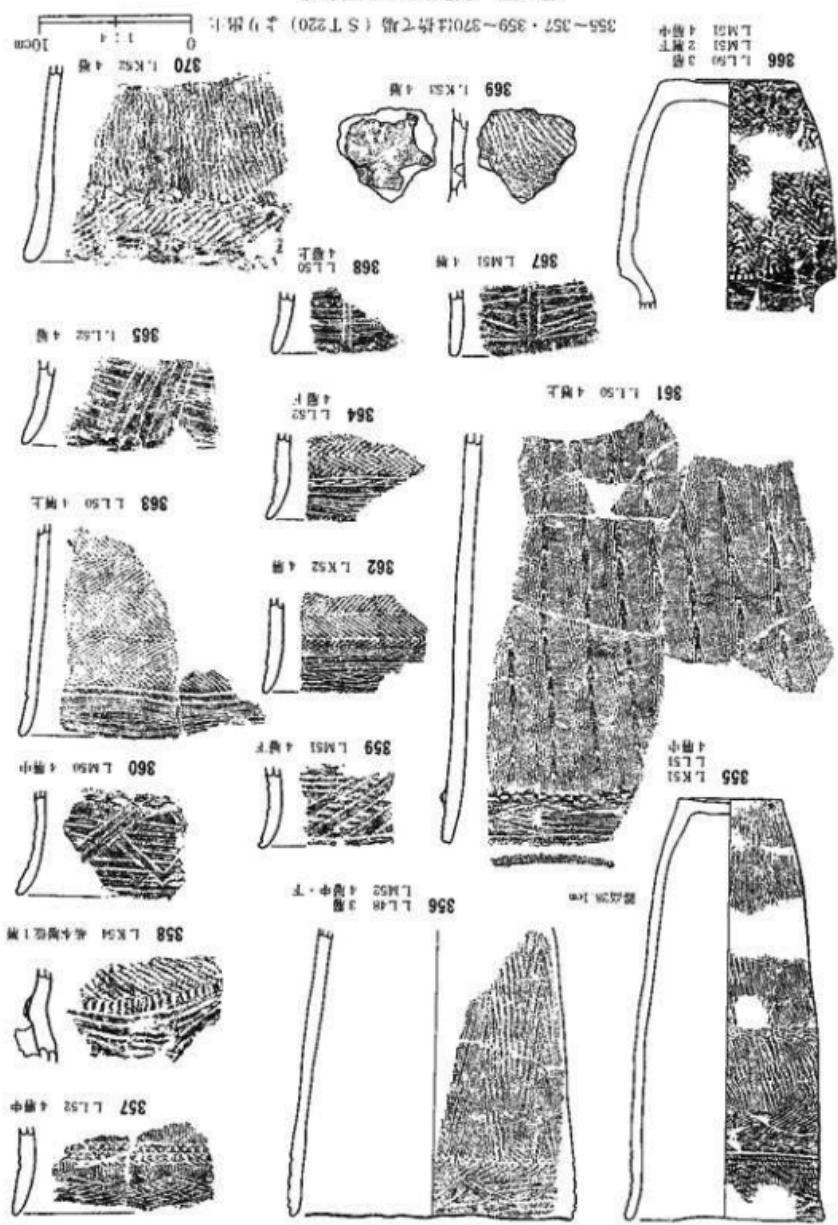


第58図 遺構外出土土器(12)

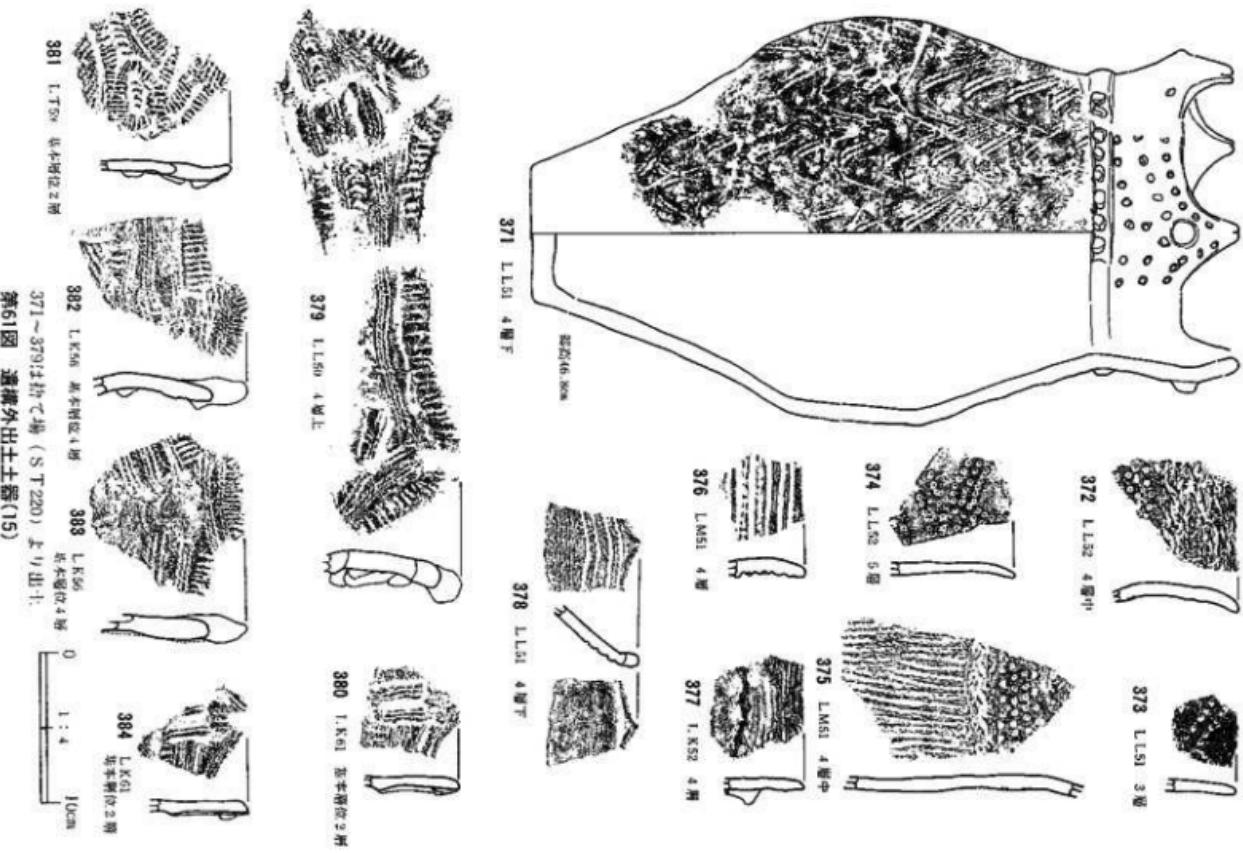


第59図 通報外出土土器(13)

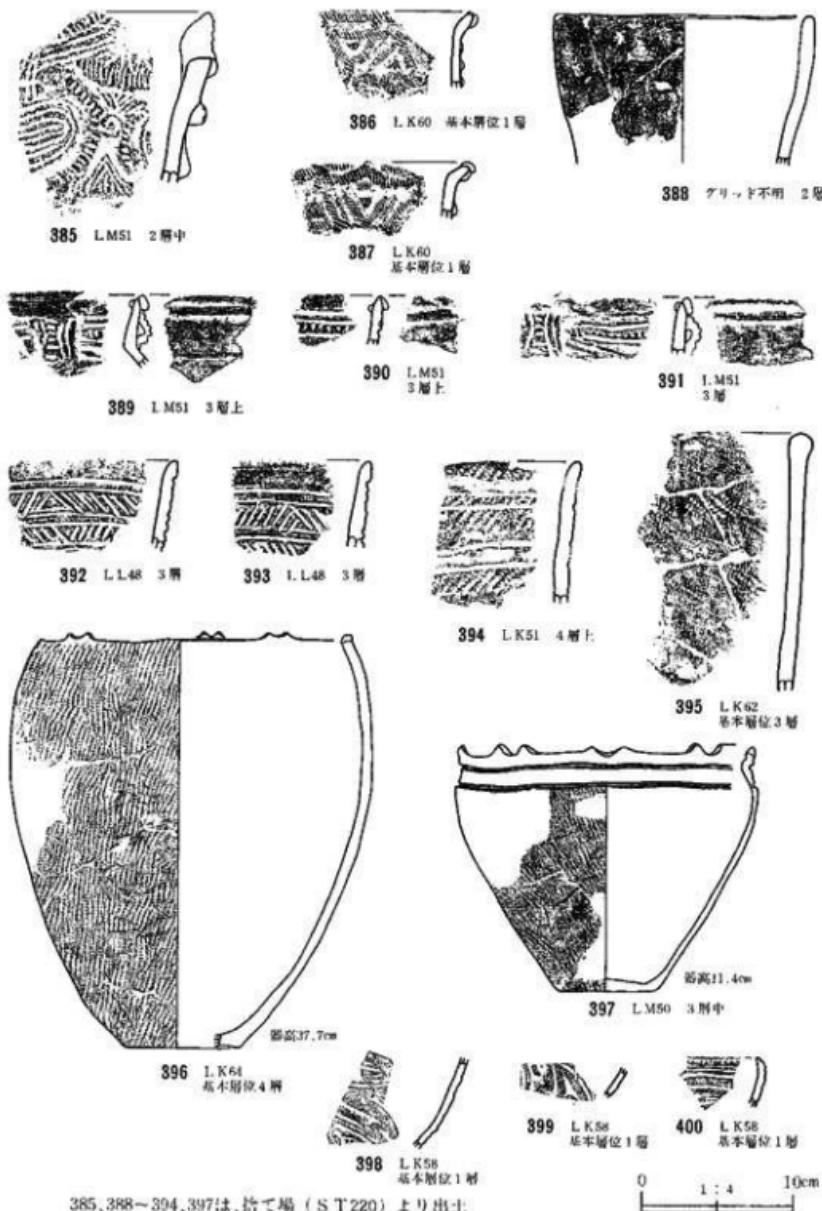
第60圖 銅鑄外出土土壤(14)



第2節 遺構外出土遺物

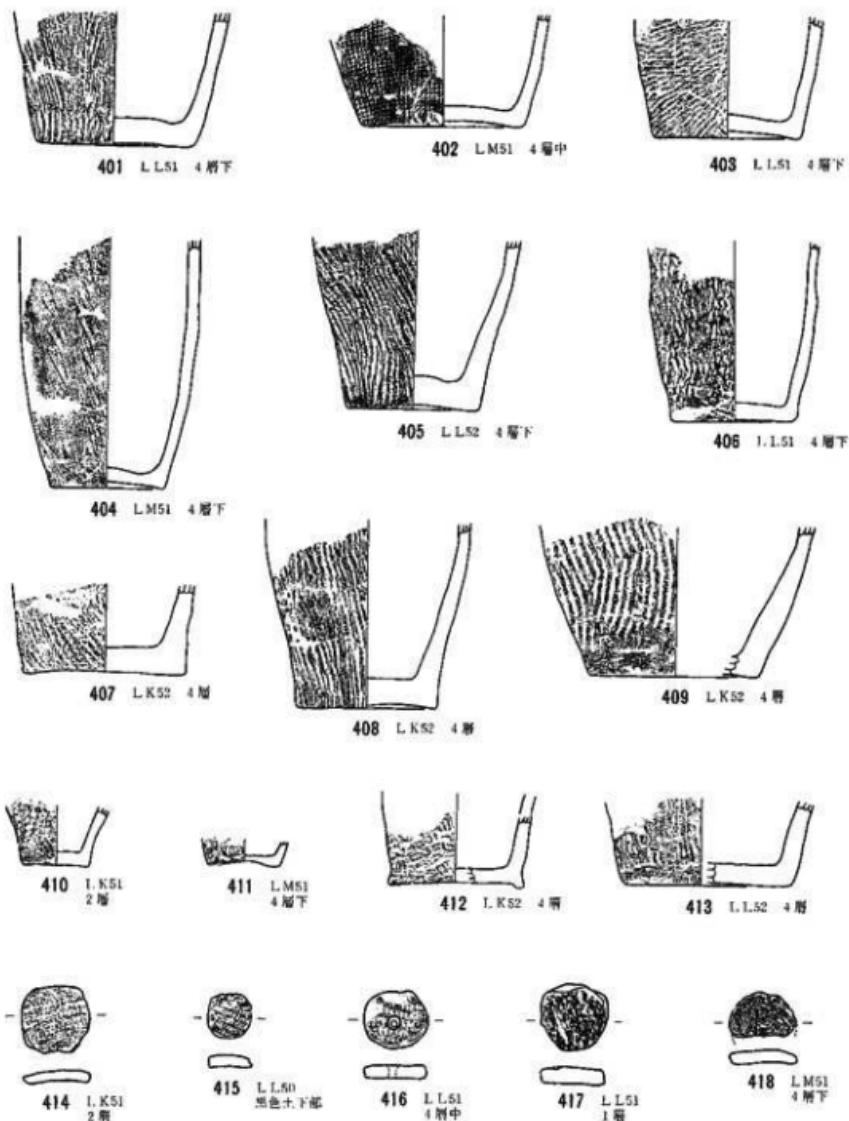


第61図 遺構外出土土器(15)



385, 388~394, 397は、捨て場 (ST220) より出土。

第62図 遺構外出土土器(16)



いずれも捨て場（S T220）より出土



第63図 遺構外出土土器(17)・石製品

第V群土器(396～400) 晩期の土器を本群とした。

398と399は同一個体で、浅鉢かと思われる。磨消繩文手法による雲形文等を施文している。400は浅鉢の口縁部破片で、口縁上端に小さな刻目が施されている。396は口縁部に3箇の「B」突起を有する深鉢形土器である。397は口縁部に6箇の「B」突起を有し、口縁部直下に2条の平行沈線文を施文する鉢形土器である。

第VI群土器(第44図174～180、第45図181～192) 弐生土器を本群とした。いずれもSK212土坑内とその確認面の上から出土したものである。

第1類(174)

壺形上器で、胴部と頸部の境に1条の沈線を巡らし、その下に刺突文を施文する土器である。前期の遠賀川系の土器である。

第2類(175・176・178～181)

変形工字文、平行沈線文、刺突列を施文する土器である。中期中葉の宇鉄II式に比定される。

第3類(177・185・186・190～192)

連続弧状文、連続山形文、平行沈線文を施文し、刷毛目痕を留める土器である。中期後葉の田舎館式に比定される。

第VII群土器(401～413) 底部及び底部下半の土器を一括した。撚糸文を縦位に施文するものが多く、底怪が大きいものと小さいものがある。408・412は後者で、上げ底となるが底面に文様はない。前期前半の土器と思われる。409は平底で、底外面から外に張り出す器形をもつ土器と思われ、外面には撚糸文を胴部下端近くまで施文し、胎土に多量の纖維を混入し、焼成は良好で赤褐色を呈する。器厚は胴部で12mm、底下端部で20mmと厚い。他に同一個体と思われる破片が1点出土しているが、全体からすればその数は極めて少ない。

2. 土製品(第63図414～418)

円整状土製品 撥糸文や繩文を施文した前期の土器片を円形に加工したもので、5点出土した。

3. 石器

上部平坦面の遺構外と、斜面の捨て場から出土した石器・剣片・礫の総数は3,149点である。上部平坦面の遺構外からは、石器41点・剣片50点・礫49点の出土である。

石器41点の器種は、①剣片石器として、石錐1点、石匙2点、笠状石器3点、搔器3点、削

器5点、②礫石器類として、半円状扁平打製石器6点、石錐9点、凹石9点、擦石3点である。斜面の捨て場からは、石器243点・剝片2,085点(黒曜石2点)・礫681点の出土である。

石器243点の器種は、①剝片石器として、石鎌4点、石槍15点、石錐5点、石匙37点、範状石器23点、搔器15点、削器24点、異形石器9点、打製石斧1点、磨製石斧5点、②礫石器類として、半円状扁平打製石器25点、石錐36点、凹石21点、擦石9点、石棒状石器1点、石皿4点、台石9点である。

剝片石器(第64・68~74図)

剝片石器については、定形的なものを主に図示した。石質は大多数が頁岩で、軟灰岩・石英・安山岩を素材としているものもある。

石鎌(第68図)4点出土。形態は、I類：凹基無基式1点(162)・II類：平基無基式2点(163・164)・III類：平基両側辺基部抉入(所謂アメリカ)式1点(165)である。

石槍(第68図)15点出土。縦長剝片の一方の先端に尖頭部を作出しているが、形態からI類：凸レンズ状の断面形を呈し、実測図左側の両側縁に二次調整を施す(166外1点)・II類：基部を欠損するが表裏ともに丁寧な押圧剝離が加えられ、薄い凸レンズ状の断面を呈する(167・168)・III類：幅広で尖頭部・基部ともに尖り、厚い凸レンズ状の断面を呈する(169・170外7点)・IV類：基部が丸みを持ち、厚い凸レンズ状の断面を呈する(171・172)の4分類できる。

石錐(第69図)6点出土。断面が、菱形・三角形・凸レンズ状を呈する錐部をもっているが、形態からI類：一端が細くなる剝片を利用しておらず、二次調整を両側縁の表裏面とも(173)、表面のみ施したもの(174)・II類：あまり形の整っていない多角形の剝片の2~3辺に二次調整を加えて錐部を作出したもの(136・175・176)・III類：棒状のもの(177)の3分類できる。

範状石器(第69~70図)26点出土。平面形が撥形あるいは短冊形・長椭円形・長方形・茄子形などを呈し一端に刃部が作出された石器で、平面形と刃部平面形状の直刃・丸刃・側面形状の両刃・片刃によりII類：平面形が撥形を呈し直刃・片刃(178外5点)・II類：平面形が撥形を呈し丸刃・片刃(137・138・179・180外4点)・III類：平面形が短冊形・長椭円形を呈し直刃・両刃(181・182)・IV類：平面形が短冊形・長椭円形を呈し丸刃・両刃(183)の4分類できる(9点は破損品のため分類不能)。

石匙(第70~71図)39点出土。両側縁から抉りを入れてつまみ部を作出し、片面からの加撃によって刃部が作られた石器で、刃部とつまみの中軸線の交わる角度によってI類：縦型・II類：横型・III類：斜型に3分類できる。I類：縦型(24点)は、つまみ部の中軸線にはほぼ平行する刃部をもつものであるが、I-A類：ほぼ平行する直線的な2つの側縁をもつもの(184外7点)・I-B類：直線的な2側縁をもつが先端で尖るもの(185外6点)・I-C類：側縁が曲線を描くもの(139・186・187外5点)に細分できる。II類：横型(8点)は最も長い側刃(刃部)とつま

み部の中軸線とがほぼ直交するものであるが、II-A類：刃部が直線的なもの(188外2点)・II-B類：曲線的なもの(189外2点)に細分できる。III類：斜型(5点)は、2～3つの側辺の中で最も長い側辺とつまみ部の中軸線が約45°で交わるもので、III-A類：刃部が直線的なもの(190外2点)・III-B類：曲線的なもの(140外1点)に細分できる(2点は破損品のため分類不能)。

搔器(第64・71・72図)18点出土。分厚い剥片の一端に片面調整による急角度の刃部を作出したものであるが、I類：裏面(大部分が主要剝離面)が反っているもの(141・191～194外6点)・II類：裏面(大部分が主要剝離面)が反っていないもの(142・195・196外5点)の2分類できる。

削器(第64・72図)29点出土。大小の剥片の側縁に連続的な二次調整によって刃部を作出した石器で、二次調整は片面からだけのものが圧倒的に多いが、刃部の形状等から、I類：細長くて分厚い剥片の両側縁に急角度の刃部を作出したもの(143・197～200外9点)・II類：不整な椭円形・円形を呈する剥片の側縁に弧状の刃部を作出したもの(144・145・201外11点)の2分類できる。

異形石器(第73・74図)9点出土。所謂三脚石製品に類似する形状を呈する(202～204外6点)。

打製石斧・磨製石斧(第74図)6点出土。205は、打製石斧と考えられる石器である。平面形が櫛形を呈する自然礫(安山岩)の下端(幅の広い方)に両面から粗い剝離を加え刃部を作出したものである。

磨製石斧は5点出土しているが完形品は1点のみ(206)である。刃部の形状から3類に分類できる。206は、平面形が円刃・断面形が両凸刃(I類)であるが、刃潰れしており、石器全ての縁辺には加筆痕が認められる。たたき石に転用されたものと考えられる。主・側面とも研磨がいき届いている。207は基部が欠損しているが、円刃・弱凸強凸片刃(II類)の緑色凝灰岩製のミニチュア製品である。他の3点のうち1点は安山岩製で偏刃・両凸刃(III類)、1点は凝灰岩製で基部のみ、1点は刃部を大きく破損しているため明確でないが凝灰岩製で円刃・両凸刃である。

礫石器類(第65～67・76・77図)

半円状扁平打製石器(第65～75図)31点出土。半円状あるいは細長く、扁平もしくは断面逆三角形の礫を素材とし、下辺部に機能面を有している石器である。

素材の加工部位・機能により、I類：素材の全縁辺を打ち欠いたものそのままのもの(146・208～211外3点)・II類：素材の全縁辺を打ち欠き、1縁辺(刃部)の両側縁を擦ったもの(所謂石鋸)(213～214外2点)・III類：素材の鋭利な下縁辺を残して刃部とし、他の3縁辺を打ち欠いたもの(147外2点)・IV類：素材の1縁辺を打ち欠いて刃部を作出したままのもの(215外6点)・V類：素材の1縁辺を打ち欠いて刃部を作出し、刃部底面を擦ったもの(216・217)・VI

類：素材の1縁辺を打ち欠いて刃部を作出し、側辺に抉りを入れたもの(148・149・218外1点)の6分類できる(2点は破損品のため分類不能)。

石錘(第66・76図)45点出土。平面形が、橢円形あるいは円形を呈するほぼ偏平な礫を素材とし、両面から打ち欠きのち敲打を行って抉りを完成させた礫石錘と呼ばれるもので、素材の形状・抉りの位置からI類：長橢円形の素材の長軸の両端に抉りをもつもの(150～153・219～224外15点)・II類：長橢円形の素材の短軸の両端に抉りをもつもの(225)・III類：円形の素材の両端に抉りをもつもの(226・227外13点)の3分類できる(4点は破損品のため分類不能)。

凹石(第66・67・76・77図)30点出土。礫材の面に敲打による凹みを有するもので、I類：凹面が両面(154～159・228・229外15点)・II類：凹面が片面のみ(230・231外5点)の2分類できる。

擦石(第67・77図)12点出土。ほぼ球状を呈する礫の表面の一部あるいは全部が擦られているものである(160・161・232～235外6点)。

石棒状石器(第77図)1点出土。236は破損しているため全容は知り得ないが、偏平な棒状を呈する自然礫の2側面に敲打を加えたもので、他には手をくわえていない。

石皿・台石(第77図)石皿4点・台石9点出土。石皿は破損品が多く全容を知ることはできないが、237は磨痕をもつ使用面は浅い皿状にくぼんでいる。台石としたものは、図示していないが大きな川原石を素材として「作業台」的道具として使用したものと考えている。

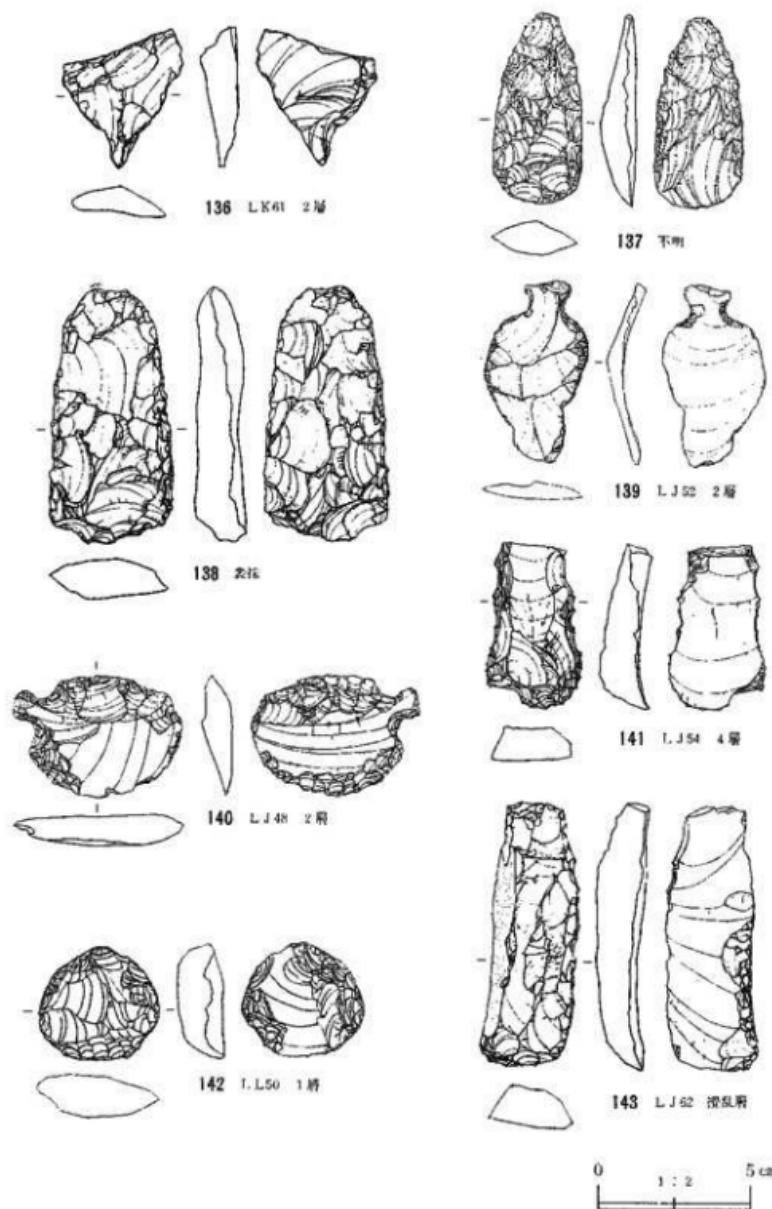
4. 石製品(第78図)

円盤状石製品、長方形石製品、刻線石等合計14点が出土した。

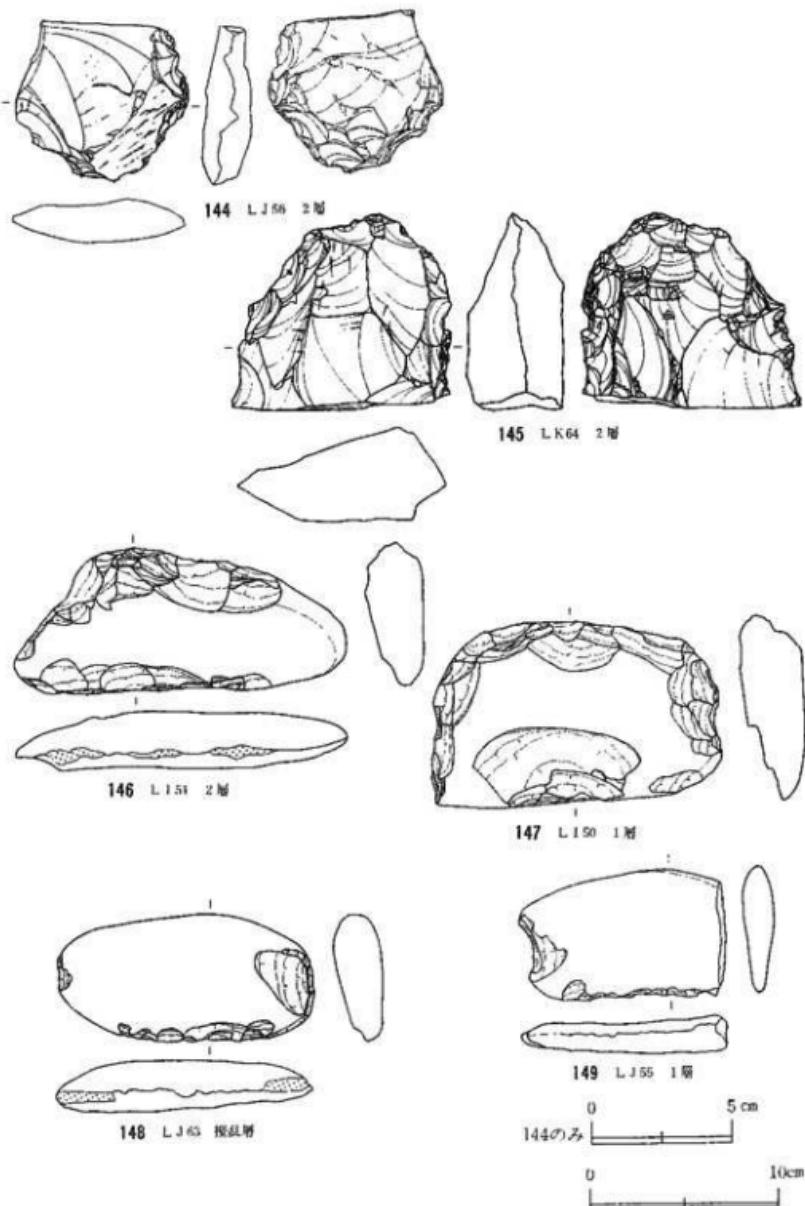
円盤状石製品(第78図)11点出土。偏平で平面形が円形を呈しているが、製作方法と中央の貫通孔の有無からI類：素材の周縁全てを打ち欠いて整形しているもの(238)・II類：素材の周縁を打ち欠いた後、全面研磨しているもの(239～243外1点)・III類：素材の周縁を全面研磨し、中央部に貫通孔を穿ったもの(244～246外1点)の3分類できる。

長方形状石製品(第78図)1点出土。247は偏平で平面形が長方形を呈し、周縁を全面研磨しているものである。

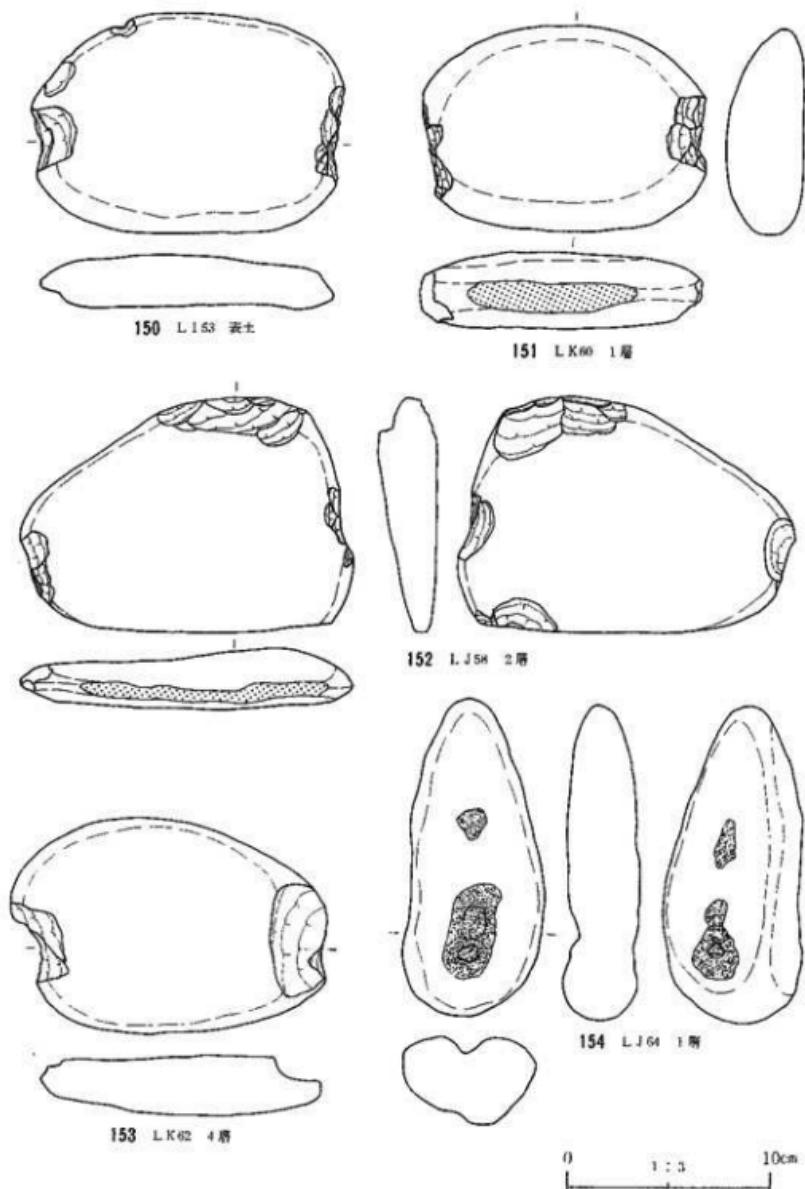
刻線石(第78図)2点出土。軟質な礫を素材としており、248・249とも表・裏面に細く浅い線刻が行われている。249には深く鋭い線刻もみられる。



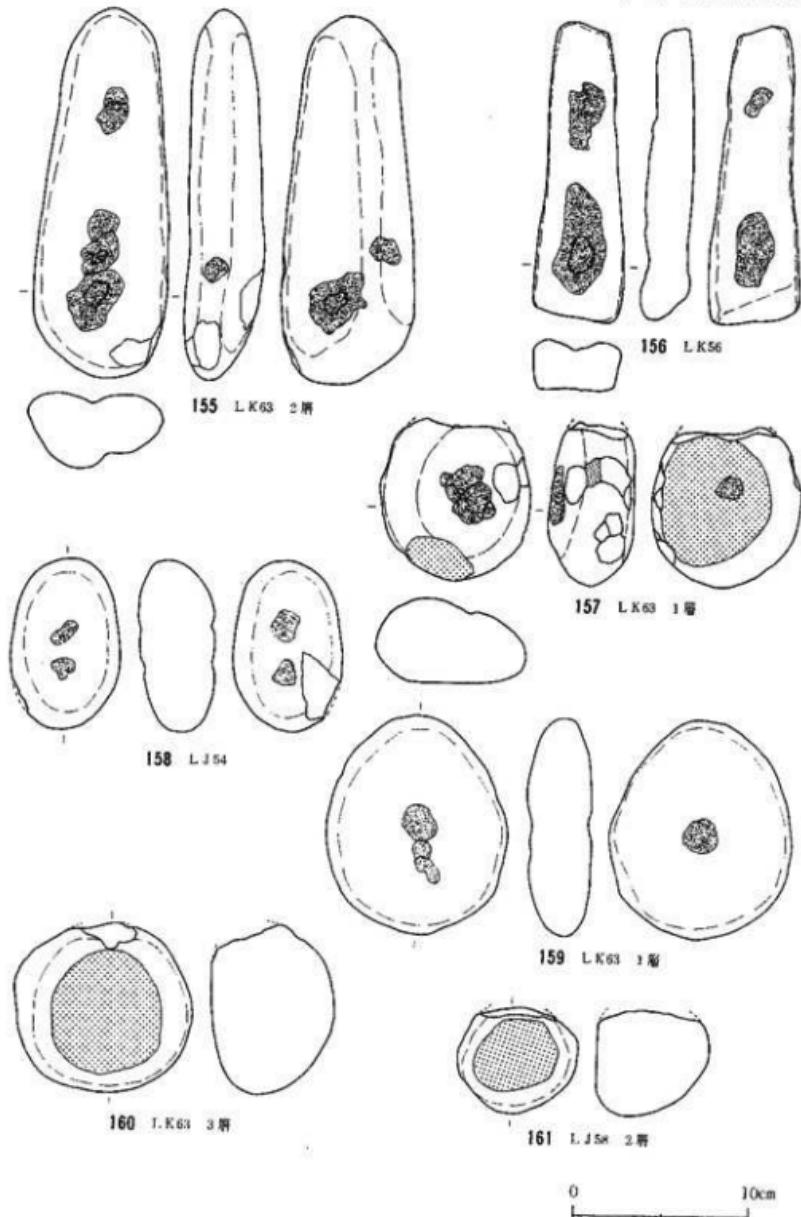
第64図 遺構外(上部平坦面)出土石器(1)



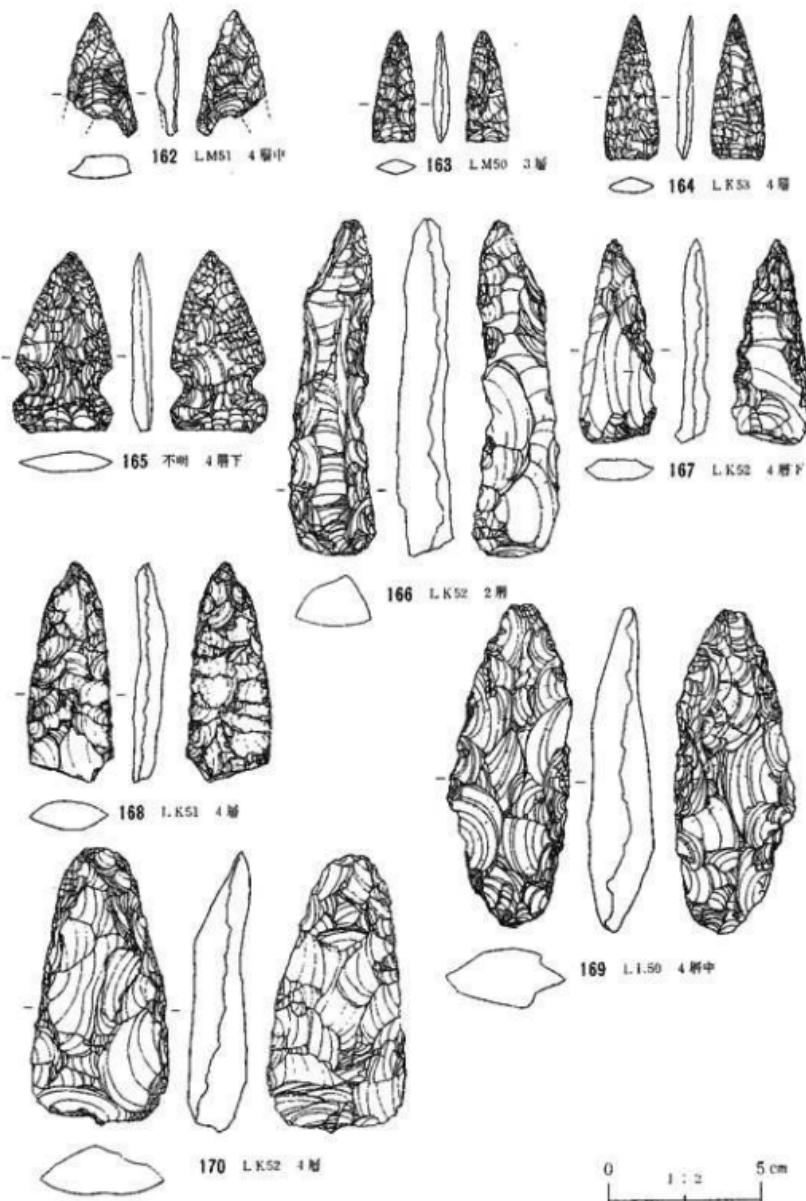
第65図 遺構外(上部平坦面)出土石器(2)



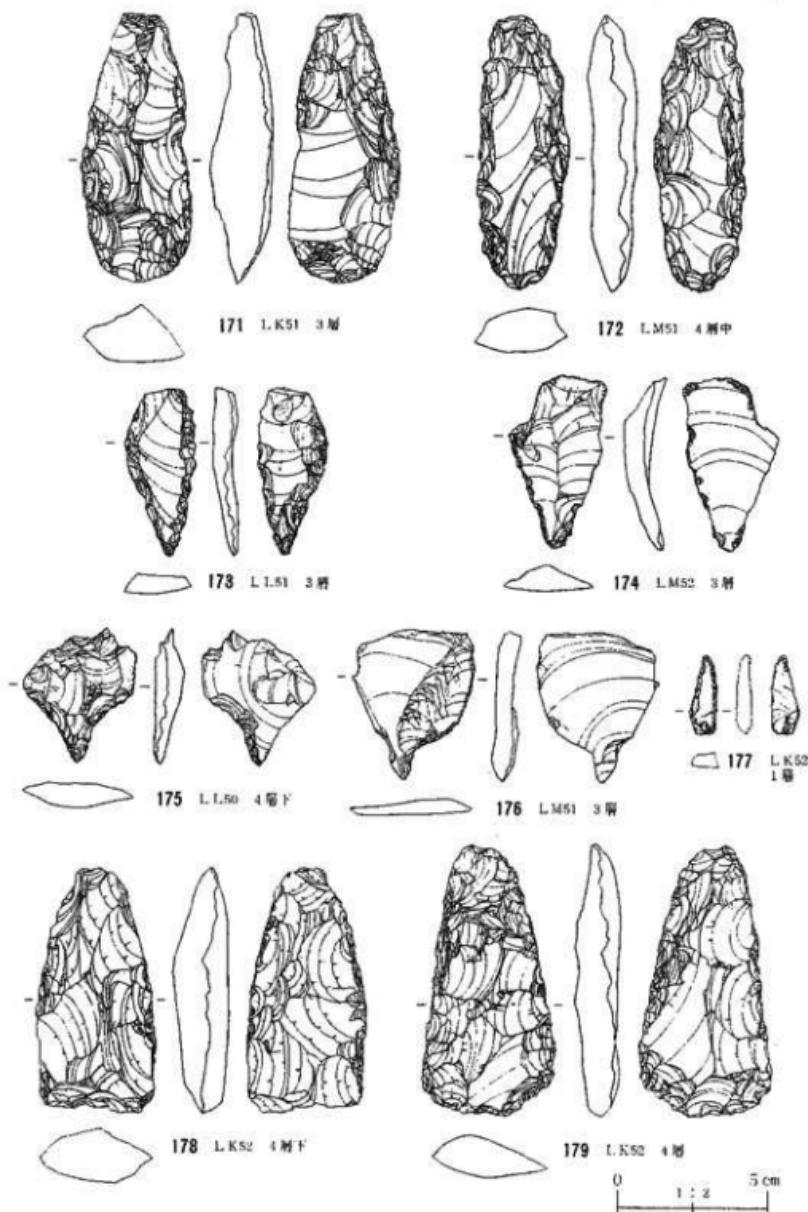
第66図 遺構外(上部平坦面)出土石器(3)



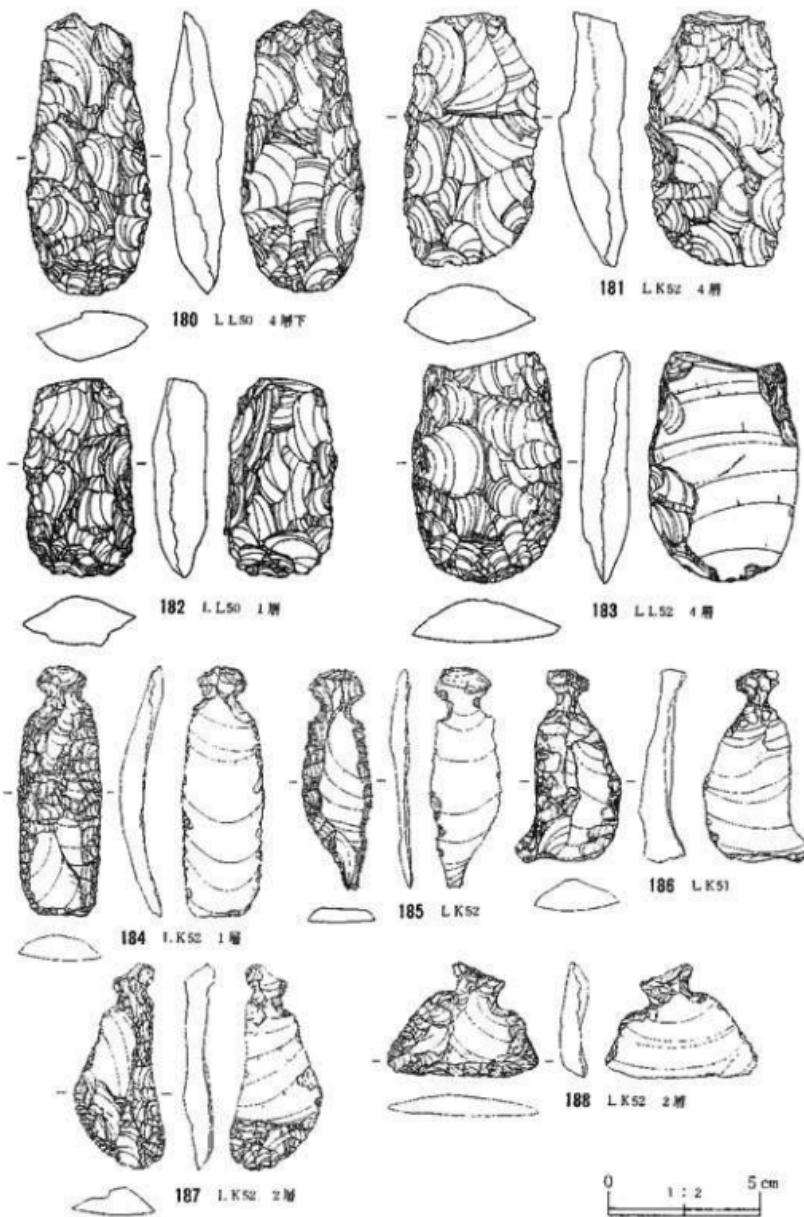
第67図 遺構外(上部平坦面)出土石器(4)



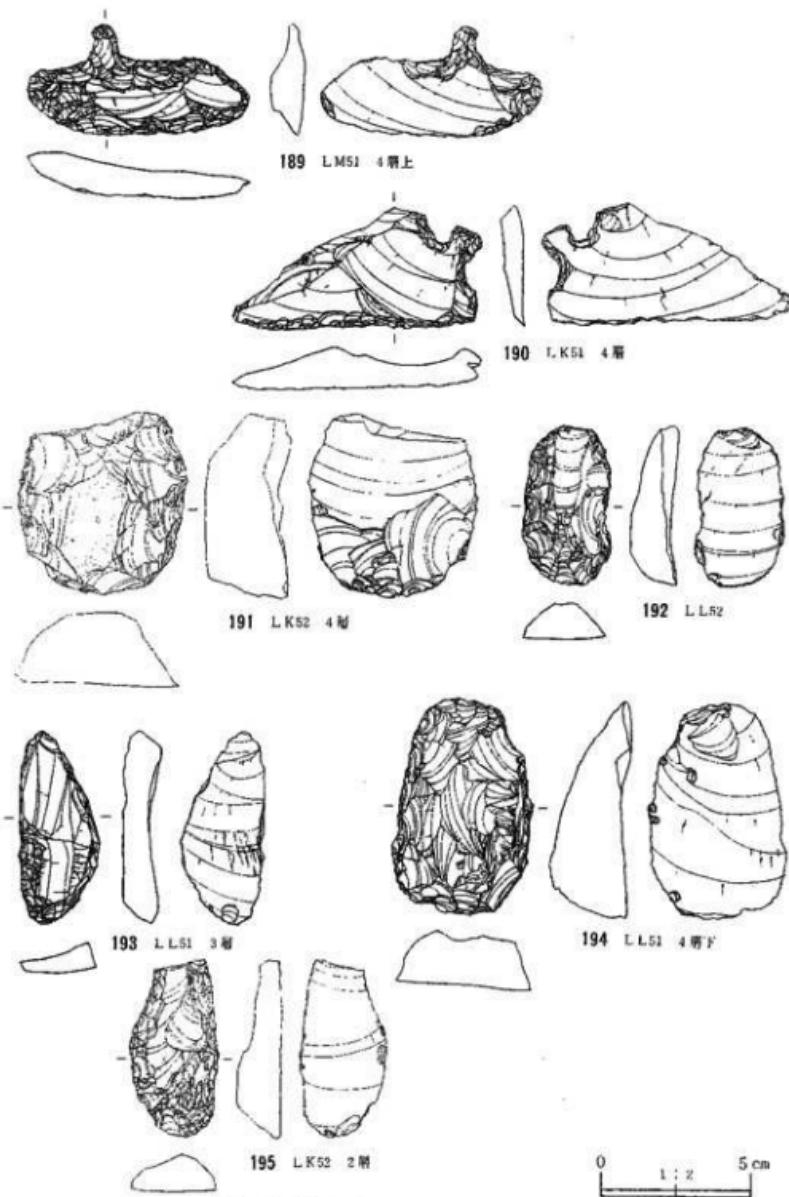
第68図 捨て場(S T 220)出土石器(1)



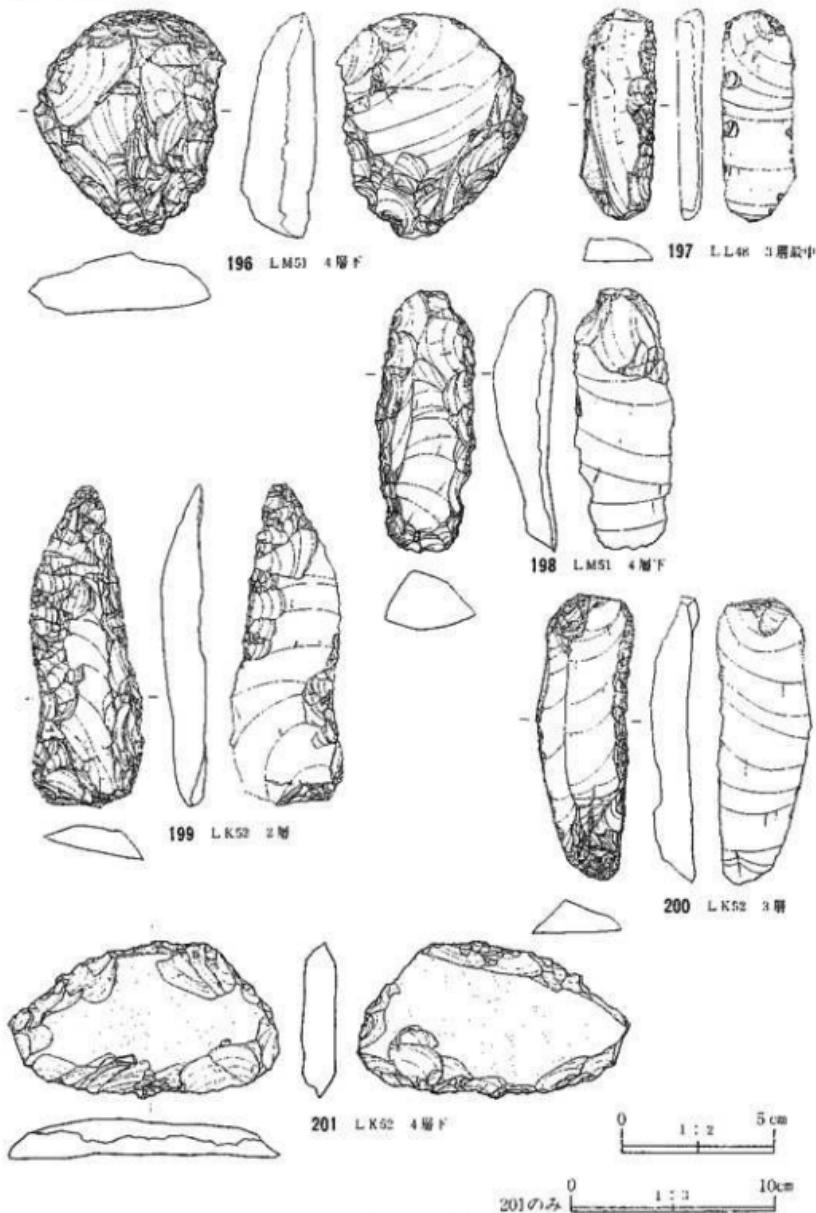
第69図 捨て場(ST 220)出土石器(2)



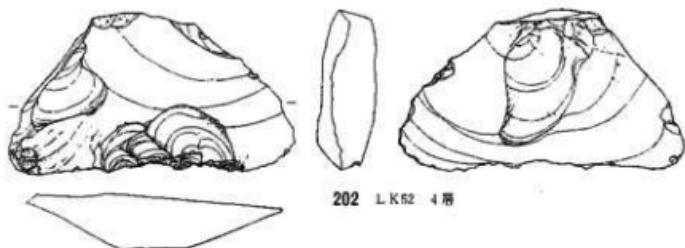
第70図 捜て場(ST 220)出土石器(3)



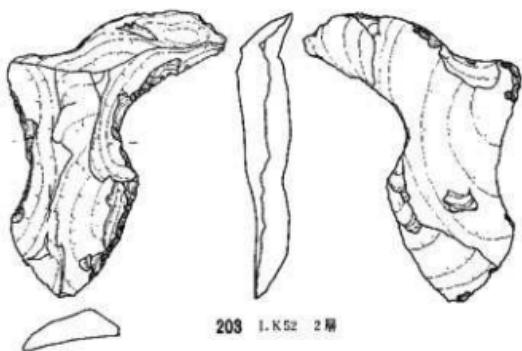
第71図 捨て場(ST220)出土石器(4)



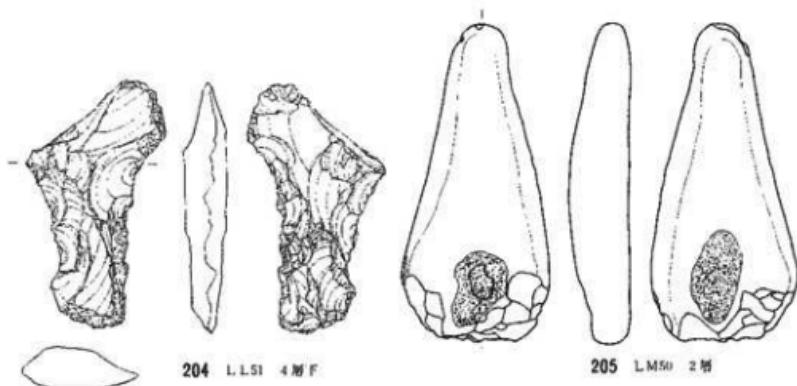
第72図 捨て場(S T 220)出土石器(5)



202 LK52 4層

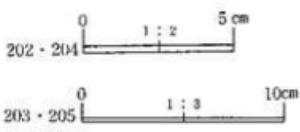


203 LK52 2層

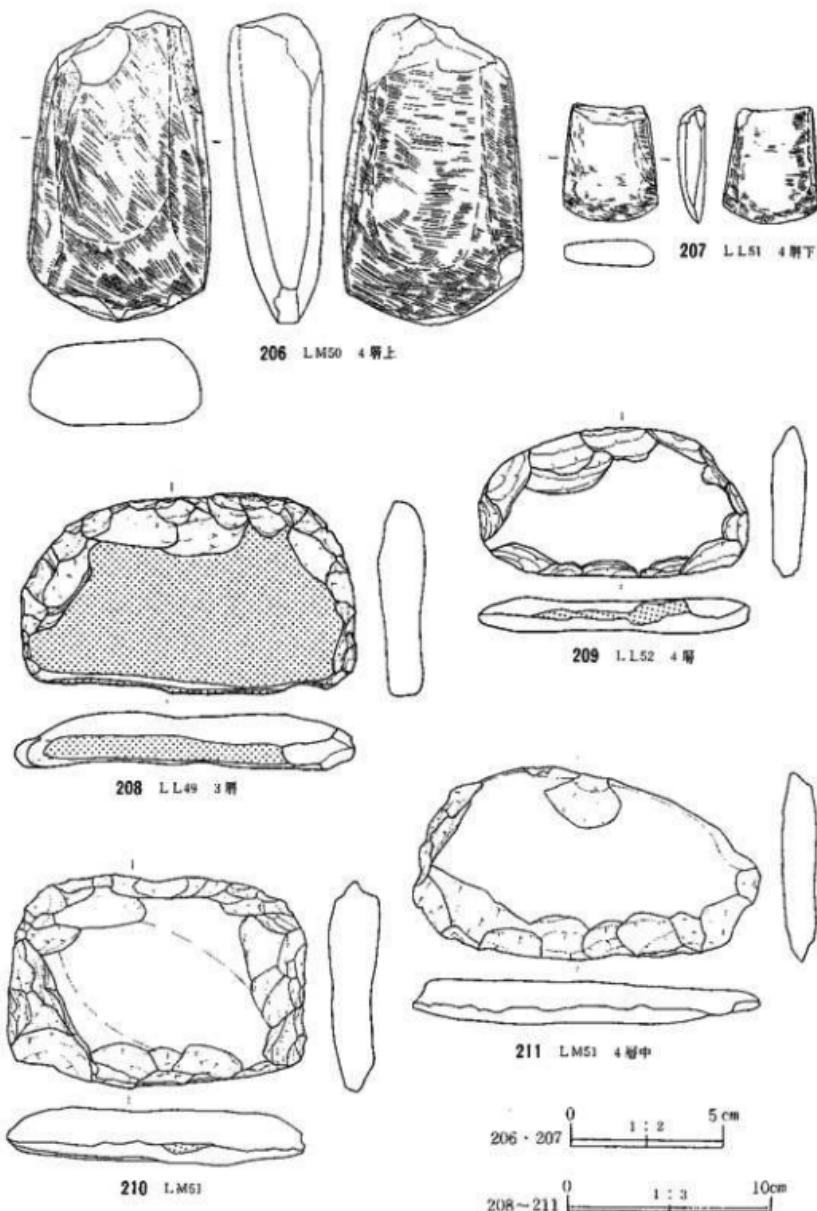


204 LL51 4層

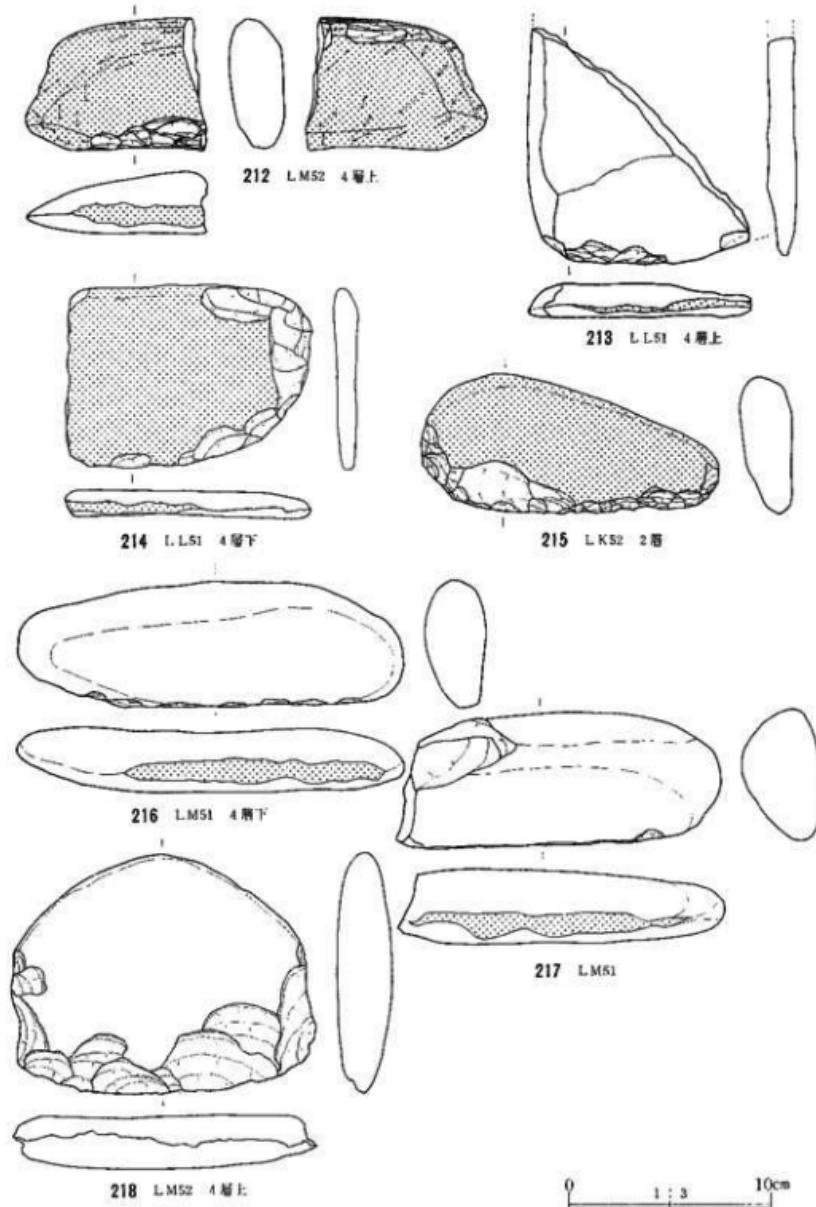
205 LM50 2層



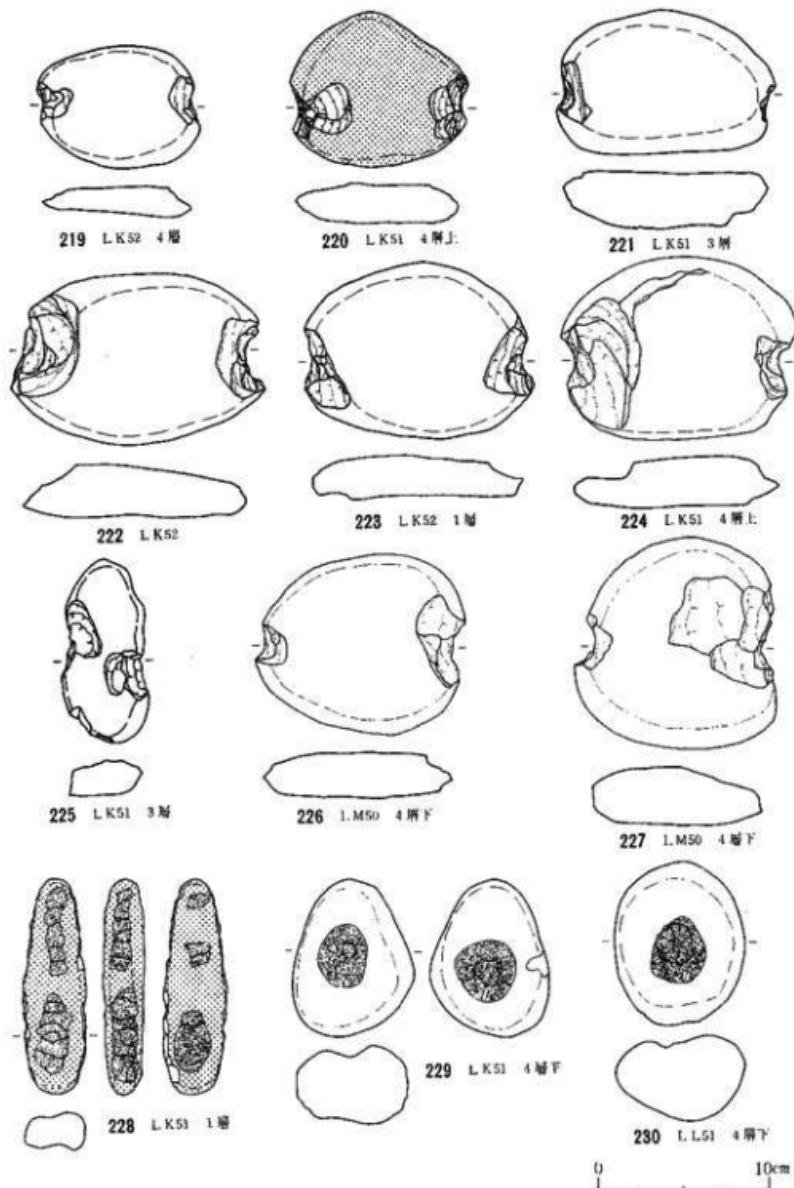
第73図 捨て場(S T 220)出土石器(6)



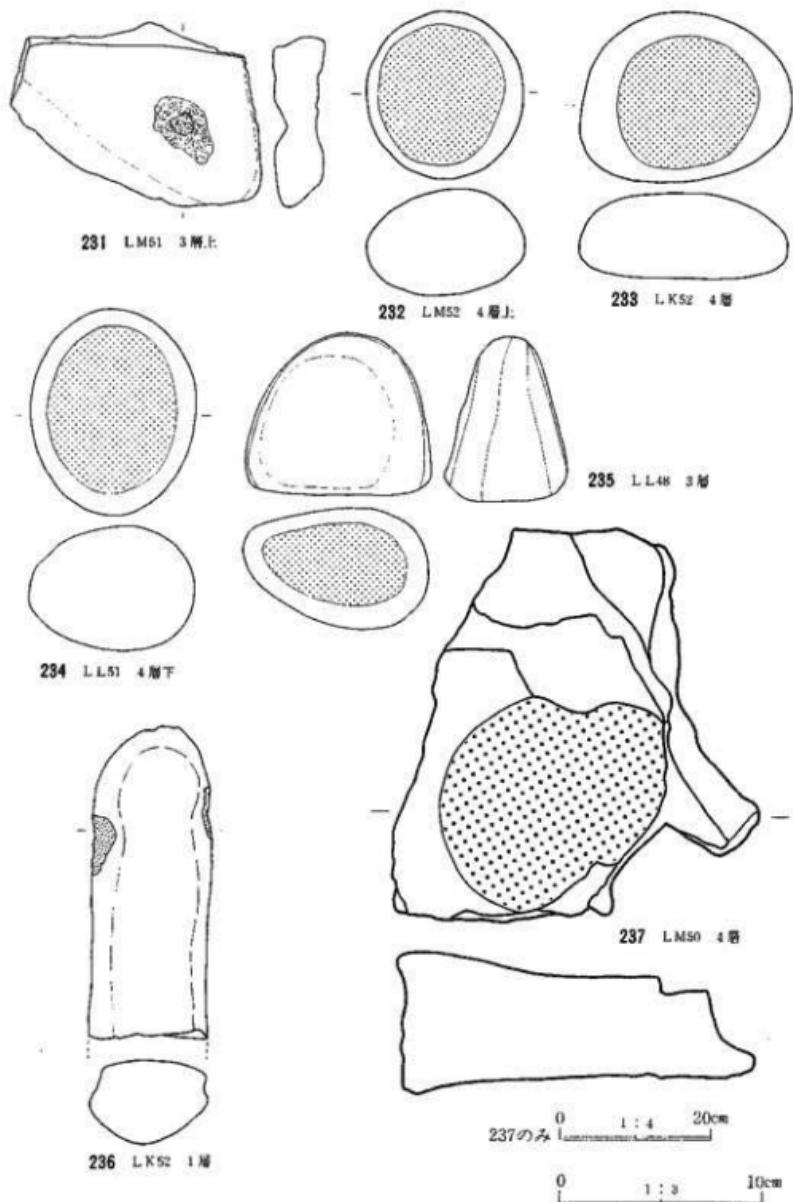
第74図 捨て場(ST 220)出土石器(7)



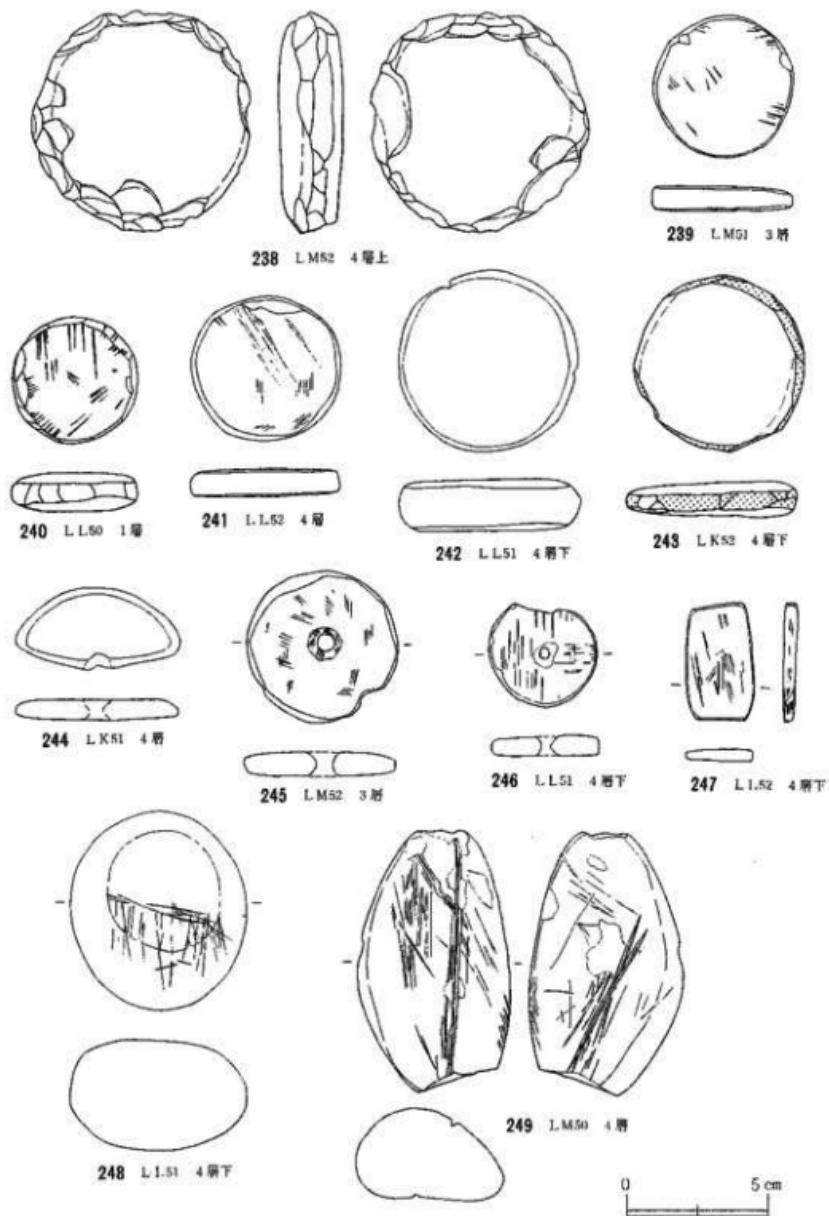
第75図 捨て場(S T 220)出土石器(8)



第76図 捨て場(ST 220)出土石器(9)



第77図 捨て場(ST 220)出土石器(10)



第78図 捜て場(ST 220)出土石器(11)

第5章 まとめ

上ノ山I遺跡は、前述のように昭和62年度に第1次発掘調査(以下、「1次調査」と略す)を実施しており、今回は第2次発掘調査(以下「2次調査」と略す)になる。遺跡は舌状台地の先端部に位置しており、上位・下位2段の平坦面が形成されている。1次調査では上位平坦面西端の一部と下位平坦面を調査し、竪穴住居跡や土坑、竪穴状遺構、捨て場を検出している。^(註1)

2次調査では上位平坦面西端の東側隣接地を調査し、上記のような遺構を検出し、ほぼ同じ繩文時代早期～中期・晚期、弥生時代などの遺物が出土して、1次調査の結果をあとづけた事になった。ここでは1次調査の結果を若干加味し、2次調査の結果から、いくつかの問題点を抽出して検討し、まとめにかえたい。

1 遺物について

(1) 土器

出土した土器のうち、第I群 早期の土器、第II群 前期の土器、第III群 前期末～中期初頭の土器、第IV群 中期前葉の土器に分類した各土器群の編年上の位置付けを考えてみることにする。なお、第II～IV群の円筒下層式～円筒上層式については、山内清男によって、円筒下層式は4細別、円筒上層式は2細別されているが、ここでは、最近までの研究成果をも勘案して、円筒下層式を下層a、b、c、d₁、d₂と5細分して呼称することとする。第II～IV群土器は時期毎に分けた変遷模式図(第79・80図)によって主にまとめてみる。なお、変遷模式図の番号は、挿図中の土器番号と一致する。

第I群土器は早期中葉の土器群である。5類に細分されるが第1類は東北北部のムシリI式に比定され、細い粘土紐を貼り付けた細隆起線により幾何学的な文様を施す特徴をもつ。東北中南部では櫛木1式と呼ばれる。本遺跡の1次調査でもムシリI式に比定される資料が1点出土しているが、県内では他に河辺町上祭沢遺跡から、櫛木1式の範疇で理解される資料が出土している。^(註2)また、本荘市神沢海岸遺跡のB群土器にも類例を求めることができる。第2類土器は第1類の幾何学的な細隆起線文が沈線に置換された土器である。第3類土器は条痕文を施文した後、沈線文を施文したもので、第4・5類と同様に本土器群のバラエティとして考えられる。ただ、第3類に一括した203～206は波状口縁で、他の土器に比較して太く、やや深めの沈線を施文する点で異なる。

第II群は前期の土器である。236～239(第2類a～ア・イ)は内面に条痕文を施文しているが、240(第2類a～ウ)のようにまれに撚糸文を施文している土器もある。236～240とも外面には

縄文か燃糸文、もしくは239のようにまれに縄文と条痕文を施文している土器もある。胎土には、いずれも纖維が混入している。295・297・304(第4類a)は隆帯上に刻目あるいは指頭圧痕文を施文し、口縁部が大きく外反しており、口唇部に刻目あるいは指頭圧痕文を有するもの(295・304)と、無いもの(297)がある。破片資料が多く器形は判然としないが、内面に条痕文をもつ土器(236~239)は、円筒下層a式土器の前に編年されている深郷田式に類例が求められる。また、隆帯上に指頭圧痕文を施文(295・297)し、頭部から大きく外反する土器(295・297・304)は、内面に条痕文を有する前者の土器を含めて茂屋下岱式土器群と呼ばれている。この一群の中には指頭圧痕文を施文した隆帯をもち、胸部が大きく張り出す器形の土器も含まれている。409は胸部下半~底部の資料ではあるが、器厚や胎土、器形が類似していることから、茂屋下岱式土器群の中で考えて大過ないとおもわれる。

241・243・248・249・250・251・252(第2類b)は隆帯や口縁部文様帶がなく、燃糸文を施文している土器である。器形は243のように、底部が小さく、胸部が外に直線的に立ち上がり、口縁部がひらく深鉢形土器や、249のように底径と口径の差があまりなく、ほぼ円筒形を呈するものがある。241・250は小型の深鉢形土器で、口唇部に刻目をもつ。251・252は口唇部に刻目をもたないが、241・250と同じ器形をもつ小型の深鉢形土器である。250~252は波状口縁を呈する。248も同じ燃糸文を施文する土器であるが、上記の土器に比較して大ぶりで、胸部中央からやや上位でわずかに外にふくらみ、器厚もやや厚い。247は底部は無いが、248に比較してやや小ぶりで、胸部上半から下は丸みをもって底部に至るものであろう。282(第3類a)は隆帯が無く、口縁部に不整燃糸文を施文しているもので、器形は前述の248(第2類b)に似る。308・309(第4類b)は隆帯を有し、口縁部文様帶に燃糸文を施文する土器である。この類には、口縁部文様帶に不整燃糸文を施文するものも多い。129(第Ⅳ群)は胸部下半~底部の資料で、底はやや上げ底ぎみで、底縁がやや張り出し、胸部が丸みをもつ器形である。底部外面には縄文が施文されている。

以上の土器群は、口唇部に刻目や、面取りされたように平坦面をなすものが多く、内面には凹凸が多い。また、底部は底縁がやや張り出し、上げ底か上げ底ぎみのものが多く、焼成は良好であるという特徴をもつことから円筒下層a式と考えられる。

292・293(第4類a)、319・320・321・327(第4類c)は主に隆帯を区画帶とし、隆帯上に指頭圧痕文や爪形文などを施すもので、円筒下層b式と考えられる土器である。292・293は前述の円筒下層a式とした308・309と同じ器形の土器であるが、口唇部に刻目がなく、口縁部がやや外反している。319も同じ特徴をもつ。320・421・327は、口縁部文様帶に羽状縄文を施文し、隆帯や隆帯間および隆帯上下に爪形文を施文し、口縁部がやや外反する土器で、大型のものが多い。この特徴をもつ土器は、秋田県北部の米代川流域に多く分布していることが、知られて

いる。

355・356(第5類b-ア)は、口縁部に縄文原体の側面圧痕を鋸歯状に施文して、幅の広い文様帯を構成している深鉢形土器で、円筒下層c式に比定される。内面は研磨され平滑で、焼成は良好である。数は全体量からすれば極めて少ない。

1(第10図)・42(第21図)・337(第5類a-ア)は狭い口縁部文様帯に、縄文原体の側面圧痕を横位に數条施文しており、円筒下層d式土器と考えられる。内面は研磨されて平滑で、焼成は良好である。273(第2類e)は口縁部～胴部に結束のある羽状縄文を施文後、口唇部下端に平行する2列の刺突を部分的に施文するもので、口唇部には縄文の側面圧痕を施文している。内面は研磨され平滑で、焼成は大変良好である。この土器も円筒下層d式と思われる。

61(第21図)は波状口縁で、波頂部から垂下する粘土紐を貼付し、口縁部に3条1組の縄文原体の側面圧痕を3組施文する土器である。3(第10図)は低い隆帯を有し、頭部がくびれ、口縁部が外反する土器である。366(第5類c)は口縁部に縦位・横位に縄文原体の側面圧痕を施文し、頭部が内弯して口縁部で立ち上がる器形と思われる。3・61・366は文様・器形から円筒下層d式と考えられる。2(第10図-第一6類f)と371(第6類a)は円筒土器にはない器形の土器である。2は胴部が膨らみ、口縁部がキャリバー状を呈する土器である。口縁部には細い粘土紐を貼付し、胴部には刺突文や沈線文が施文された土器で、S I 213堅穴住居跡の床面から3(円筒下層d式)の土器と共に出土している。この土器は大木6式に比定され、吹浦式とも^(註11)呼ばれている。青森県・大平遺跡にも類例を求める事ができる。^(註12)371(第6類a)は、口縁部が4単位の波状を呈し、胴部に最大径のある土器である。頭部がややくびれ、口唇部は緩く外反するが波状部分は内傾する。頭部には爪形文を施す隆帯をもち、口縁部文様帯に刺突文を施文しており、大木6式土器に似た特徴をもつ。胴部には円筒下層式土器の特徴である木目状撻糸文を施文していることから、大木6式土器の影響を強く受けた土器と思われる。県内では、^(註13)大野地貝塚に類例を求める事ができる。

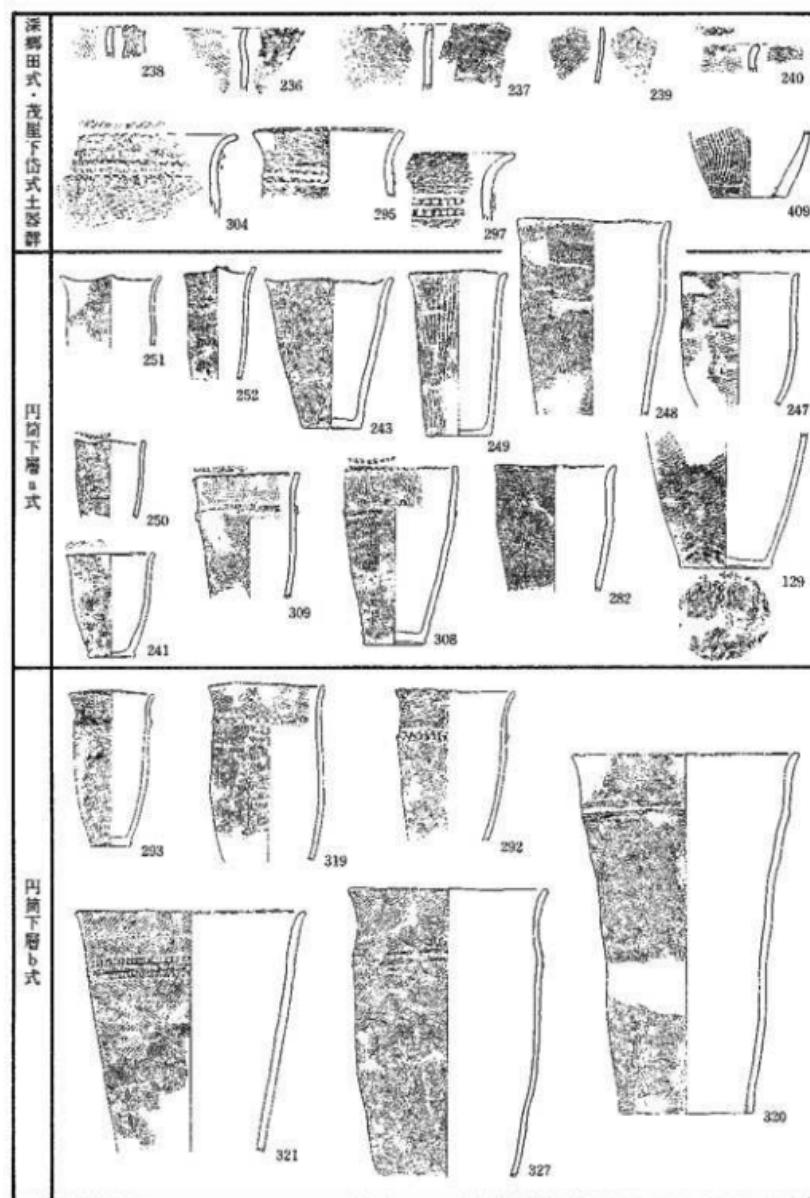
第III群土器は前期末葉から中期初頭と思われる土器で、S I 233堅穴住居跡より出土した。35(第1類)は口縁部に縄文原体の側面圧痕文とボタン状貼付文を施文し、比較的狭い文様帯をもつ、複合口縁の深鉢形土器である。この土器は円筒上層a式のメルクマールとなっているボタン状貼付文をもつものの、口縁部文様帯の幅は上層a式ほど広くなく、隆帯もない。33(第2類)は、橋状把手(4単位)をもち、1条の隆帯で画された口縁部文様帯に横位の絡条体圧痕文とボタン状貼付文を施文する深鉢形土器で、円筒上層a式に近い要素を多くもつものの、文様帯の幅が円筒上層a式より狭く、円筒下層d式に近い要素もある。以上の様に、33・35は円筒下層d式土器と円筒上層a式土器の特徴を合わせ持っている事から、円筒下層d式から円筒上層a式への移行期の土器と思われる。

155(第25図)・379・381・383・385・387は中期前半と考えられる第Ⅳ群土器である。いずれも破片で全体の器形の解るものはない。383・385(第1類)は、口縁部に繩文原体の側面圧痕文を横位や梢円形に施文するものである。385は弁状突起下の隆帯間にボタン状貼付文風の粘土粒を充填し、その上に繩文原体の側面圧痕文を渦巻状に施文している。383は口縁部の突起下に、橋状把手を貼付した土器と思われる。以上のように、ボタン状貼付文風の粘土粒上に渦巻状の繩文原体の側面圧痕文を施文する特徴は、円筒上層b式の要素も含んでいるが、弁状突起^(窓)や橋状把手をもつ特徴から円筒上層a式の範疇に納まると思われる。155、379、381(第2類)は、半截竹管による爪形文と繩文原体の側面圧痕による爪形文を施文する土器である。379、381は口縁部に突起をもち、口縁部に繩文原体の側面圧痕による爪形文を施文する円筒上層b式土器である。155は平口縁の深鉢形土器で、口縁部に施文された山形状の粘土紐間に、繩文原体の側面圧痕による爪形文と半截竹管による爪形文を施文する土器である。半截竹管による爪形文は円筒上層c式のメルクマールとなっているが、155には両手法による爪形文が同時に施文されていることや口縁部文様帶が胴部上半まで及んでいないことから、円筒上層b式の範疇でとらえられるものと思われる。387は、口縁部に爪形文、繩文原体や絡条体の圧痕文を施文していないが、山形状の粘土紐を貼付していることから、155と同じ仲間と考えられる。

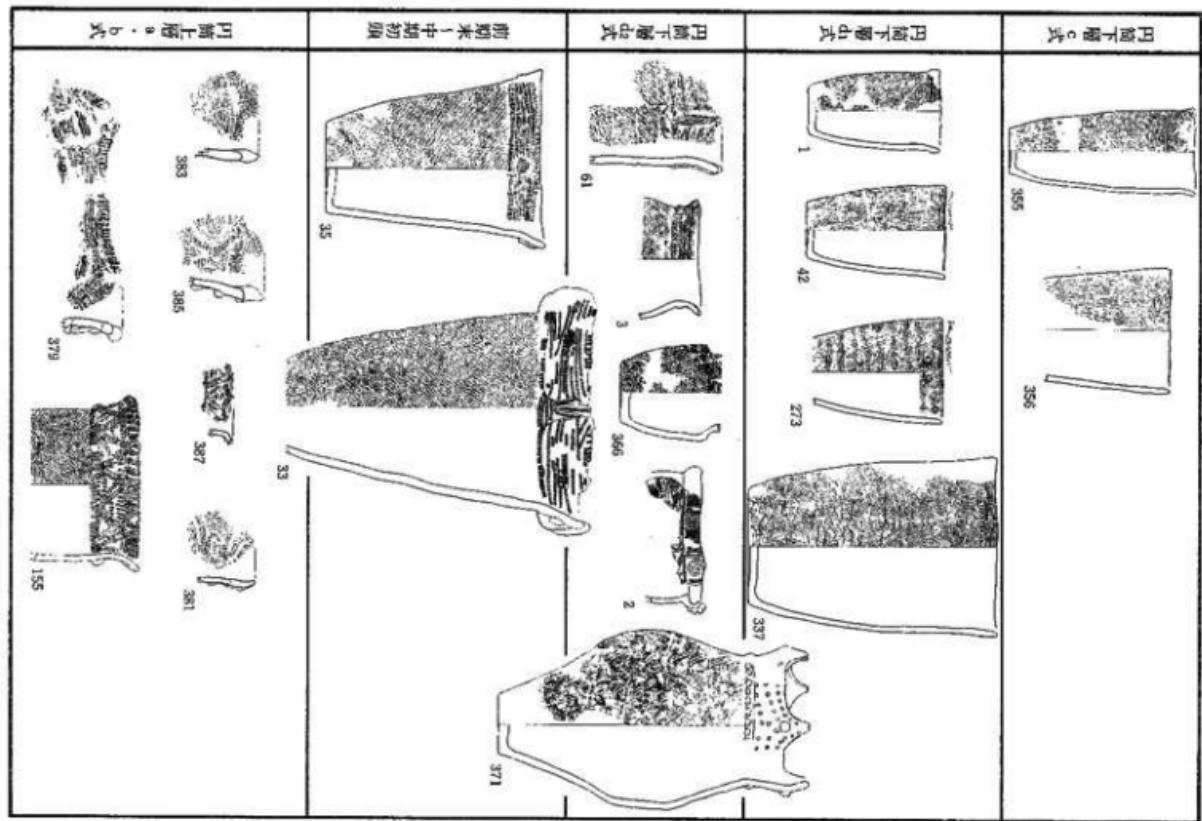
以上、2次調査で出土した前期～中期の土器についてその変遷を概観したが、細分した土器個々には十分な検討ができず、1次調査や同時期の周辺遺跡との比較もほとんどできなかった。よって、誤認している部分や説明不足の点も多々あるかと思われるが、それは次の機会に補訂したいと考えている。

(2)石器・石製品

石器と石製品は、遺構内から135点、上部平坦面の遺構外から41点、斜面の捨て場から257点の計433点出土したが、再利用されているものをそれぞれの器種に加算すると、①剝片石器類として、石鏃6点、石槍19点、石錐6点、石匙48点、箆状石器28点、搔器31点、削器55点、異形石器10点、打製石斧1点、磨製石斧10点の10種214点、②礫石器類として、半円状偏平打製石器44点、石錘50点、凹石41点、擦石30点、石刀状石製品3点、擂粉木状石製品4点、石棒状石器1点、蔽石1点、石皿25点、台石9点の10種208点、③石製品として、円盤状石製品13点、長方形石製品1点、刻線石3点の3種17点の計439点となる。各器種は、形態等から幾つかに分類される。また、剝片は、遺構内から362点、上部平坦面の遺構外から50点、斜面の捨て場から2085点の計2497点が、礫は、遺構内から57点、上部平坦面の遺構外から49点、斜面の捨て場から681点の計787点出土した。



第79図 上ノ山I遺跡(第2次)出土土器変遷模式図(1) (前期～中期)



第80図 上ノ山I遺跡(第2次)出土器変遷模式図(2)(前期～中期)

(3)捨て場出土土器の類別・層別の出土比率について

次に捨て場出土土器の類別・層別の出土比率を表にまとめてみたので、それについて考えてみることにする。捨て場から多量の遺物が出土したことは、既に述べた。捨て場は急斜面に形成されていて、土層は表土から地山漸移層までの深さが最深部で240cmあり、10層に分層できた。各層は斜面途中で層が途切れたり、新しい層が形成されていたりして波状になっている部分も見受けられ、時期の異なる土器の混在が認められる場合もあった。このうち多量に出土したのは第3～7層で、厚い部分では60～80cmほどになる。土色は全体的に黒～褐色土を呈し、軽石粒・塊が混入している。遺物の採り上げは層位毎に行ったが、類似した土色・土性のため、平面的には見分けがかなり難しい。そのため、第4～7層の厚い所は第4層として、上・中・下に分け、第8層は第5層、第9層は第6層として採り上げた。

統計をとるにあたっては以下のようにした。1：対象とした場所は層厚があり、最も土器が多く出土した東西の51ライン、つまりL K51・L L51・LM51の各グリッドである。2：各類別の対象は分類可能な口縁部に限った。3：土器は7群に分類しているが、対象は出土土器の主体をなす繩文時代前期(第II群)～中期(第IV群)までとした。なお、耕作土である第1層と、出土しなかった第6層と第III群土器は表から除外した。以下、表(第2・3表)によってその傾向をみていくことにしたい。

第II群第2類は、下位の第4層(「第4層上・中・下」を含めて呼称する)以下、同じ)からの出土比率が高い(34.3%)が、上位の第2・3層からの比率(9.6%)も少なくない。また、斜面中位から下位のL L51・LM51グリッドでは、斜面上位のL K51グリッドよりも比率が高いが、これはL K51グリッドは層厚があまりなく、L L51・LM51グリッドは層厚が増して、遺物の包含量が多かったことに起因するものであろう。第II群第3類土器の出土比率は前者の第2類と似た傾向を示す。ただ、類別の計は第2類の半分ほど(23.0%)である。第II群第4類も第2・3類と似た傾向にあるが、類別の計はさらに比率が減り、第3類の半分強(15.8%)である。第II群第5類も出土比率の傾向は第3・4類と変わらない。

次に第IV群土器であるが、その数は激減し、4点のみである。第4層から3点出土し、第2層からは1点出土している。

以上、分類した土器の層別の出土比率をみてきたが、時期の異なる新旧の土器が第4層に多く、その上の第2・3層からも少なからず出土している事が解った。これは土砂や土器等が捨てられ斜面を滑り落ちた時に起きた、伏流現象などに因るものと推定される。

第2表 捨て場出土土器類別・層位別破片数表-51ライン-(1)

掲り上げ層位 分類・グリッド		2層	3層	4層上	4層中	4層下	4層小計	5層	各グリッド合計	合計
II-1	LK51	-	-	-	-	-	-	-	-	2 (0.4)
	LL51	-	-	-	-	1 (0.2)	1 (0.2)	-	1 (0.2)	
	LM51	-	-	-	-	1 (0.2)	1 (0.2)	-	1 (0.2)	
II-2-a	LK51	-	2 (0.4)	1 (0.2)	2 (0.4)	1 (0.2)	4 (0.8)	-	6 (1.2)	15 (3.0)
	LL51	-	3 (0.6)	-	-	1 (0.2)	1 (0.2)	-	4 (0.8)	
	LM51	-	-	-	1 (0.2)	3 (0.6)	4 (0.8)	1 (0.2)	5 (1.0)	
II-2-b	LK51	3 (0.6)	7 (1.4)	3 (0.6)	1 (0.2)	1 (0.2)	5 (1.0)	-	15 (3.0)	57 (11.3)
	LL51	-	3 (0.6)	-	1 (0.2)	22 (4.4)	23 (4.6)	-	26 (5.1)	
	LM51	-	1 (0.2)	-	16 (1.0)	5 (1.0)	15 (3.0)	-	16 (3.2)	
II-2-c	LK51	4 (0.5)	6 (1.2)	5 (1.0)	-	1 (0.2)	6 (1.2)	-	16 (3.2)	77 (15.2)
	LL51	3 (0.6)	3 (0.6)	-	1 (0.2)	20 (4.0)	23 (4.2)	-	27 (5.3)	
	LM51	-	-	-	17 (3.4)	15 (3.0)	32 (6.3)	2 (0.4)	34 (6.7)	
II-2-d	LK51	-	2 (0.4)	1 (0.2)	-	-	1 (0.2)	-	3 (0.6)	26 (5.1)
	LL51	-	2 (0.4)	-	-	5 (1.0)	5 (1.0)	-	7 (1.4)	
	LM51	1 (0.2)	-	-	4 (0.8)	11 (2.2)	15 (3.0)	-	16 (3.2)	
II-2-e	LK51	-	2 (0.4)	3 (0.6)	-	1 (0.2)	4 (0.8)	-	6 (1.2)	46 (9.1)
	LL51	-	4 (0.8)	-	2 (0.4)	14 (2.8)	16 (3.2)	-	20 (4.0)	
	LM51	-	-	-	7 (1.4)	12 (2.4)	19 (3.8)	1 (0.2)	20 (4.0)	
II-2-f	LK51	-	-	-	-	-	-	-	-	4 (0.8)
	LL51	-	2 (0.4)	-	1 (0.2)	1 (0.2)	2 (0.4)	-	4 (0.8)	
	LM51	-	-	-	-	-	-	-	-	
II-2 小計	LK51	7 (1.4)	19 (3.8)	13 (3.6)	3 (0.6)	4 (0.8)	20 (4.0)	-	46 (9.1)	225 (44.6)
	LL51	3 (0.6)	17 (3.4)	-	5 (1.0)	63 (12.5)	68 (13.5)	-	88 (17.4)	
	LM51	1 (0.2)	1 (0.2)	-	39 (7.7)	46 (9.1)	85 (16.8)	4 (0.8)	91 (18.0)	
II-3-a	LK51	5 (1.0)	4 (0.8)	8 (1.6)	1 (0.2)	4 (0.8)	13 (2.6)	-	22 (4.4)	94 (18.6)
	LL51	1 (0.2)	1 (0.2)	-	3 (0.6)	31 (6.1)	34 (6.7)	-	36 (7.1)	
	LM51	-	1 (0.2)	-	16 (3.2)	16 (3.2)	32 (6.3)	3 (0.6)	36 (7.1)	
II-3-b	LK51	-	-	-	-	-	-	-	-	14 (2.8)
	LL51	-	1 (0.2)	-	-	1 (0.2)	1 (0.2)	-	2 (0.4)	
	LM51	-	-	-	4 (0.8)	8 (1.6)	12 (2.4)	-	12 (2.4)	
II-3-c	LK51	-	2 (0.4)	-	-	1 (0.2)	1 (0.2)	-	3 (0.6)	8 (1.6)
	LL51	-	-	-	-	-	-	-	-	
	LM51	-	-	-	2 (0.4)	3 (0.6)	5 (1.0)	-	5 (1.0)	
II-3 小計	LK51	5 (1.0)	6 (1.2)	8 (1.6)	1 (0.2)	5 (1.0)	14 (2.8)	-	25 (5.6)	116 (23.0)
	LL51	1 (0.2)	2 (0.4)	-	3 (0.6)	32 (6.3)	35 (6.9)	-	38 (7.5)	
	LM51	-	1 (0.2)	-	22 (4.4)	27 (5.3)	49 (9.7)	3 (0.6)	53 (10.5)	
II-4-a	LK51	-	1 (0.2)	-	1 (0.2)	1 (0.2)	2 (0.4)	-	3 (0.6)	26 (5.1)
	LL51	-	1 (0.2)	-	-	9 (1.6)	9 (1.8)	-	10 (2.0)	
	LM51	-	1 (0.2)	-	5 (1.0)	7 (1.4)	12 (2.4)	-	13 (2.6)	
II-4-b	LK51	-	1 (0.2)	1 (0.2)	-	-	1 (0.2)	-	2 (0.4)	17 (3.4)
	LL51	1 (0.2)	2 (0.4)	-	-	6 (1.2)	6 (1.2)	-	9 (1.8)	
	LM51	-	1 (0.2)	-	3 (0.6)	2 (0.4)	5 (1.0)	-	6 (1.2)	
II-4-c	LK51	-	1 (0.2)	-	-	-	-	-	1 (0.2)	23 (4.6)
	LL51	-	-	-	2 (0.4)	12 (2.4)	14 (2.8)	-	14 (2.8)	
	LM51	-	-	-	1 (0.2)	7 (1.4)	8 (1.6)	-	8 (1.6)	
II-4-d	LK51	-	1 (0.2)	1 (0.2)	-	-	1 (0.2)	-	2 (0.4)	14 (2.8)
	LL51	-	1 (0.2)	-	-	7 (1.4)	7 (1.4)	-	8 (1.6)	
	LM51	-	-	-	2 (0.4)	2 (0.4)	4 (0.8)	-	4 (0.8)	
II-4 小計	LK51	-	4 (0.8)	2 (0.4)	1 (0.2)	1 (0.2)	4 (0.8)	-	8 (1.6)	81 (15.6)
	LL51	1 (0.2)	4 (0.8)	-	2 (0.4)	34 (6.7)	36 (7.1)	-	41 (8.1)	
	LM51	-	2 (0.4)	-	11 (2.3)	18 (3.6)	29 (5.7)	-	31 (6.1)	
II-1-4 小計	LK51	12 (2.4)	29 (5.7)	23 (4.6)	5 (1.0)	10 (2.0)	38 (7.5)	-	79 (15.6)	423 (83.8)
	LL51	5 (1.0)	23 (4.6)	-	16 (2.0)	130 (25.7)	140 (27.7)	-	166 (33.3)	
	LM51	1 (0.2)	4 (0.8)	-	72 (14.3)	92 (18.2)	164 (32.5)	7 (1.4)	176 (34.9)	

添小数点以下第2位を四捨五入した。

添()内は1%を表す。

第3表 掘て場出土土器類別・層位別破片数表-51ライン-(2)

採り上げ層位 分類・グリッド	2 層	3 層	4 層上	4 層中	4 層下	4 層小計	5 層	各グリッド合計	合計	
	L K51	-	1 (0.2)	1 (0.2)	-	2 (0.4)	3 (0.6)	-	4 (0.8)	
II-5-a	L L51	3 (0.6)	1 (0.2)	2 (0.4)	2 (0.4)	5 (1.0)	-	9 (1.8)	41 (8.1)	
	L M51	4 (0.8)	8 (1.6)	-	13 (2.6)	2 (0.4)	15 (3.0)	1 (0.2)		
	L K51	-	1 (0.2)	-	-	-	-	1 (0.2)		
II-5-b	L L51	-	1 (0.2)	-	1 (0.2)	2 (0.4)	3 (0.6)	-	20 (4.0)	
	L M51	1 (0.2)	9 (1.6)	-	6 (1.2)	4 (0.8)	10 (2.0)	1 (0.2)		
	L K51	-	-	-	-	-	-	-		
II-5-c	L L51	-	-	-	1 (0.2)	1 (0.2)	2 (0.4)	-	7 (1.4)	
	L M51	1 (0.2)	-	-	2 (0.4)	2 (0.4)	4 (0.8)	-		
	L K51	-	2 (0.4)	1 (0.2)	-	2 (0.4)	3 (0.6)	-		
II-5 小計	L L51	3 (0.2)	4 (0.8)	1 (0.2)	4 (0.8)	5 (1.0)	10 (2.0)	-	68 (13.5)	
	L M51	6 (1.2)	11 (2.2)	-	21 (4.2)	8 (1.6)	29 (5.7)	2 (0.4)		
	L K51	-	-	-	-	-	-	-		
II-6	L K51	-	-	-	-	-	-	-	7 (1.4)	
	L L51	-	1 (0.2)	-	-	3 (0.6)	3 (0.6)	1 (0.2)		
	L M51	-	-	-	1 (0.2)	1 (0.2)	2 (0.4)	-		
IV-1	L K51	-	-	-	-	-	-	-	1 (0.2)	
	L L51	-	-	-	-	-	-	-		
	L M51	1 (0.2)	-	-	-	-	-	1 (0.2)		
IV-2	L K51	-	-	-	-	-	-	-	3 (0.6)	
	L L51	-	-	-	-	-	-	-		
	L M51	-	-	-	3 (0.6)	-	3 (0.6)	-		
IV-3	L K51	-	-	-	-	-	-	-	3 (0.6)	
	L L51	-	-	-	-	-	-	-		
	L M51	-	3 (0.6)	-	-	-	-	3 (0.6)		
各グリッド合計	L K51	12 (2.4)	31 (6.1)	24 (4.8)	5 (1.0)	12 (2.4)	41 (8.1)	-	84 (16.6)	505 (100)
	L L51	6 (1.2)	28 (5.5)	1 (0.2)	14 (2.8)	138 (27.3)	153 (30.0)	1 (0.2)	188 (37.2)	
	L M51	8 (1.6)	18 (3.6)	-	97 (19.2)	101 (20.0)	198 (39.2)	9 (1.8)	233 (46.1)	
合計	26 (5.1)	77 (15.2)	25 (5.0)	116 (23.0)	251 (49.7)	392 (77.6)	10 (2.0)	505 (100)	505 (100)	

※小数点以下第2位を四捨五入した。

※()内は%を表す。

2 遺跡と遺構について

本遺跡の成り立ちを考える場合、地形を考慮する必要がある。つまり、1次調査区では台地上の上位面に大小3つの沢が開析され、その沢の運ぶ軽石質火山灰(以下、「軽石」と略す)と腐植土等によって住居跡等が埋没し、その後再び生活が営まれるということを数度にわたって繰り返したことが解っている。1次調査の報告書では第Ⅰ期～第Ⅳ期まで4つに大別した遺跡の変遷が示されているので、ここでは、それに2次調査の結果をあわせて、その変遷を考えてみる(第81・82図)。

I期

下位面中央部から南寄りの部分と上位面南端が居住区域として利用される。そして、沢1～3や南東斜面(以下、ST220とする)が捨て場となっている。時期は縄文前期中葉に比定される。

II期

I期の生活面が黒色土に覆われ、その上をさらに軽石層が覆った時点で、竪穴住居跡や竪穴

状遺構が構築される。しかし、その生活面は再び軽石で覆われてしまう。時期はⅠ期のやや後である。

Ⅲ期

下位面では竪穴状遺構と全ての土坑が構築され、上位面では竪穴住居跡・土坑・竪穴状遺構が構築される。全体的に遺構が増え、生活の主体は上位面に移行する。上位面と下位面との間の沢や斜面が捨て場として利用されている。時期は縄文時代前期後半である。そして、Ⅲ期の生活面も黒色土に完全に覆われてしまう。

Ⅳ期

この頃から下位面に生活の痕跡はなくなり、全体的に遺構は激減し、上位面に竪穴住居跡が1軒存在するのみである。沢2は、まだ捨て場となっている。時期は前期末～中期初頭である。

Ⅴ期

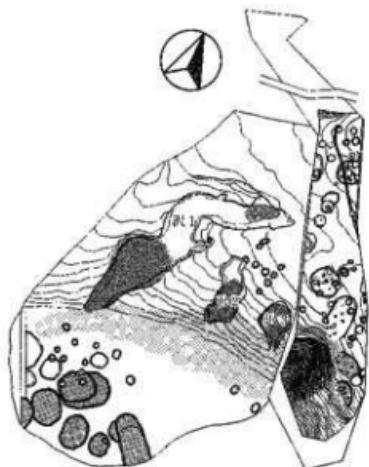
上位面に竪穴状遺構や土坑がわずかに構築される。沢1やST220が再び捨て場になっている。時期は中期前葉である。

Ⅵ期

上位面にフ拉斯コ状土坑が散見される。時期は縄文時代の晩期である。

以上のことまとめると、Ⅰ期では、上・下位面に生活した痕跡を認められるが、その主体は土砂流入の著しい下位面にある。そしてⅢ期に至って主体が下位面から上位面に移行する。さらに、Ⅰ・Ⅲ期の間、沢1～3・ST220は、捨て場として利用され続けている。Ⅳ・Ⅴ期になると遺構数は激減し、Ⅳ期では沢1が捨て場として利用され、Ⅴ期では沢1とST220に移る。

Ⅰ・Ⅲ期において、上・下位面の境に4箇所の捨て場が形成されているが、下位面には人々が住み続けている。通常、物を捨てる場合は斜面下に向かって捨てる。常に土砂が流入し、しかも上方の斜面に捨て場がある場所に何故、住み続けたのであろうか。これは、この集団に対してある規制が働いていたとも考えられ、1次調査の報告書で指摘しているように、集団の性格等を考える時極めて示唆的である。また、Ⅳ・Ⅴ期では、Ⅲ期でみられた遺構の増加現象とは逆に、上位面にのみ竪穴住居跡や竪穴状遺構が散見されるが、それにも拘わらず捨て場は沢1とST220に形成されている。これはⅠ期にも通じる現象である。1次調査区の東側隣接地には大館市教育委員会によって発掘調査した上ノ山遺跡第1～3次調査区が存在する。調査によって縄文時代前期～中期・晩期の遺構・遺物が確認されていることから、Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ期の捨て場は上ノ山遺跡第1～3次調査区の集団によって形成された事がうかがわれる。



I期 前期中葉



II期 I期のやや後

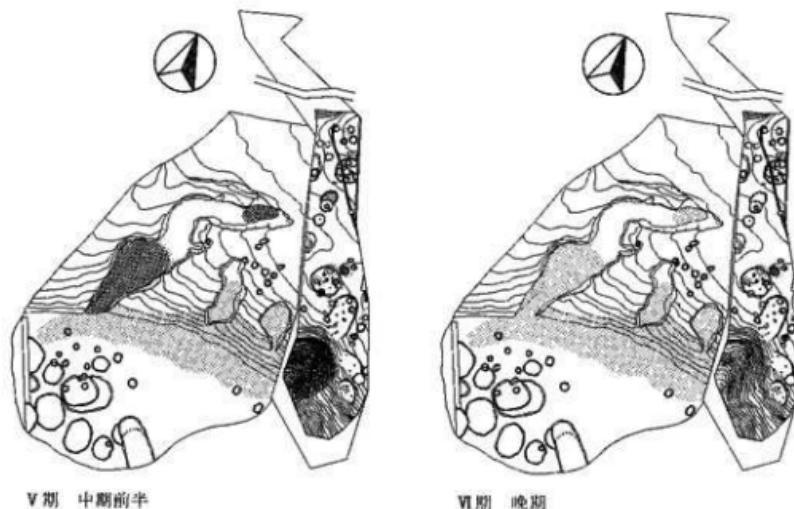


III期 前期後半



IV期 前期末～中期初頭

第81図 縄文時代前期～晩期の占地状況図(1)



第82図 繩文時代前期～晚期の占地状況図(2)

- 註1 秋田県教育委員会『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—上ノ山I遺跡・上ノ山II遺跡—』秋田県文化財調査報告書第173集 1988（昭和63年）
- 註2 山内 清男 「関東北における繩維土器」『史前学雑誌』1-2 1927（昭和4年）
- 註3 林 謙作 「繩文早前期の土器—北海道南部、東北地方」『繩文土器大成1早・前期』講談社 1982（昭和57年）
- 註4 註1と同じ
- 註5 秋田県教育委員会『高速交通開連道路整備事業(和田御所野)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—上祭沢遺跡・駒坂台I遺跡・駒坂台II遺跡—』秋田県文化財調査報告書第195集 1990（平成2年）
- 註6 本荘市教育委員会『遺跡発掘調査報告書—神沢遺跡・船岡台遺跡—』1971（昭和46年）
本荘市教育委員会『本荘市史 資料編Ⅰ上』1984（昭和59年）
- 註7 佐藤 達夫 他 『深堀田遺跡発掘概報』中里町誌 1965（昭和40年）

- 奥山 潤 「福館遺跡－大館市の縄文前期前半－」 『北海道考古学』第5輯 北海道考古学会 1969（昭和44年）
- 註8 秋田県立大館鳳鳴高等学校社会部考古学班 『茂屋下岱式土器群』 1971（昭和46年）
奥山 潤 「東北々西部の指頭圧痕文土器」 『北海道考古学』第8輯 北海道考古学会 1972（昭和47年）
- 註9 註2と同じ
- 註10 秋田県教育委員会 『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第83集 1981（昭和56年）
- 註11 興野 義一 「大木式土器理解のために(VI)」 『考古学ジャーナル』NO.48 ニュー・サイエンス社 1970（昭和45年）
- 註12 註3と同じ 図版解説70参照
- 註13 青森県教育委員会 『大平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第52集 1980（昭和55年）
福田友之 「津軽海峡の先史文化交流」 『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論叢』 伊東信雄先生追悼論文集刊行会 1990（平成2年）
- 註14 註11と同じ
- 註15 秋田県井川町教育委員会 『大野地遺跡発掘調査報告書』 1988（昭和63年）
- 註16 江坂輝彌・村越潔 『石神遺跡』 ニュー・サイエンス社 1970（昭和45年）
村越潔 『円筒土器文化』 雄山閣出版(株) 1974（昭和49年）
- 註17 註16と同じ

1991年 2月7日

秋田県埋蔵文化財センター 殿

1990年11月9日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。
 なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期として LIBBY の半減期 5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE S IGMA)に相当する年代です。また試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)について計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

<u>Code No.</u>	<u>試料</u>	<u>年代(1950年よりの年数)</u>
GaK-15320	Charcoal from 上ノ山 I 遺跡	5370 ± 130
	2 KNY I - 2 次 S I 213 墓土	3420 B.C.
GaK-15321	Charcoal from 上ノ山 I 遺跡	4220 ± 110
	2 KNY I - 2 次 SK-215 墓土	2270 B.C.

以上

木越邦彦



1 遺跡遠景（西▷）



2 S D 200、SKF 201~207検出状況（南▷）



3 調査状況（北▷）



1 S I 213 壓穴住居跡 完掘 (北△)



2 S I 226 壓穴住居跡 完掘 (北△)



3 S I 227 壓穴住居跡 完掘 (北△)



1 S 1232壁穴住居跡 完掘 (北△)



2 S 1233壁穴住居跡 完掘 (北△)

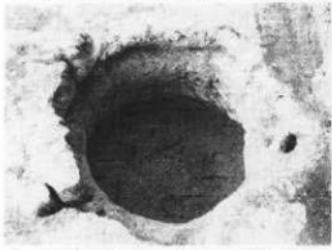


3 S 1233壁穴住居跡 炉 (西△)

図版
4



1 SKF201 フラスコ状土坑 完掘 (南▷)



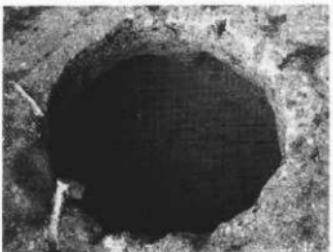
2 SKF202 フラスコ状土坑 完掘 (南▷)



3 SKF203 フラスコ状土坑 完掘 (南▷)



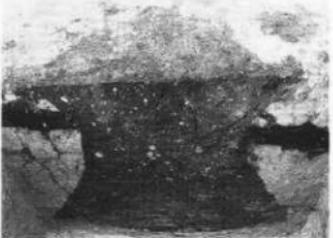
4 SKF204 フラスコ状土坑 完掘 (南▷)



5 SKF205 フラスコ状土坑 完掘 (南▷)



6 SKF206 フラスコ状土坑 完掘 (南▷)



7 SKF207 フラスコ状土坑 完掘 (南▷)



8 SKF208 フラスコ状土坑 完掘 (南▷)

あとがき

本遺跡西側は、高低差15mはあろうかという切り通しになっており、淵にはトラロープを張ったり、台風による大雨では崖崩れを心配したりと、当然のことながら作業の安全には特に気を配って調査を進めました。もう一つ気をつけたのが、遺構の精査で、埋土が地山主体となっている遺構が数多くあり、地山と壁の判別がつけにくく予定よりも時間を要してしまいました。最終的には、遺構精査の難しさと捨て場の土器や石器、土量の多さにより、調査期間は予定より3日間の延長となりました。しかし、幸い一つの事故もなく、調査を無事終了することができ安堵しております。また、遺物整理作業も、短期間ながら、なんとか刊行にこぎつけることができました。これもひとえに発掘調査作業や整理作業に従事してくれた方々のおかげであります。以下、芳名を記して感謝の意を表します。

発掘作業従事者

安藤 一二 安藤 ハル 安彦 梅春 泉 源太 太田 稔 斎藤 幸三 斎藤 由松
佐藤 タネ 佐藤 長蔵 佐々木正年 下山 良治 下山 キヌ 相馬ウメ子 高松 ミワ
中西 レツ 中村藤二郎 長枝 由松 成田ユキエ 鳴滝志恵藏 嶋沢 義男 福士 隆一
藤岡 敏子 古川善次郎 松岡てるえ 山内 和子 山内 幸子 山口マツエ 山本喜代一
渡部 定之 渡辺 貞一

整理作業従事者

伊藤 昭彦 大西 英子 錦田 栄子 川原 礼子 木元 俊子 小林 悟 小松 郁子
小松 瞳子 小柳 和子 斎藤美江子 佐々木 薫 佐藤せい子 佐藤 蘭子 嶋津 竜子
鈴木 孝子 高橋江美子 高橋早百合 高橋フサ子 高橋 亨子 田口由喜子 田村 ツナ
野村 江子 藤田 悅子 町田 京子 森川たま子 森元 京子 森元てる子

(五十音順・敬称略)

秋田県文化財調査報告書第211集
国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財調査報告書IV

——上ノ山I遺跡第2次調査——

印刷・発行 平成3年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

電話 (0186)69-3331

発 行 秋田県教育委員会

〒010 秋田市山王四丁目1番2号

電話 (0188)60-3193

印 刷 秋田活版印刷㈱